

嘉 穂 地 区 遺 跡 群 VII

アミダ遺跡

福岡県嘉穂郡嘉穂町所在遺跡の発掘調査

嘉穂町文化財調査報告書

第 10 集

1989

嘉 穂 町 教 育 委 員 会

序

本書は昭和63年度県営嘉穂地区及び千手地区圃場整備事業に伴う嘉穂地区遺跡群発掘調査の記録です。

今回の調査では、縄文時代から歴史時代に及ぶ多数の遺構や遺物が検出されました。中でも千手地区のアミダ遺跡は、縄文時代の集落跡がほぼ完全な状況で検出され、九州でも初めての発見として注目を浴びました。

本書は、アミダ遺跡での成果を中心に報告しており、学術研究科の一助となれば幸いと存じます。

なお、発掘調査にあたり、各関係者の方々ご協力に対し深甚なる感謝の意を表します。

平成元年3月31日

嘉穂町教育委員会

教育長 矢野良朔

例 言

1. 本書は、県営嘉穂地区及び千手地区團場整備事業に伴う事前調査として実施した緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は、嘉穂町教育委員会が昭和63年度に「嘉穂地区遺跡群（馬見、大力地区）発掘調査」として国、県の補助を受け、福岡県教育委員会の援助を得て実施した。
3. 遺構及び遺物の実測は、伊藤寿子、伊藤久枝、山本敦子、梅木道代諸氏の協力を得て福島に行った。製図は伊藤久枝、梅木道代両氏の協力を得た、遺構及び遺物写真は福島が行った。
4. 題字は嘉穂町教育委員会梅根忠富氏による。
5. 本書の執筆と編集は福島がたった。

本文目次

アミダ遺跡	
Ⅰ はじめに	1
Ⅱ 遺跡の位置と環境	3
1 遺跡の立地	3
2 千手盆地及びその周辺の遺跡	3
Ⅲ 遺跡の概観	4
1 遺構の分布	4
2 遺物の出土状況	4
Ⅳ 遺構と遺物	6
1 遺構	6
(1) 竪穴住居跡	6
(2) 屋外炉	19
(3) 集石遺構	20
(4) 屋内埋甕	21
(5) 屋外埋甕	21
2 遺物	23
(1) 遺構内出土土器	23
a. 土器片の分類	23
b. 完形土器	27
(2) 埋甕	63
(3) 石器	64
V 結語	80
1 縄文時代後期後半から晩期前半にかけての土器群の整理	80
(1) はじめに	80
(2) 器形について	80
(3) 文様帯と文様について	81
(4) 土器群の型式比定	81
(5) おわりに	82
2 集落構造の分析と考察	83
(1) はじめに	83
(2) 集落の形成とその段階的意味	83
(3) 群構成とその解釈	84
a. 中央広場の存在	84
b. 屋外炉と集石遺構	85

I はじめに

本調査は、県営圃場整備事業に伴う事前の緊急調査として、町が国及び県の補助を受け実施したもので、昭和58年度からの継続事業である。遺跡は福岡県嘉穂郡嘉穂町大字馬見字本村、大字馬見字二本楠、大字大力字アミダの各所に所在する。

昭和56年3月、嘉穂町経済課より県教育委員会文化課あてに、嘉穂地区圃場整備事業予定地内の埋蔵文化財の有無について文書による協議がなされた。県文化課による現地での分布調査では、多数の遺跡群の分布が明らかとなった。

昭和60年3月には、千手地区圃場整備事業予定地内の埋蔵文化財について、県文化課、町教育委員会とで現地での分布調査を行い、多数の遺跡群の存在が確認された。

昭和63年1月、文化財の所在等をより明確にするために試掘調査が行われた。その結果をもとに県文化課、県農地整備課、町農林整備課、町教委、嘉穂並びに千手土地改良区の六者で切り盛り計画の変更を含めた上で、文化財保護を前提とした協議が行われた。その結果、やむなく削平が遺構面に及ぶ12,000m²の地区について発掘を実施することとなった。

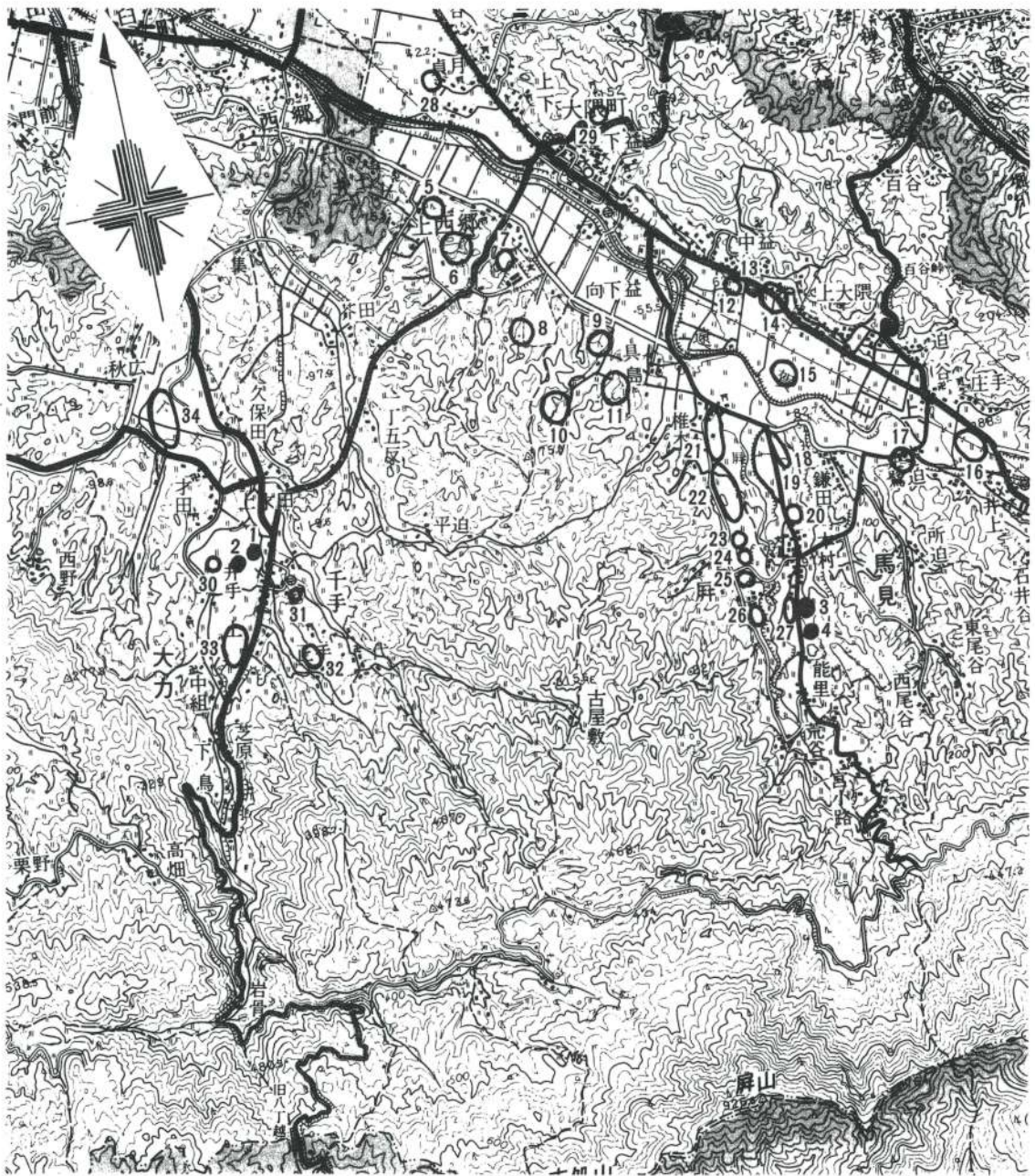
発掘調査は、町が調査主体となり昭和63年4月1日から平成元年3月31日の間で実施した。調査関係者は下記のとおりである。

総括	嘉穂町教育委員会	教育長	矢野良朔
庶務担当	同	社会教育課長	大谷清人
	同	同係長	松岡伊三次
	同	同社会教育係	有田芳行
	同	同	大塚由紀
	同	同指導員	大里富美雄
調査担当	同	同社会教育係	福島日出海

特に県文化課、県農地整備課、町農林整備課、工事関係者はじめ、嘉穂土地改良区ならびに千手土地改良区の方々、また発掘作業に従事していただいた地元の方々、整理作業にあたられた方々に対し、記して謝意を表します。

発掘作業員名（順不同）

松岡ハル子、大河内ツネ子、縄田菊江、井上キヨ子、松岡タミ、靱井ミドリ、江藤ツルエ、靱井モモエ、縄田富士子、円入勝子、浜藤千郷、田中初子、大塚ミユキ、柴田スマ子、松尾タカエ、長野ミサオ、正中サカエ、山本ハジメ、伏貫シメ子、長野ミツキ、梶原ヒサエ、正中ヨシエ、山本節子、福本ひとみ、山本敦子、伊藤寿子、伊藤久枝、梅木道代



- | | | | | |
|---------------|------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. アミダ遺跡 | 2. アミダ南遺跡 | 3. 馬見本村東遺跡 | 4. 二本楠遺跡 | 5・6. 古墳群 |
| 7. 久吉古墳群 | 8. 西ケサコ古墳群 | 9. 杉坂古墳群A | 10. 杉坂古墳群B | 11. 具島古墳群 |
| 12. 井手遺跡 | 13. 柿本遺跡 | 14. 穴江・塚田遺跡 | 15. 榎町遺跡 | 16. 勘高遺跡 |
| 17. 鷺迫遺跡 | 18. 原田東遺跡 | 19. 原田遺跡 | 20. 平塚遺跡 | 21. 椎木本村遺跡 |
| 22. 上椎遺跡 | 23. タタラ遺跡 | 24. 宮ノ脇遺跡 | 25. 屏遺跡(仮称) | 26. 浄土寺遺跡 |
| 27. 馬見本村遺跡 | 28. 森分遺跡 | 29. 太閤坂古墳 | 30. イカマクチ遺跡 | 33. 大力遺跡(仮称) |
| 31. 千手小学校校庭遺跡 | 32. 庄手遺跡 | | | |
| 34. 才田遺跡群 | | | | |

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

古処山のふところに源を発する千手川と横町川は、西流しやや蛇行をえがきながら、千手盆地で合流し、千手川本流となりつつ、盆地を横断し、やがて碓井町、稲築町と流れ遠賀川に合流する。急流となって山稜の間を下り、やがて嘉穂盆地に流れ込む際に、流れは急に速度を変え緩な流れとなり、その流路に扇状地を形成する。さらにその下流域には、河岸段丘と沖積地の二つの地形を残すこととなる。現在の千手盆地は、大力と千手の両地区が扇状地で大半を占め、才田地区は河岸段丘が多く、九郎原地区は沖積地となっている。

アミダ遺跡は、扇状地の末端に位置しており、横町川に沿って延びる舌状に発達した台地上に遺跡はのっている。沖積地との比高差は約8.5m程で、遺跡の北150mの地点で千手川と横町川が合流している。ちなみに、合流点は水深があって、川魚が多く生息していたと聞く。

アミダ遺跡をとりまく環境についてふれてみたい。縄文時代後期は現在の遠賀川の中流域付近まで海岸線が進行して来ており、直方市付近でも貝塚の形成が見られる。また、福岡県西区四箇遺跡^③の報告では、丘陵や扇状地にはイチイガシを中心とする照葉樹林^②が生育し、河畔の沖積地等にはエノキやムクノキ林^③があって、さらにクスノキも混って生育していたようであり、本遺跡の周辺も照葉樹が広く分布していたものと思われる。気候に関しては、縄文後期頃に気候の悪化が生じたとされている。以上のようにアミダ遺跡に集まった人々にとって、必ずしも好条件とはいいがたいが、彼らは着実に集落を営み日々生活を続けていた。

2 千手盆地及びそ周辺の遺跡

千手盆地及びその周辺の地域では、弥生時代前期以後の遺跡が大半であり、縄文時代の例はほとんど知られていないが、そんな状況下でも、もう少し広域に目を向けるならば、同時代頃の遺跡を掲げることが出来る。

北古賀遺跡^④は嘉穂郡筑穂町北古賀に所在し、穂波川と大分川の合流点付近に延びる丘陵上にあって、縄文時代後期後半（三万田式）～晩期にかけての遺跡で、アミダ遺跡を考える上での比較資料となる。飯塚市内遠賀川の川床^⑤からも多くの縄文土器が得られており、目尾、鯉田、川島、殿ヶ浦といった地点が周知されている。嘉穂町内では、昭和60年度に調査した椎木本村遺跡^⑥が良い資料となろう。この遺跡は、屏川と遠賀川の合流地点近くに形成された河岸段丘の先端に立地していて、三万田期の竪穴住居をはじめ、晩期前半の埋甕等が多く検出されている。また、この遺跡より屏川沿いに上流に向かう台地上には、点々と縄文後期の土器散布地が続いている。千手盆地内では、縄文時代の遺跡は、アミダ以外に発見されておらず、今後の調査の進展に期待したい。

Ⅲ 遺跡の概観

1 遺構の分布

発掘調査では、台地上を「形に変動的な調査を実施したため、遺跡の全面を明らかとすることは不可能であったが、集落のほぼ全容を検出することが出来た。調査は、遺構の集中する西側をA地点、東側をB地点として進めた結果、遺構そのものが、東西に分れて存在し、しかも遺物整理による時期別的な遺構群形成と矛盾がないことから、そのままA地点、B地点として記述を進めることとする。また、住居跡に関しては、形態と規模、柱穴と炉跡という点を重要点として把握し、後者の二項目で明確でないものは当初竪穴遺構としたが、遺構内の炉跡の不完全さや柱穴構造が不明確であっても、やはり住居として把握するところであろう。

検出された遺構は、竪穴住居跡20軒、土壇49基以上、屋内検出の埋甕3基、屋外検出の埋甕8基、屋外炉6基、集石遺構2基、溝状遺構と多数のピットであった。

分布状況は、A地点が東西約10m、南北15m程の南北に長い楕円形状の広場の空間を中心として、ピット群、屋外炉と土壇があり、さらにその外側を14軒の竪穴住居跡が取り囲み、その周囲に溝や大形の土壇が存在する。B地点は、2つの遺構群の集中があって、東側の1群は、東西16m、南北12m程の東西に長い楕円形の広場の空間を囲むように4軒の竪穴住居跡が存在し、屋外炉や土壇、集石遺構も存在する。東西両群の中間地点には、さらに1群があって、広場の空間もなく、狭い範囲に2軒の竪穴住居跡と、土壇、屋外炉が存在する。以上の3つのグループは後にその分析結果等を提示することとするが、大きくは、集落形成の変遷を物語る資料であり、縄文時代後期後半から晩期前半という、弥生文化成立前夜の一様相を示すものであろう。

2 遺物の出土状況

今回の調査で出された遺物は、整理用のパンケースに約80箱を数え、それらは、縄文土器（後期後半から晩期前半にかけて）、打製及び磨製石器、土製品、石製品（垂飾品を含む）等であり、遺構と共に当時の生活をリアルに示す資料ばかりである。

遺物の出土状況は、まず遺構内から出土した土器量と遺構群の上層に存在した包含層からの出土量が実に豊富であり、九州における縄文土器の編年でもとかく問題にされる三万田式を中心に西平式、御領式、さらには晩期中葉までが出土している。しかし、出土した土器のバリエーションは豊富であるが、復元して完形あるいはそれに近い形になるものは少なく、1/2個体が限度で、特に精製土器は破片資料のままだが大半である。これは、同じ集落でも弥生期とは異った点として一考の必要があろう。

石器類では、特に打製石斧が多く、おそらくは古処山系にその原材を求めることが可能かと思われる。また、黒曜石は佐賀県の伊万里周辺のもの、大分県姫島産が半々くらいで出土し、量的には少ないが、サヌカイトも混っている。石錘は、嘉穂郡筑穂町北古賀遺跡よりもかなり少ないが、大きさの点では類似し、漁の方法に共通する点もあろうかと思われる^⑦。

石製垂飾品としての玉類が2点出土していて、両者とも晩期と思われる、1点は北古賀のもの^⑧と形態的に近いようで、両遺跡の遺物類に関しさらに比較が必要であらう。



第2図 調査地点地形実測図 (1/2,000)

Ⅳ 遺構と遺物

1 遺 構

今回検出された遺構については、検出作業中に任意に付した番号のまま記載することとする。また、竪穴住居跡の記載順は、地点別でしかも土器分類による型式的序列を原則とする。

(1) 竪穴住居跡

A-14号住居跡(第3図)

プランは東西に長い隅丸長方形で、中央部が大きく緩に窪む。柱穴は4ヶ所で検出されており、4本柱であったと思われる。中央部では若干の焼土と骨片が検出されているが、炉跡として明確なものではなかった。また、中央部から東寄りに礫が組まれ、中央に一段高い石が配置されたような集石が検出された。規模は東西辺の長さ4m、南北長2.2m、深度10~24cmを測る。

A-8号住居跡(第3図、図版4)

プランは東西に長い楕円形で、中央が若干窪む。柱穴は4ヶ所で検出されており、中央には70×60cm、深さ15cmのほぼ円形の炉を配する。東西の中軸長3.7m、南北の中軸長3.14m、深度28~56cmを測る。

A-6号住居跡(第4図、図版4)

プランは東西に長い楕円形で、壁面寄りに6ヶ所の柱穴が巡る。住居の中央部には不整形な炉を配する。東西の中軸長4.6m、南北の中軸長3.24m、深度8~40cmを測る。

A-7号住居跡(第4図、図版4)

プランは南北に長い楕円形で、南北中軸線上の壁面寄りの部分に2ヶ所の柱穴を設ける。住居の中央よりやや北側に、不整形な炉を配する。東西中軸長2.28m、南北中軸長3.1m、深度2~10cmを測る。

A-3号住居跡(第5図、図版3)

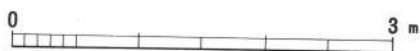
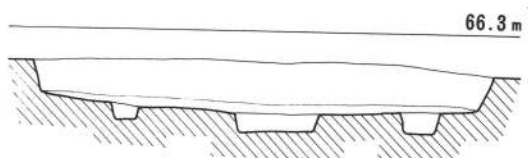
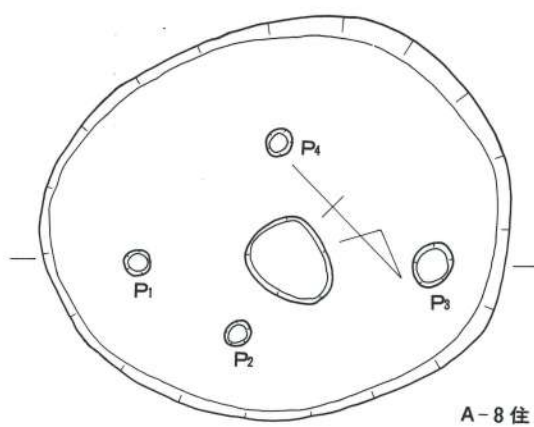
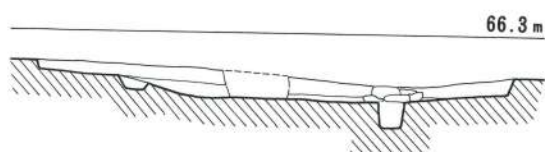
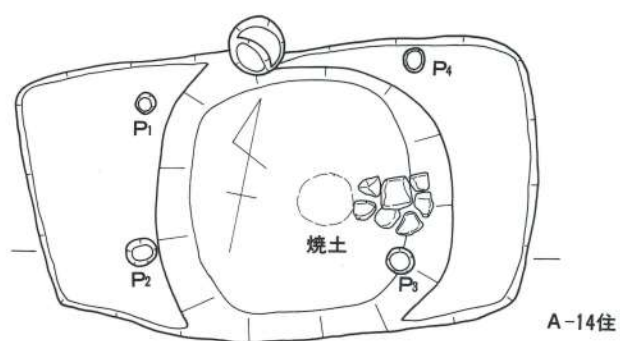
プランは円形を呈しており、中央部が摺鉢状に窪む。柱穴は壁面寄りの部分に9ヶ所あって中央を取り囲むように並ぶ。中央には50×60cm、深さ4cmで2段の掘り込みになった炉が存在する。また、その北側には、6個の小ピットが半円状に位置する。6と7の柱穴間は2.8m程もあり、その中央には屋内埋甕が存在する。従って、この部分が住居の出入り口と推定されよう。直径約6.2m、深度16~42cmを測る。

A-4号住居跡(第6図、図版3)

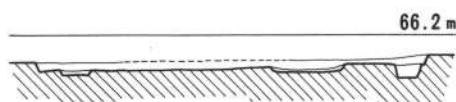
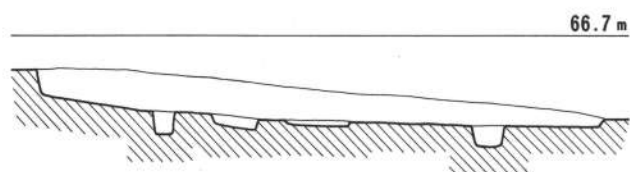
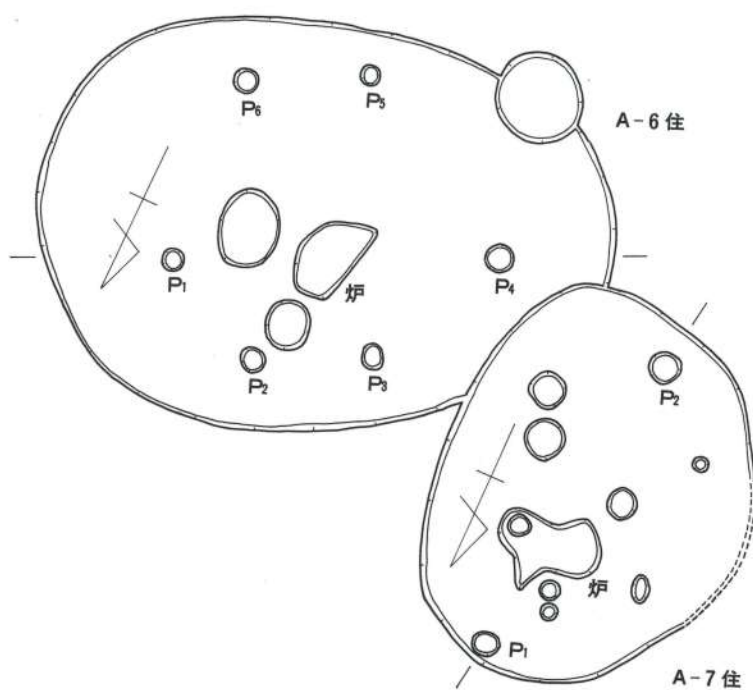
プランは円形で、中央が若干窪んでいる。柱穴は8ヶ所にあつて、壁寄りに中央を取り囲む。中央には1m×70cmの楕円形の炉を配する。直径5m、深度10~24cmを測る。

A-5号住居跡(第6図、図版4)

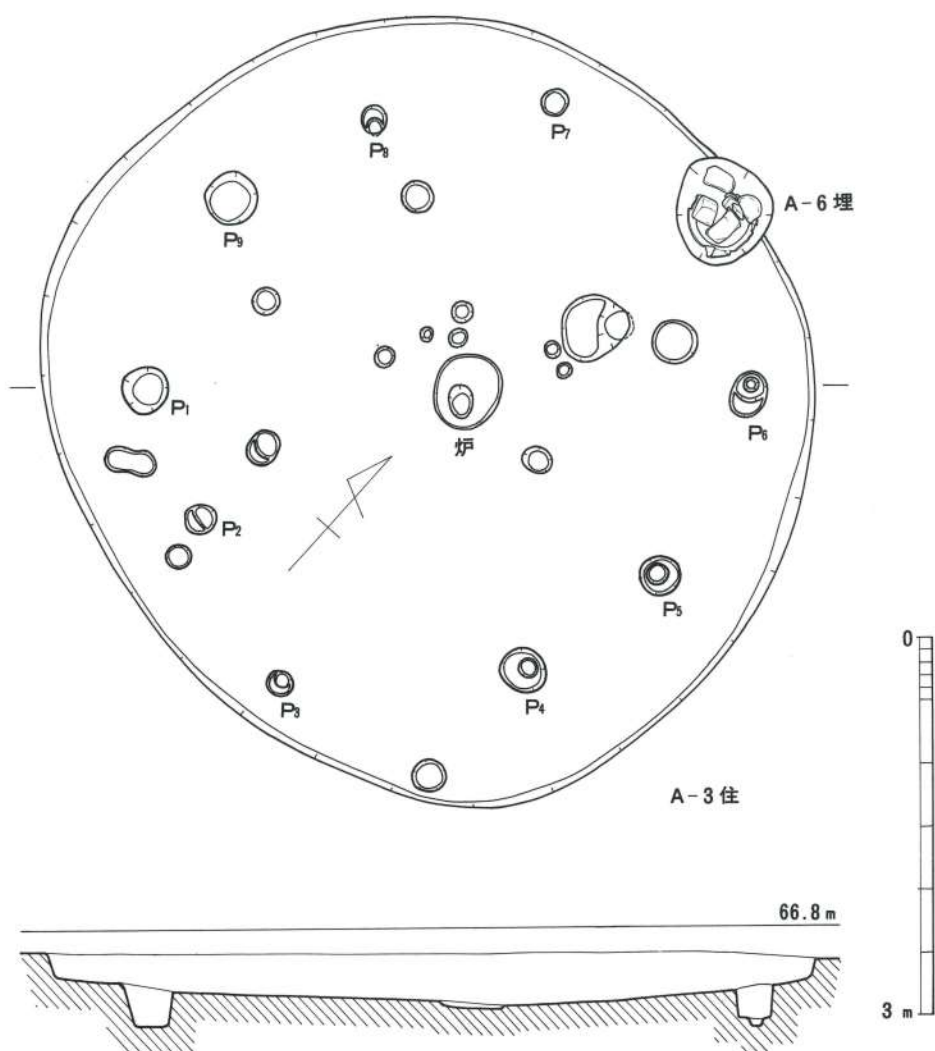
プランは楕円形で、中央がやや窪んでいる。柱穴は8ヶ所にあつて、中央より南半は2個が1組となって存在する。北側は柱穴が1対となり入口の存在を推定させる。炉は存在せず、中央部より若干の焼土を検出した。東西中軸長3.34m、南北中軸長2.92m、深度6~18cmを測る。



第3図 A-8・A-14号住居跡実測図 (1/60)



第4図 A-6・A-7号住居跡実測図(1/60)



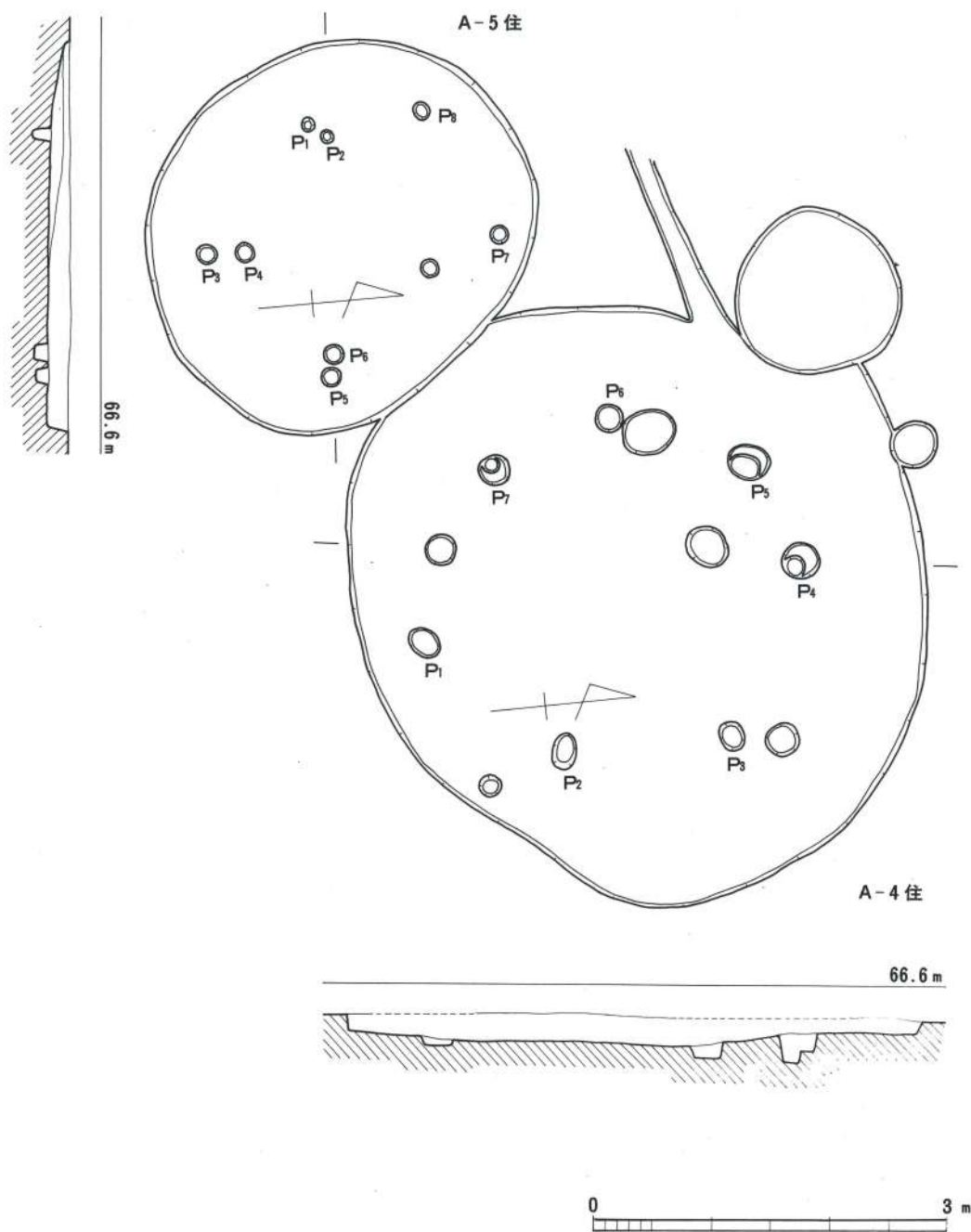
第5図 A-3号住居跡実測図 (1/60)

A-10号住居跡 (第7図、図版4)

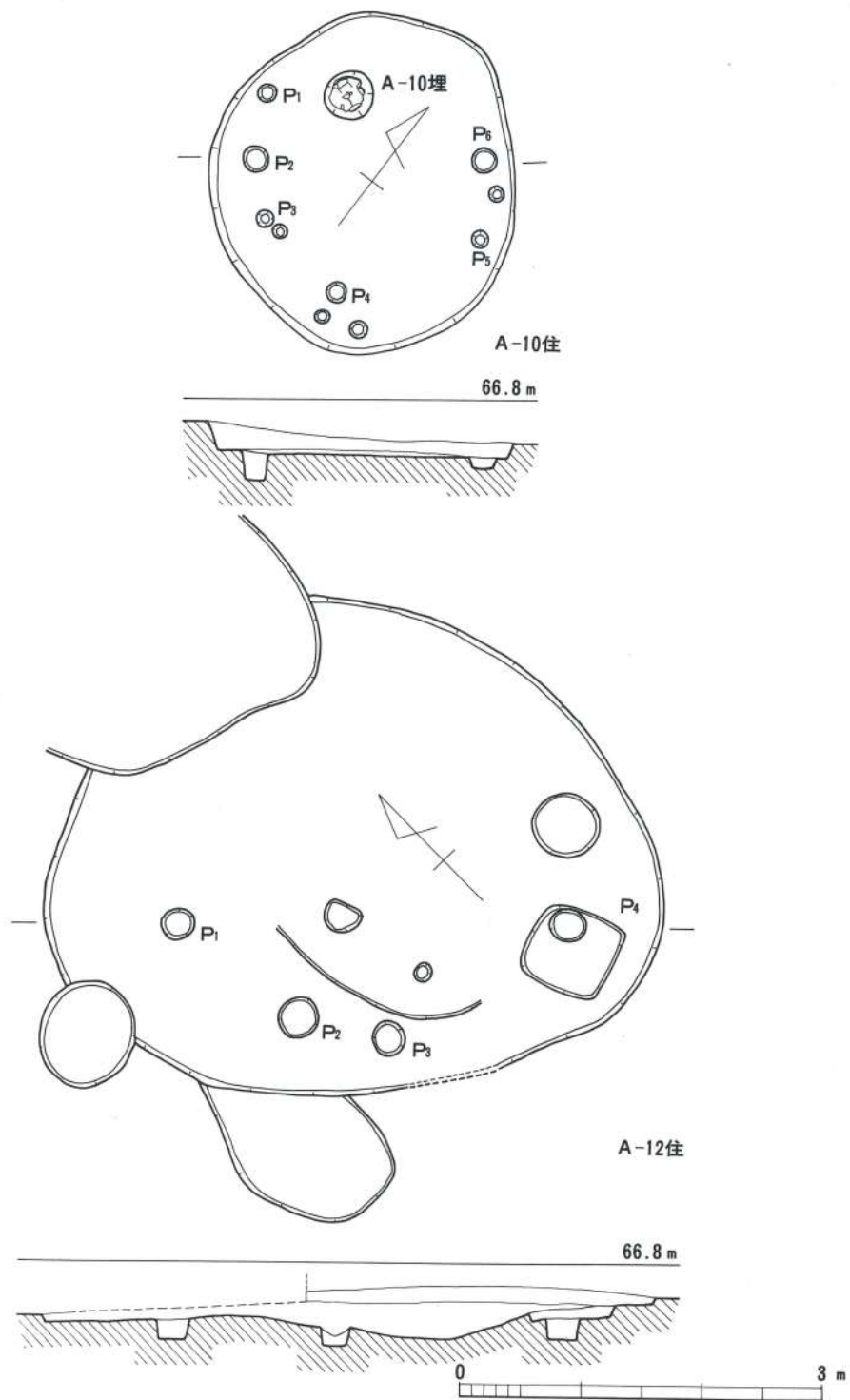
プランは南北に長い楕円形である。柱穴は6ヶ所で、東壁側に2ヶ所、西壁側に4ヶ所と分割されている。中央部やその付近には炉は検出されず、ただ、北西側に屋内埋甕が埋設されていた。東西中軸長2.52m、南北中軸長2.86m、深度12~24cmを測る。

A-12号住居跡 (第7図、図版5)

プランは東西に長い楕円形で、中央部分が摺鉢状に窪む。柱穴は南側壁面に沿って4ヶ所で検出されたが、北側は未検出である。炉は検出されていない。東西長軸長5.1m、南北軸長4.16m、深さ6~44cmを測る。



第6図 A-4・A-5号住居跡実測図(1/60)



第7図 A-10・A-12号住居跡実測図(1/60)

A-13号住居跡（第8図、図版5）

プランはやや不整形ではあるが、隅丸形状を呈し、柱穴は8ヶ所が確認されるが、プランとややズレた形である。また、北側はカク乱の穴があって柱穴の存在は不明である。東西辺の長さは、2ないし3m、南北辺は3.2m、深度10～20cmを測る。

A-1号住居跡（第8図、図版3）

プランは円形を呈し、柱穴は壁面寄りに7ヶ所で検出され、中央を取り囲むように並ぶ。中央にはピット状の不整形で小さな炉を有し、全体に整った形を示す。直径4.4m、深度10～14cmを測る。

A-11号住居跡（第9図、図版4）

プランは円形もしくは隅丸方形で、柱穴は6ヶ所で検出されており、P3とP4は壁面に近くに設けてあり、南から北に向ってハの字状になっている。中央にはラグビーボール形の炉がある。また、15号土壌に北側を切られていて、その前後関係は、土器型式の認定に参考となる。東西中軸長2.6m、南北中軸長2.9m、深度4～14cmを測る。

A-2号住居跡（第9図、図版3）

プランは東西に長い楕円形で、柱穴は壁面に沿って15ヶ所で検出された。それらは中央を取り囲んで巡っている。また、南側の柱穴例より内側に6ヶ所のピットが、柱穴と同様に並んでいて、これを柱とするなら、家の南側を2本1組の柱で補強したとも考えられる。炉は東西中軸線上のやや西寄りに、直径70cm、深さ6cm程の円形のものがある。東西中軸長5m、南北中軸長3.4m、深度20～30cmを測る。

B-4号住居跡（第10図、図版10）

プランは東西に長い楕円形を呈し、柱穴は中央よりやや東寄りに7ヶ所検出され、円形に囲むよう配されている。炉は検出されていない。東西中軸長6.6m、南北中軸長4.2m、深度10～20cmを測る。

B-1号住居跡（第10図、図版10）

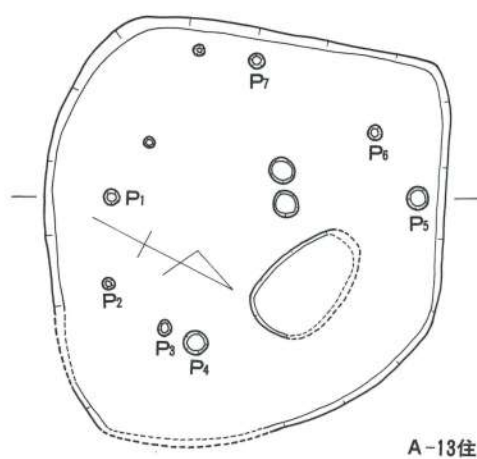
プランは東西に長い楕円形で、柱穴は中央を囲むように5ヶ所検出されている。炉は中央にあって34×26cmで深さ10cmの楕円形を呈する。東西中軸長4.8m、南北中軸長4.2m、深度10～20cmを測る。

B-2号住居跡（第11図）

プランは円形で、柱穴は東西中軸線上の西壁寄りに1ヶ所検出された。炉は直径34cm、深さ4cmの円形で、中央より北側に位置している。直径3.2m、深度10cmを測る。

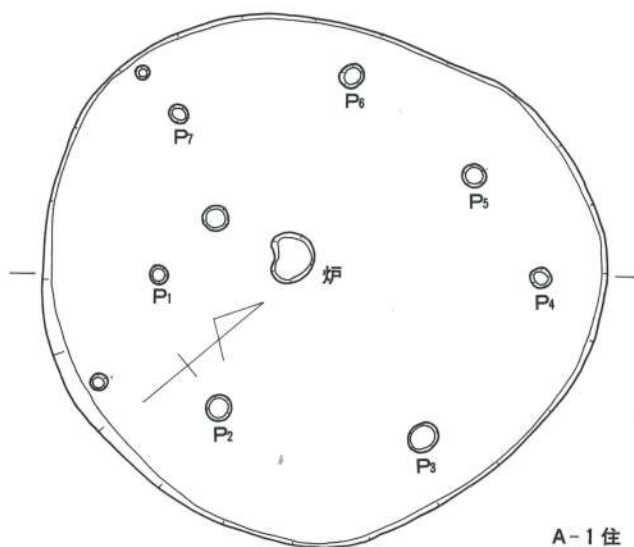
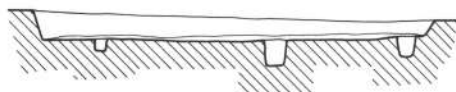
B-3号住居跡（第11図、図版10）

プランは東西方向に長い隅丸長方形で、柱穴は西壁面側に3ヶ所と東西中軸線の東側に1ヶ所の計4ヶ所が検出された。炉は確認出来なかった。また、東側の床面がコブ状に盛り上がっている。東西中軸長4m、南北中軸長3.46m、深度10～20cmを測る。



A-13住

66.7 m

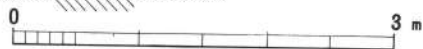
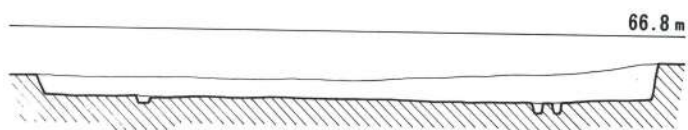
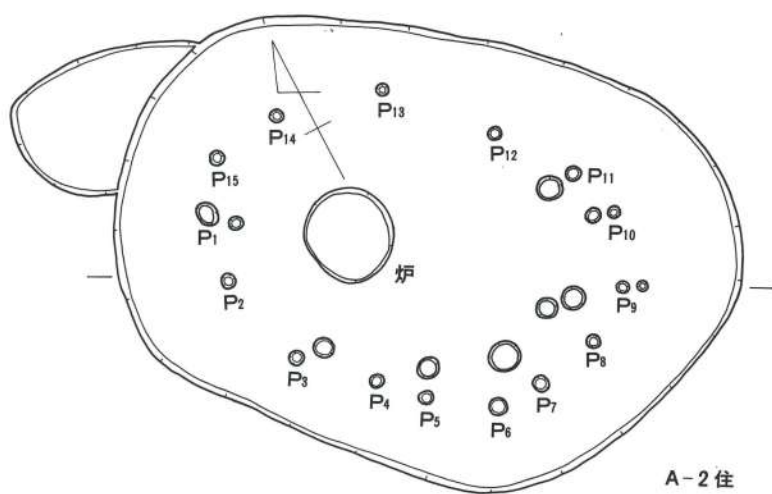
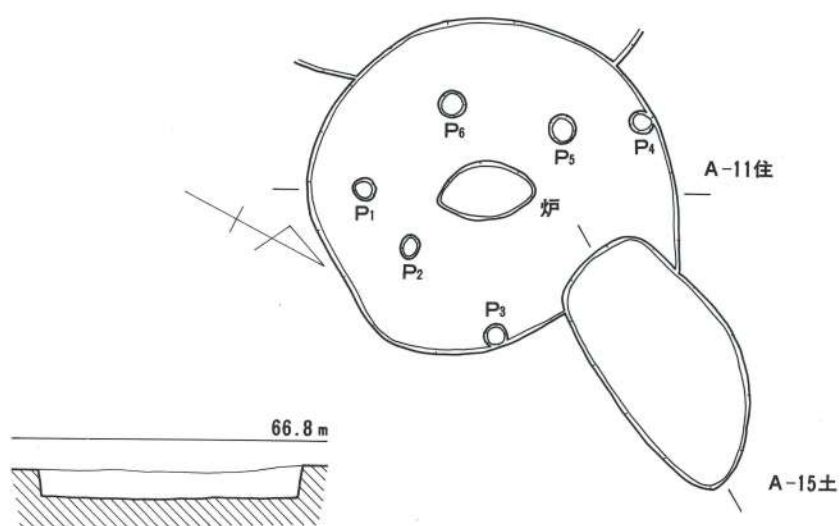


A-1 住

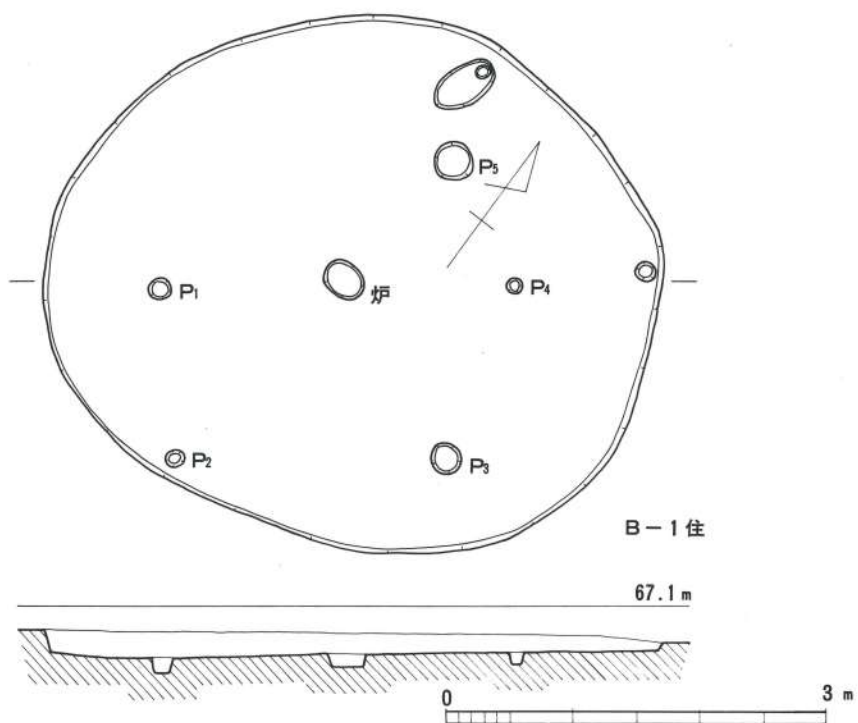
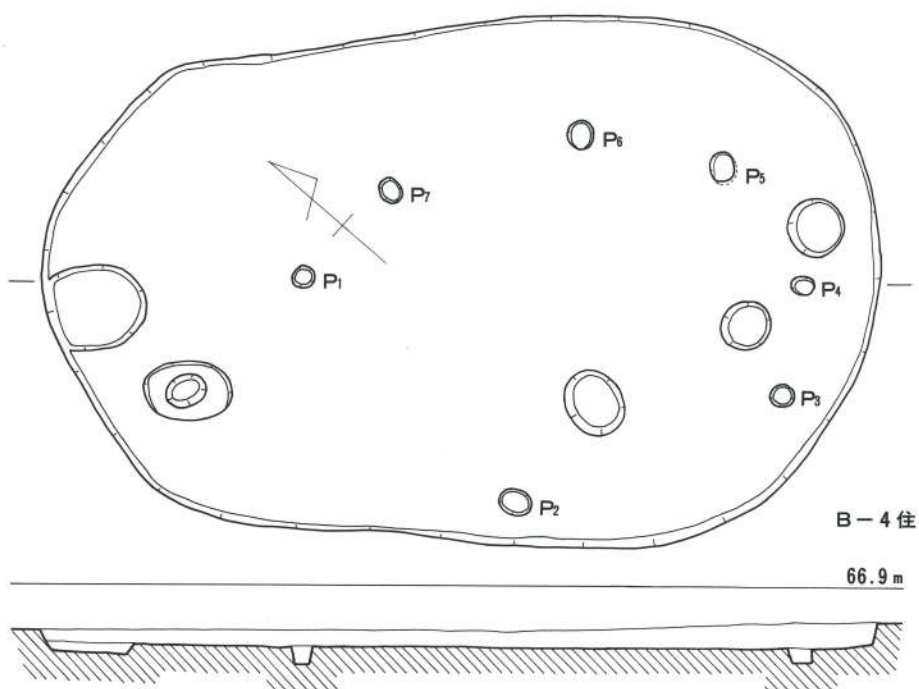
67.2 m



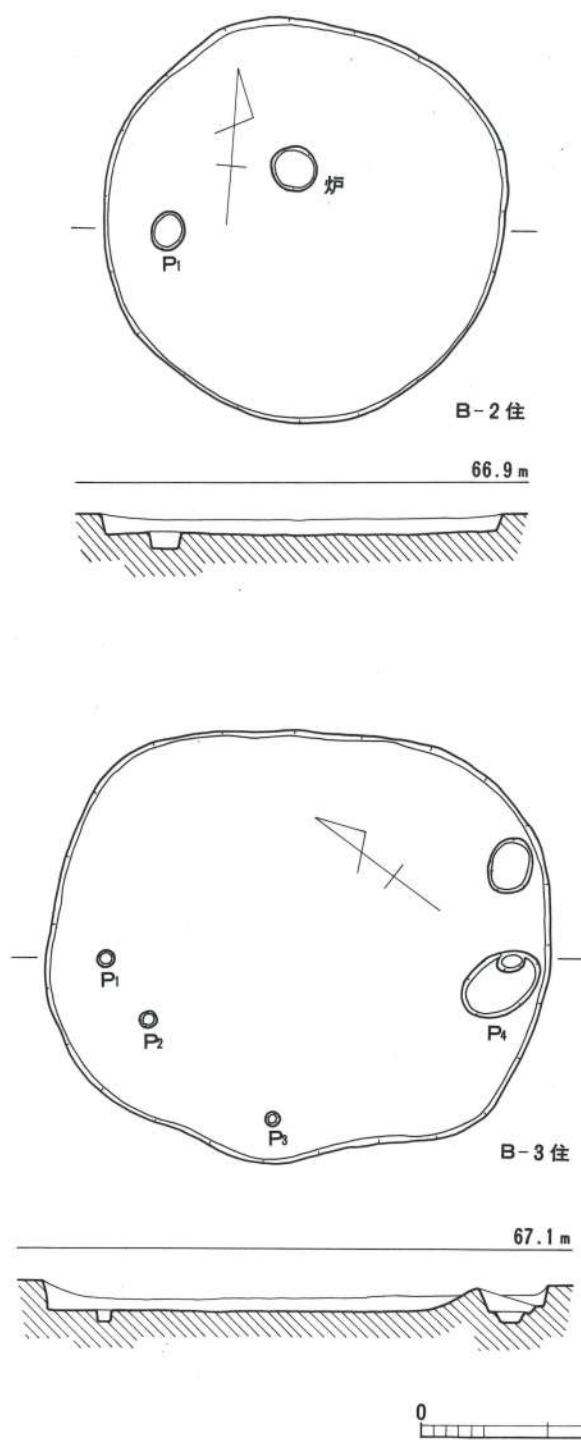
第8図 A-1・A-13号住居跡実測図(1/60)



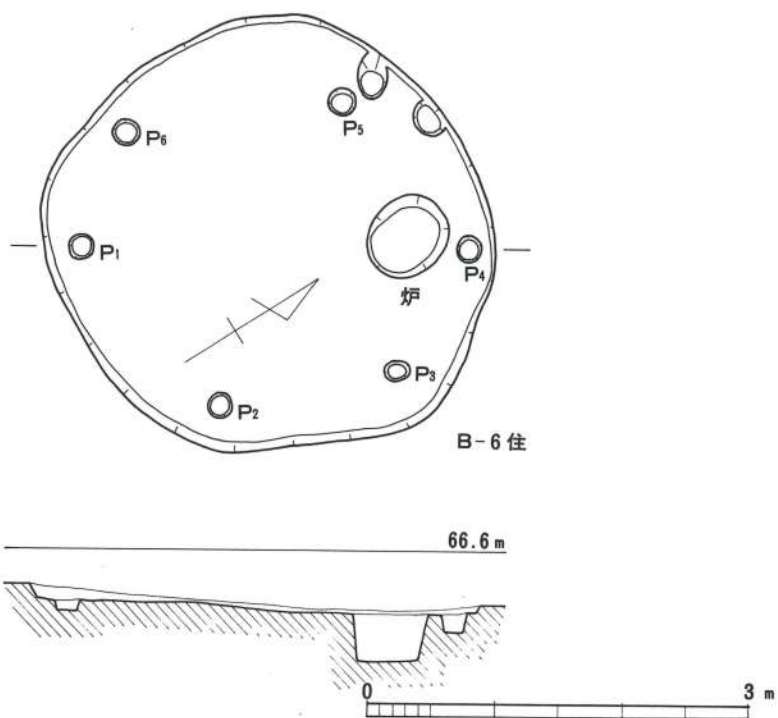
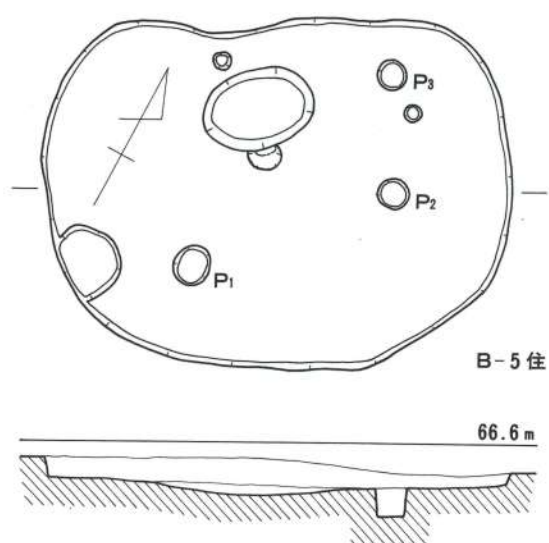
第9図 A-11・A-2号住居跡実測図(1/60)



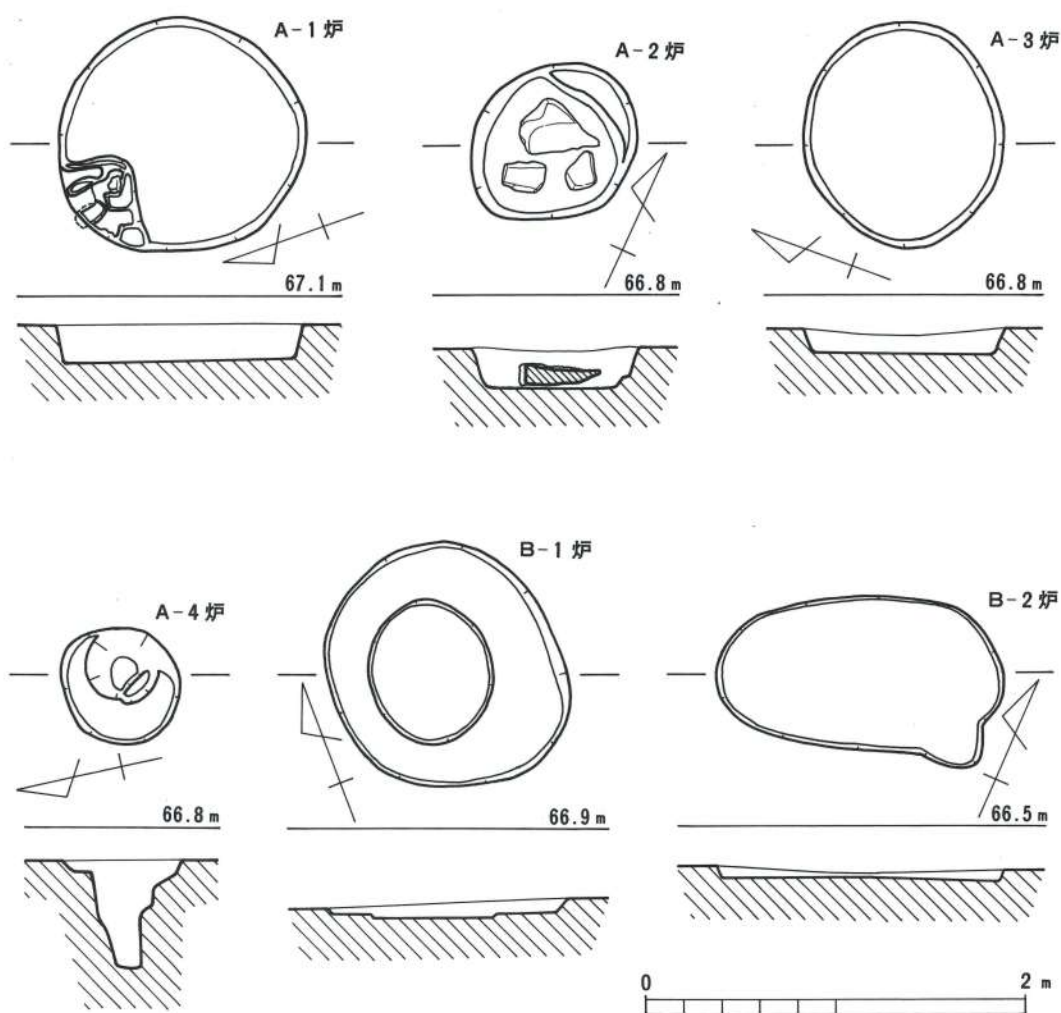
第10図 B-4・B-1号住居跡実測図(1/60)



第11図 B-2・B-3号住居跡実測図 (1/60)



第12图 B-5・B-6号住居跡実測図(1/60)



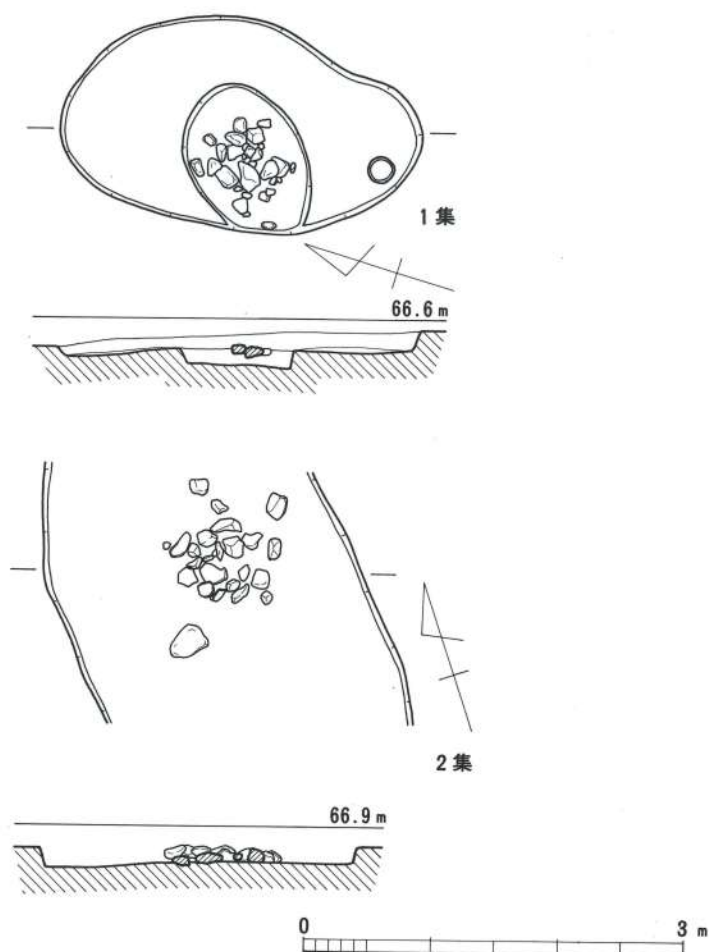
第13図 屋外炉実測図 (1/40)

B - 5 号住居跡 (第12図、図版11)

東西に長い隅丸長方形で、柱穴は東側に3ヶ所検出されて、炉は確認出来なかったが、中央部に土器の胴部が検出されており、土器炉の可能性もあるが、保存状況が悪く明確ではない。東西中軸長3.7m、南北中軸長2.8m、深度20~30cmを測る。

B - 6 号住居跡 (第12図、図版11)

プランは円形で、柱穴は壁面に沿って6ヶ所検出され、中央を囲むように巡っている。炉は70×60cm、深さ40cmの深いもので、北側のP4に接近して設置されている。直径3.5m、深度4~10cmを測る。



第14図 集石遺構実測図 (1/60)

(2) 屋 外 炉

集落内に存在し、しかも屋外に設けられた炉の跡であり、焼土、灰、炭化物が集中しており、遺構として確認出来たものである。

A-1 炉 (第13図)

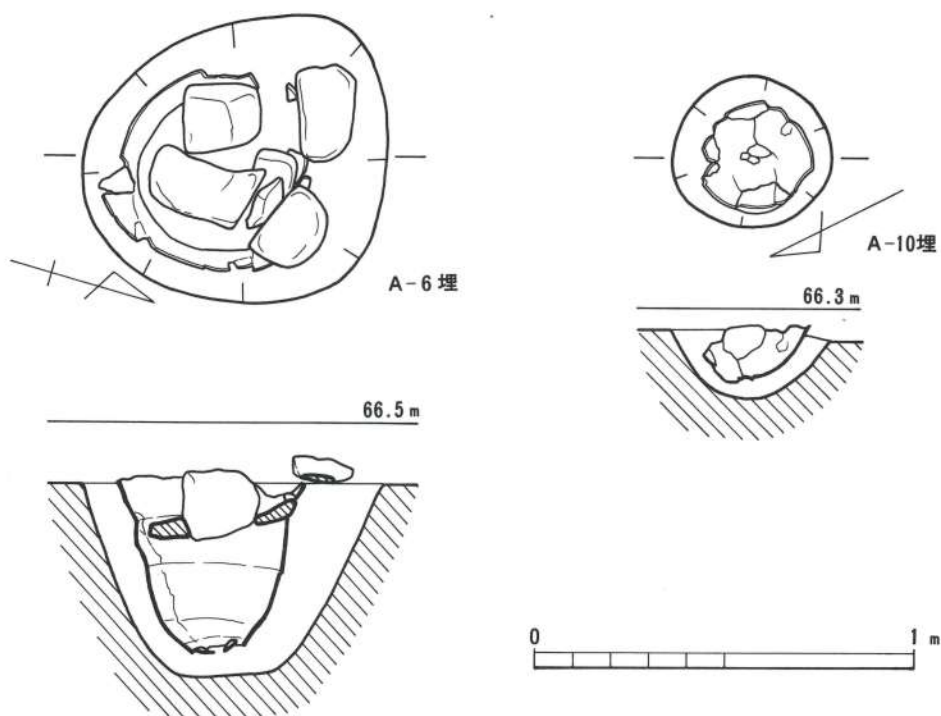
直径1.2mの円形プランで、深さ20cmを測る。北端部が著しく焼けており、一種のカマドを思わせるような焼けた粘土塊が存在した。

A-2 炉 (第13図、図版7)

直径80cmのほど円形プランで、深さ20cmを測る。2段に掘り込まれており、底部には石皿片を含む3個の扁平な礫が存在し、穴及び礫の表面に至るまで焼けていた。

A-3 炉 (第13図、図版7)

直径1.2m程のほぼ円形プランで、深さ10cmを測る。全体に焼けていた。



第15図 屋内埋竈実測図 (1/20)

A-4 炉 (第13図、図版6)

直径62cmの円形プランで、深さ58cmのピット状を呈している。ここでは炭化物が多く検出されており、他とは若干異った状況である。

B-1 炉 (第13図、図版12)

直径1.3mの円形プランで、2段掘り込まれた深さは8cmである。全体に焼けていた。

B-2 炉 (第13図、図版12)

東西中軸長1.52m、幅80cmのほぼ楕円形を呈しており、深さは2～6cmを測る。全体に焼けており、灰が多く検出された。

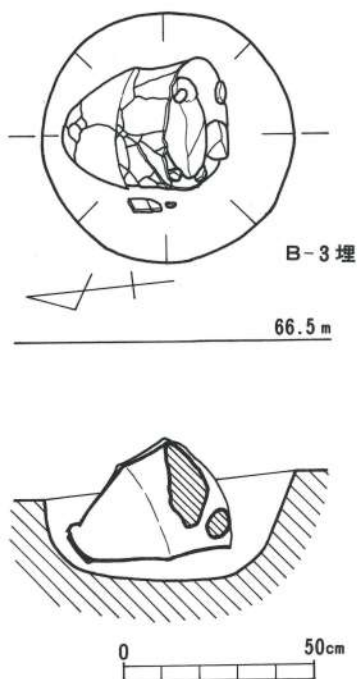
(3) 集石遺構

1号集石 (第14図)

A地点の13号竪穴住居の東側を切って存在した。東西中軸長1.6m、南北中軸長で9.6m、深さ16cmの楕円形を呈した。土壌の中に、2段に掘り込み、5～20cm程の自然礫を集めている。礫は全て火を受けており変色していた。またここからは石棒片が検出されている。

2号集石 (第14図)

B地点の中央広場的な空間内に位置していて、溝状の落ち込みの中にある。10～25cm程の自然礫を集めていて、礫は全て火を受け、変色をしていた。



第16図 屋内埋甕実測図 (1/20)

B-3号埋甕 (第16図、図版12)

B-6号竪穴住居内のほぼ中央に、直径66cm、深さ30cm程の埋設土壇を設け、その中央に粗製深鉢を斜方向 (口縁部を南に向けて) にして埋めている。土器の口縁部内にはやや大きく偏平な磑を入れ込んで蓋としているようで、磑の周囲には小磑で詰め石をし、蓋が動かぬようにしている。土器は完形で水抜き穴もない。断面観察では、埋土は水平に堆積しており、埋設状況が当初の状態のままであることを示してくれた。

(5) 屋外埋甕

A-1号埋甕 (第17図、図版8)

正位直立埋設で底欠、直径43cm、深さ15cmの円形の掘り方を有する。

A-2号埋甕 (第17図、図版8)

正位直立埋設で底欠、直径52cm、深さ18cmの円形の掘り方を有する。

A-3号埋甕 (第17図、図版8)

横位埋設で底有、東西中軸長63cm、南北中軸長46cmの楕円形の掘り方を有する。

A-4号埋甕 (第17図)

横位埋設で底有、直径60cm、深さ15cmのほぼ円形状の掘り方を有する。

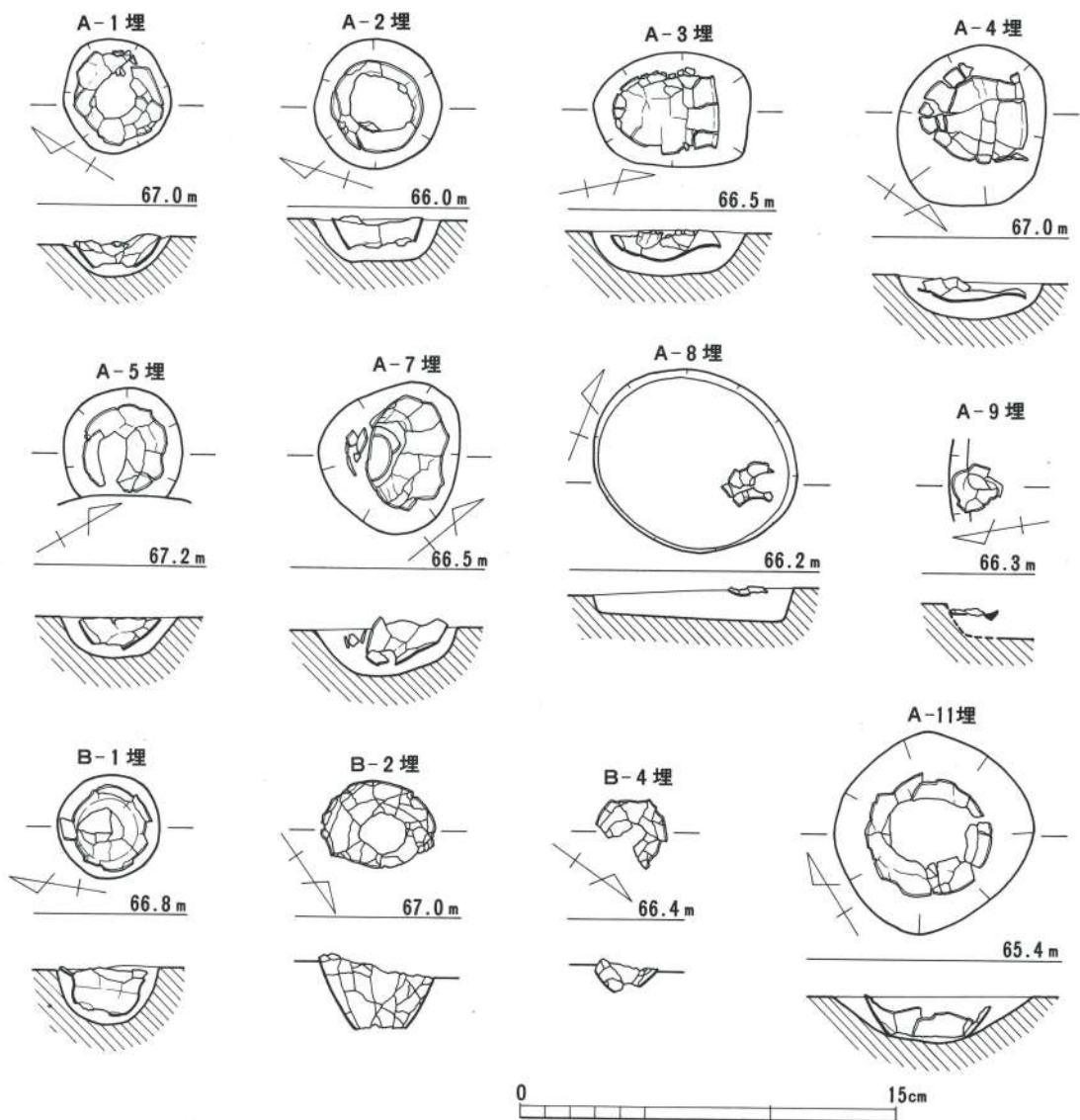
(4) 屋内埋甕

A-6号埋甕 (第15図、図版6)

A-3号竪穴住居内の北側壁面付近に設けられている。直径80cm、深さ50cm程の埋設土壇は、不整な円形を呈しており、住居の壁面立ち上がりの部分と壁面の一部を掘り込んで設置されている。内部には粗製深鉢が正位に直立して埋め込まれている。土器の口縁部に接して2個の自然磑があり、土器の内側にも落ち込んだ磑が2個存在した。さらに、発掘中にあやまって取り上げてしまったが、甕の周囲付近に数個の同様な磑の存在を確認している。これは、埋甕の周囲に磑を配していたことを示しており、さらに、落ち込んだ磑や、土器口縁部に並ぶ磑の端が口縁部の内側にはいる事実は、木蓋の存在を示すものと考えられる。土器の底部は、内側にはいり込んでいたが、確かに存在した。

A-10号埋甕 (第15図、図版8)

A-10号竪穴住居内の北側底面に、直径44cm、深さ20cm程の円形ビット状に埋設遺構を設け、そこに精製深鉢を正位に直立させて埋め込んでいる。口縁部は欠損しているが、胴部から下方は完全に残っていた。



第17図 屋外埋葬実測図 (1/30)

A-5号埋葬 (第17図、図版9)

正位直立埋設で底欠、直径47cm、深さ16cmの円形の掘り方を有する。

A-7号埋葬 (第17図、図版9)

斜位埋設で底有、直径60cm、深さ19cmのほぼ円形の掘り方を有する。

A-8号埋葬 (第17図)

正位直立埋設の可能性有りで底欠、直径80cm、深さ7～15cmの円形の掘り方を有する。

A-9号埋甕（第17図）

A-9号竪穴住居の壁面に存在するが、埋甕の可能性は低い。正位直立埋設で底有。

B-1号埋甕（第18図、図版9）

正位直立埋設で底欠、直径40cm、深さ22cmの円形の掘り方を有する。

B-2号埋甕（第17図、図版9）

正位直立埋設で底欠、掘り方は未検出であった。

B-4号埋甕（第17図）

B-12号土壌内に埋設された状況であった。正位直立埋設で底欠、掘り方は未検出であった。

A-11号埋甕（第17図）

A地点で北側を拡張した際に出土したもので、正位直立埋設で底欠、直径80cm、深さ17cmの円形の掘り方を有する。

2 遺 物

（1）遺構内出土土器

検出された遺構群は複雑な重複関係がなく、出土した土器群も比較的純粋な型式を示している。しかし、器形や精粗の質、胎土や成形、焼成といった点にまで言及出来ないのが現状である。従って、ここでは竪穴住居出土の土器群を中心として、口縁部と胴部上半の文様帯部及びそこに施された装飾的文様と縄文施文の技法的变化を分類の基本とする。

a 土器片の分類（第18～19図、図版13～18）^⑨

第1群土器 A-14号住居内出土土器群を資料とする。器形は深鉢が大半であり浅鉢は少ない。深鉢の文様帯は口縁部と胴部上半にあり、大半は磨消縄文が施される。口縁部は大きな波状を呈し、2条の沈線が巡る。また、突起の頂部には刻みが施され、沈線の数もそこだけ3条となったり、沈線間にS字状文が附される場合もある。胴部は数条の沈線が緩な曲線を描いたり、直線、羽状、波状や山形文が施文される。沈線上に施される文様として、（）状や列点状の刺突文とx字状の沈線文がある。しかし、前者は沈線間に充填される刺突文であり、後者は、横位に続く沈線を曲線的に集約するものであって、両者は基本的に異なる。頸部には沈線やその上から連続刺突文が加えられる。浅鉢は深鉢の胴部文様帯に類似するが、磨消縄文は比較的少なく、波状や山形の沈線文が多い。粗製土器は内外面の条痕文と口唇部の刺突文や刻み目文が特徴である。

a-1類（1～4、6～11、14～21）深鉢で胴部文様帯は曲線・直線・羽状・波状・山形文に（）状や列点状の刺突文が加えられる。

a-2類（5・12・13）深鉢で胴部にx字状文が加えられる。

b-1 類 (22~24・26~28) 浅鉢で文様は刺突文や山形文である。

b-2 類 (25) 浅鉢で χ 字状文が加えられる。

第2群土器 A-8・6号住居内出土土器を中心とし、A-1・2・6・7・25・26・31・46及びA-33ピット、溝状遺構より出土した土器群である。器形は深鉢が大半で、多くには磨消縄文が施されるが、縄文に代わって巻貝（ヘナタリ）回転圧痕や細線羽状文が数点見受けられる。前者は施文の前段に施され、磨消されるものであるが、後者は施文後に充填されるという違いがあつて、時間的にも前者の後出技法として後者の出現が考えられる。また、胴部文様として χ 字状文を有した例やS字状の結節^⑩を思わせるサイクルの短い波状文がより多く見受けられる。

a-1 類 (35・56・74・75・76・77~79・296・301・334) 深鉢で胴部に χ 字状文が加えられる。

a-2 類 (37~39・50~53・81~83・291・303・304・310・311・323) 深鉢で胴部にサイクルの短い波状文が加えられる。

a-3 類 (47・48・326) 巻貝（ヘナタリ）の回転圧痕文が充填される。

a-4 類 (84) 2 類の波状文に最も新しい文様である細線羽状文が施される。この場合注意すべきは、文様帯に施文された縄文がRLの横位回転であり、条の方向は向って左から右への斜線状となるが、本例は右から左へ向う点である。

a-5 類 (30~34・36・54・56・75・76・290・297・300・307・312) 深鉢で1群（a-1 類）の文様と同様であるが、その大半は直線化し、沈線間の刺突文も観察出来ない。

b-1 類 (66・69・94) 浅鉢で χ 字状文が加えられる。

b-2 類 (65・67・68・91・93) 浅鉢でサイクルの短い波状文が加えられる。

b-3 類 (92・295・319・321) 浅鉢で1群（b-1 類）に近似するが、やはり直線化した文様を示す。

第3群土器 A-3・4・5・10・12・13・B-4・1号住居及びB-8号土壇より出土した土器群を資料とする。器形は深鉢と浅鉢があるが、後者の占有率がかなり高くなっている。深鉢の文様帯は口縁部と胴部上半にあり、磨消縄文、巻貝の回転圧痕文、細線羽状文が観察される。縄文は単節斜縄文RLが大半であるが、RRやLLといった反燃りの縄文が一部に存在し、しかも磨消ではなく充填された縄文の存在が確認される。文様は沈線による χ 字状文・雷文・直線文・列点状の刺突文、波状口縁部に円形浮文に刺突を加えたものや、その裏面に1条^⑪の沈線を巡らすものがある。また、ノの字状の隆線文が χ 字状文の様に使用される例もある。^⑫2群に1例見受けられた細線羽状文は、文様のバリエーションの1つとなり定着と発展を遂げる。さらに浅鉢の一部には深鉢より発展し、口縁部文様帯は退化し、胴部文様帯も2~3条の沈線となり、口縁部裏の沈線がより明確に施される新しい動向も見受けられ、従来の浅鉢に施される文様の沈線文化と同様の変化が観察される。粗製土器は深鉢で、口唇部に連続した刺突

文や刻目を施すものと、無文で断面形が三角形状を呈したものがある。

a-1類(97・102・111・122・172・198・243・247・249・259・266・340) 深鉢でχ字状文を基本とし、雷文やノの字状隆線文が直線部を曲線的に集約するという同様の機能を有する点から先のχ字状文に含められよう。また、101・113・115は赤色顔料が文様帯を中心に塗彩されていて、特殊な取り扱いを受けた状況を示している。

a-2類^⑮(105・121・131・167・173・244・258) 深鉢でサイクルの短い波状文を基本とする。ただし、121・122・127・310・は、χ字状文と波状文の組み合わせになっている。

a-3類(106) 深鉢に巻貝(ヘナタリ)の回転圧痕文を施す。

a-4類(133・135・174・185・199・200・245・247・338) 深鉢で細線羽状文を加えたもので、新たな文様の展開を示している。

a-5類(119・120・132) 深鉢で列点状の刺突文が加えられる。ただし、119・120に関してはχ字状文との組み合わせとなっていて、1群の重要な要素であった頸部の文様は、ここに消滅せんとする。

b-1類(145・149・152・178・249・266・340) 浅鉢でχ字状文を加えたものである。249・340はノ字状の隆線文で、χ字状文に含めておく。

b-2類(144・148・151・250) 浅鉢でサイクルの短い波状文を加えたものである。ただし、149はχ字状文との組み合わせとなる。

b-3類(152・156・168・175・179・186・190・191・199・200・207・251・252・260・261・265・266) 浅鉢で細線羽状文を加えたものである。ただし、152・266はχ字状文との組み合わせである。

b-4類(146・147・339) 浅鉢で2条の沈線を組み合わせて、羽状や山形の文様を示したもので、1群や2群の一部に見られたもので、a-5類と同様に古いモチーフの1例である。

b-5類(157・161・169・170・181・182・187・188・202・204・253・255) 浅鉢で文様帯は、2～3条の沈線のみとなり、全面によく磨研され、黒褐色の光沢を有するものとなる。これは、それまでの縄文巻貝回転圧痕や細線羽状文の次の段階として重要な位置を示すものである。

b-6類(142) 浅鉢と思われるが、深鉢のごとく大きな波状口縁を呈し、粘土の隆線とその両側に沈線文を施し、隆線上に縄文を充填するもので、刺突を加えた円形の浮文と組み合わせている。

第4群土器 A-1・2・7・11・B-2・3号住居を中心とし、B-3号土壌より出土した土器群である。1群から3群までに多く見られた大きな波状口縁部を有する深鉢は、平縁や若干の波状を呈して口縁部を有する鉢形へと移行し、浅鉢が半数以上を占めるようになる。文様帯は、3群(b-5類)の系統が発展し、それ以外のバリエーションは、ほとんど無く、磨消縄文、巻貝回転圧痕文、細線羽状文は見受けられなくなる。また、器面調整のナデは、磨研へと移行し、黒色磨研土器の世界が広がり始める。器形の細部では、精、粗製に係わらず胴部の屈曲が著しくなり、それまでの緩なカーブラインが無くなって行く。

a-1 類 (212・233・234・271) 鉢で文様帯は口縁部と胴部上半にあって、2～3条の沈線、もしくは凹線となっていて、沈線もやや幅広のものである。

a-2 類 (209～211・222～224・228) x 字状文、列点状の刺突文、羽状の沈線文といった1～3群までの文様を留めている。

b-1 類 (213～218・225・226・236・272・277～280) 浅鉢で2～3条の沈線や凹線によって文様帯を成している。

b-2 類 (235・281) 浅鉢で無文のものである。

第5群土器 A-15・20・B-9・10号土壇出土の土器群を資料とする。器形は鉢と浅鉢がある。鉢は平縁と若干突起する小波状口縁があり、文様帯は口縁部と胴部屈曲部分にあるが、1～2状の沈線や凹線のみで退化している。口縁部は2条で、胴部は1条もしくは2条の沈線が横走る。浅鉢は口縁部に2条の線文がある。

以上の資料を分類するには、1～4群で行なって来た分類基準であった文様帯とそこに施された様々な装飾文様や縄文といった概念からはなれ、別の視点に移る必要がある。つまり、第5群土器以降は、器形の差や沈線の太さ、数といったものがより重要となって来よう。

a-1 類 (328～330・345・347) 鉢で口縁部が外方に強く張り出し、頸部に向かって内側に屈曲する。文様帯は2条の幅広の沈線、もしくは凹線となっている。

a-2 類 (331) 鉢で小波状口縁を成す。口縁部及び胴部に各々2条の凹線が巡る。口縁部その他の曲部分は比較的緩である。

a-3 類 (333) 鉢で幅広の凹線1条が口縁部を巡る。

a-4 類 (346) 鉢で口縁部が内傾する。文様は凹線が2条巡るのみ。

b-1 類 (332) 浅鉢で口縁部が外反する。文様は2条の凹線である。

b-2 類 (348) 浅鉢で口縁部とが内傾する。文様は2条の沈線である。

第6群土器 B-13号土壇より出土した土器群を資料とする。器形は鉢と浅鉢で、後者が大半を占める。文様帯は退化し沈線となったものが口縁部には存在するが、胴部では明確ではなくなっている。また、浅鉢の頸部は短くなって来る。

a-1 類 (349) 鉢で口縁部は直線的に立ち上がり、2条の幅広の沈線が巡る。

b-1 類 (350～352・354) 浅鉢で口縁部と胴部が明確である。口縁部には1～2条の沈線が巡っている。

b-2 類 (353) 浅鉢で口縁部と胴部が明確ではない。口縁部には2条の沈線が巡る。

b-3 類 (355) 浅鉢で口縁部の沈線は無くなっている。

b-4 類 (356) 浅鉢で口縁部の幅が狭く、そこに1条の沈線が巡っている。

第7群土器 B-5号住居、B-14号土壇より出土した土器群を資料とする。浅鉢を主とし深鉢は粗製土器となる。文様帯は1条～2条の沈線のみとなり、文様及び文様帯はまさに消滅せんとする。

b-1 類 (357・358) 浅鉢で口縁部の屈曲も弱くなり、口縁部を巡る2条の沈線も細くなっ

ている。

b-2類 (288) 浅鉢で口縁部も胴部の屈曲も緩になり、曲線という文字がふさわしい状態である。口縁部を巡る1条の沈線も細く弱々しいものとなっている。

最後に遺構内出土土器群に混在していたと考えられる一群は、1~7群とは異なり、その型式はより古式と思われるので、仮にO群として以下に示しておく。

O群土器 A-3ピット A-3号住居内より出土した土器群である。

a類 359は精製磨研の鉢で、胴部文様は貝殻腹縁による押し引き文で、帯状に巡らされている。

b類 粗製深鉢を一括して取り扱う。360は突起による波状口縁部で、刺突と2条の沈線によって文様帯を形成する。361~363は口唇部に刻み目が施され、一部に逆ハの字状をつくり出しつつ、その方向が変化する。調整は条痕とナデによって行なわれる。

b 完形土器

各遺構より出土した土器の中で、実際に復元出来たり、実測図の上で復元された個体を資料とし、破片資料で明確となった類別の土器群に重ねて考えてみたい。なお、土器の配列は地点及び遺構別にふり分けている。

復元し得た個体数は38で、各々を遺構別に分け、さらに分類してみたい。

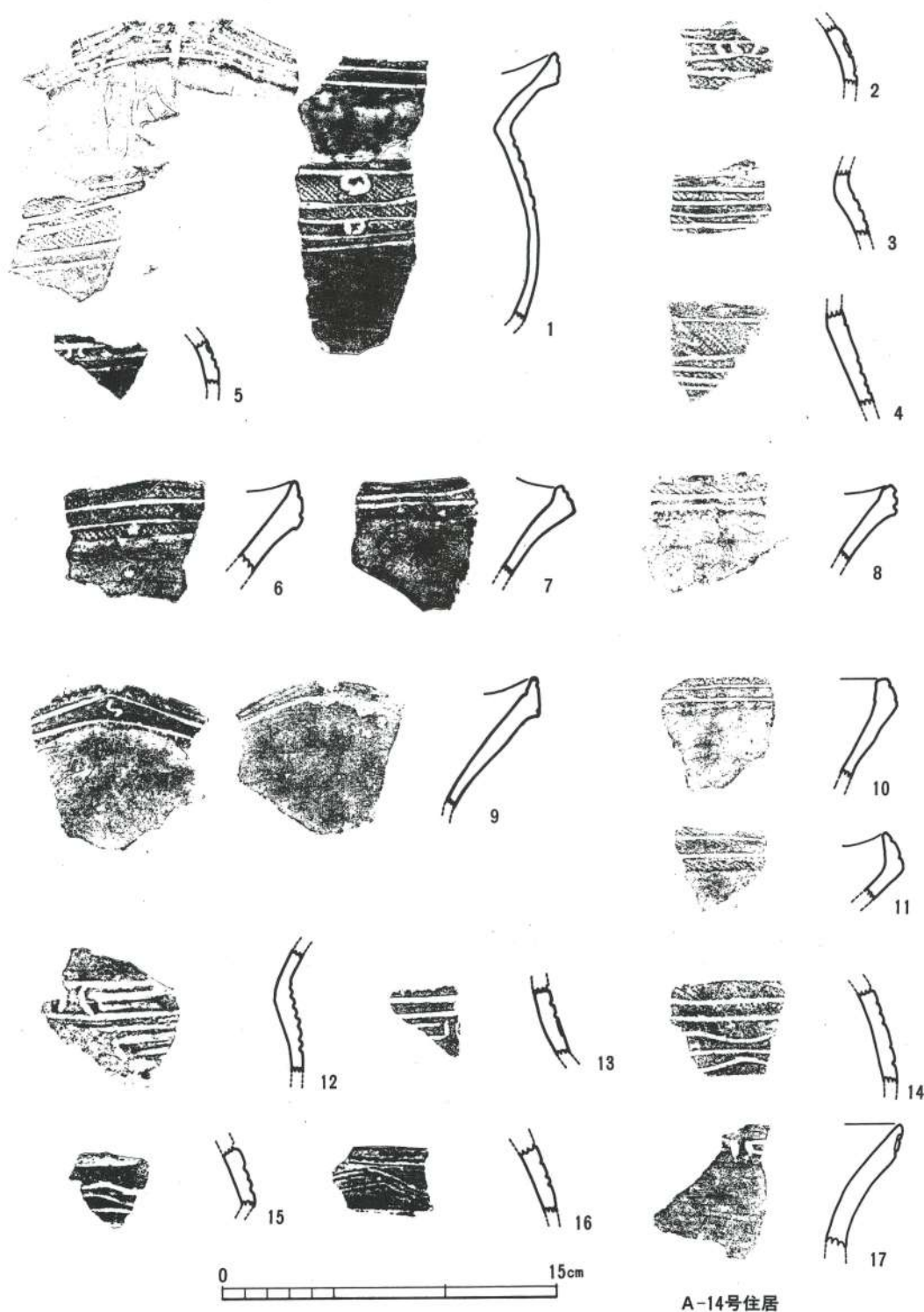
A群土器 (第42図、図版18) A-14号住居内出土の土器群を資料とする。

I-a類 1は深鉢で緩にカーブする頸部と球形の胴部を有する。文様帯は胴部上半にあって、横位回転の単節斜縄文RLを施文す。上下には各2条ずつの沈線を巡らせ、その線間に2条1組の沈線で緩な波状曲線文を描き、その曲線の頂部を中心にして、2状沈線の上下2段に()字状の刺突文を加える。また、頸部には1条の沈線を配し、その上に下方からの連続刺突文を施している。

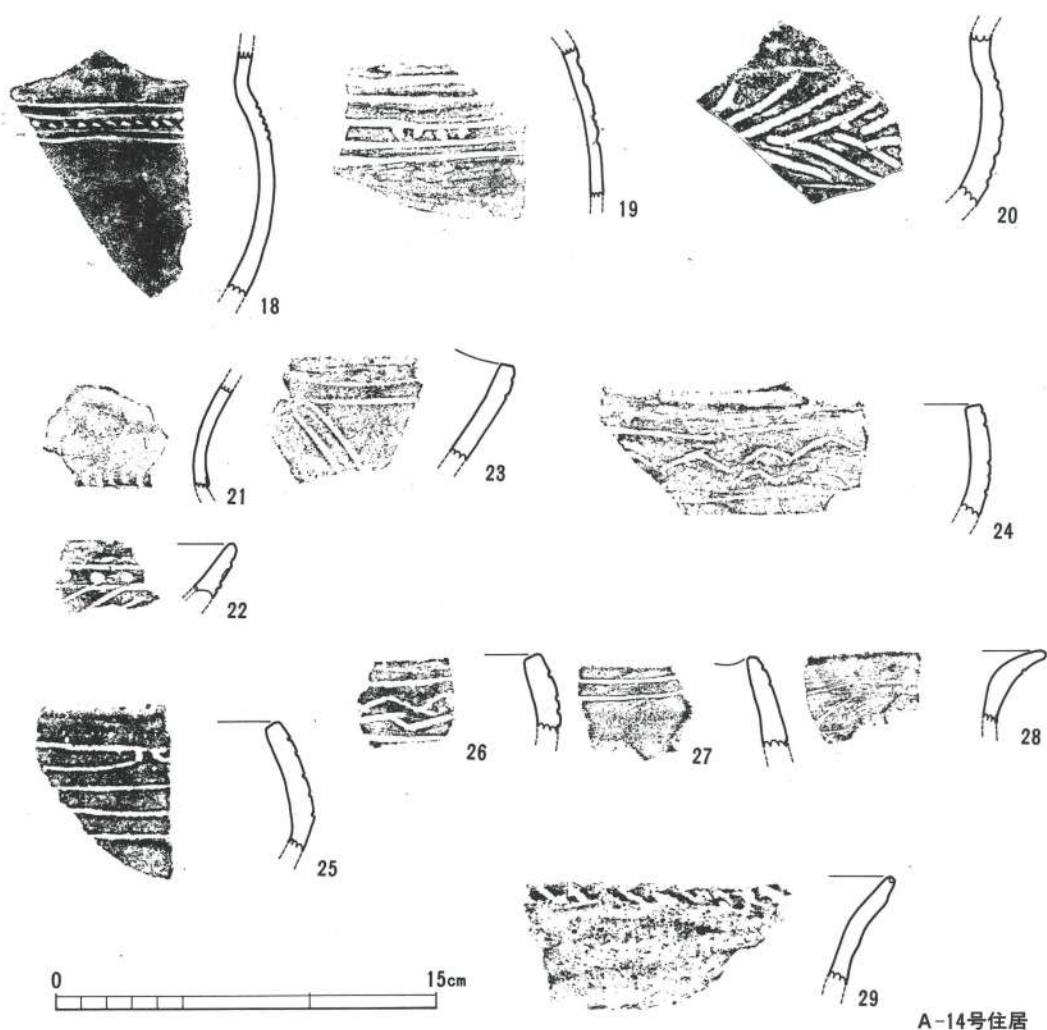
I-b類 2は平縁の鉢で、口縁部と胴部上半に文様帯を有する。口縁部には2条の沈線を巡らせ、その間に連続刺突文を施し、胴部上半には4条の沈線を巡らせ、その間にも刺突文を連続的に施す。また、上1条目の沈線は一部波状を呈しており、正面感を出しているように思える。3は平縁の鉢で文様帯は胴部のみである。頸部には爪形の連続刺突文が施され、胴部上半には、上下各2条の沈線を施し、その間に2条の沈線を組み合わせた山形文を配している。

Ⅱ類 4は平縁の浅鉢で後の杯形に近い。文様帯は口縁部にあって、上に2条の沈線を、下に1条の沈線を巡らせ、その間に2段の円形刺突文を連続させ、さらにその中央に1条の沈線による鋸歯状の山形文を施す。

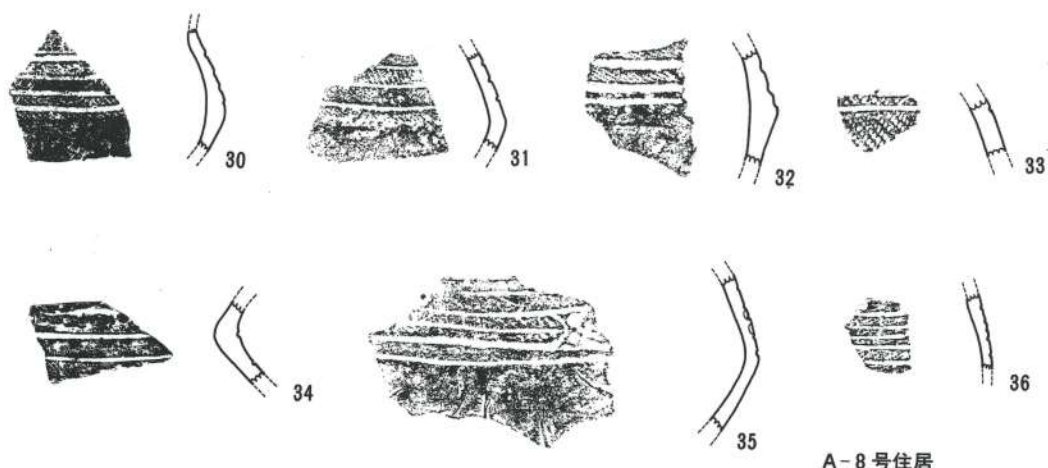
Ⅲ類 5は口縁部が外反し、胴部が緩に張り出す粗製深鉢で、口唇部には連続刺突文を加え、外面調整を貝殻条痕文によって行ない、内面はナデを施す。6は口縁部が外反し、胴部が若干張り出す深鉢で、口唇部には刻み目を施す。内外面とも貝殻条痕文が施されるが、外面の方は、細い条痕であり、内面は幅広の凹線状を呈している。



第18图 遺構内出土土器拓影 1 (1/3)

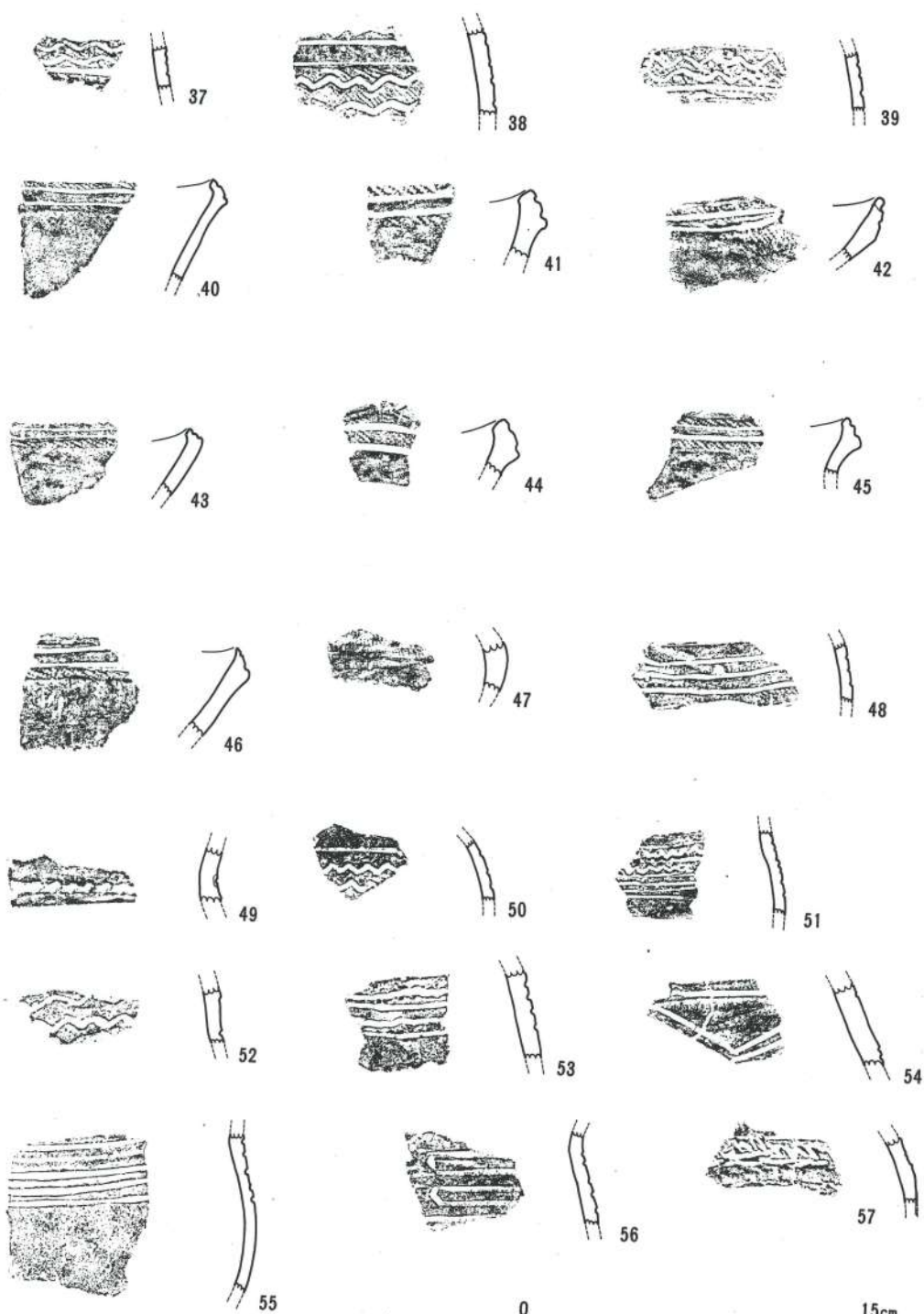


A-14号住居



A-8号住居

第19図 遺構内出土土器拓影 2 (1/3)



A-8 号住居

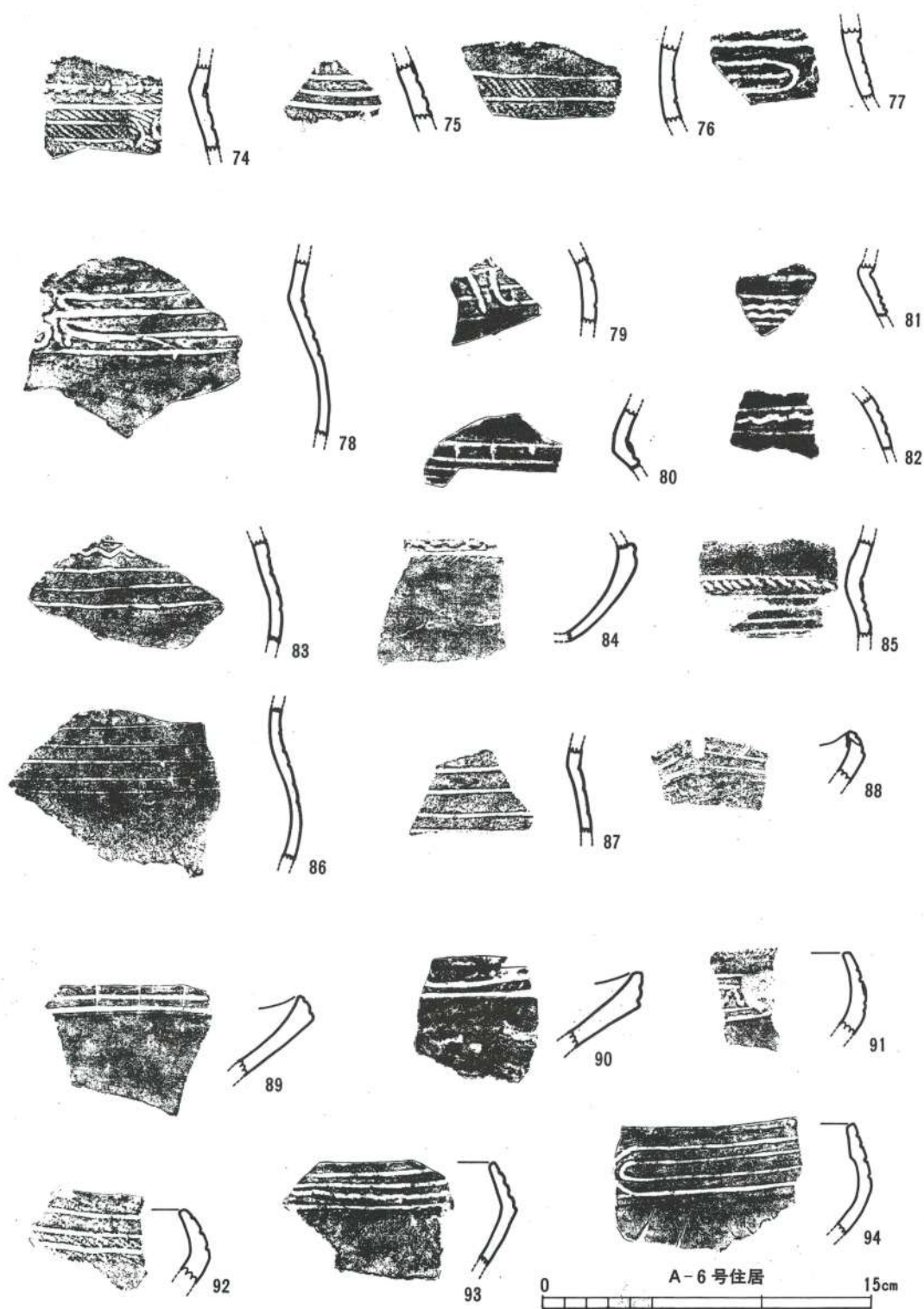
第20図 遺構内出土土器拓影 3 (1/3)



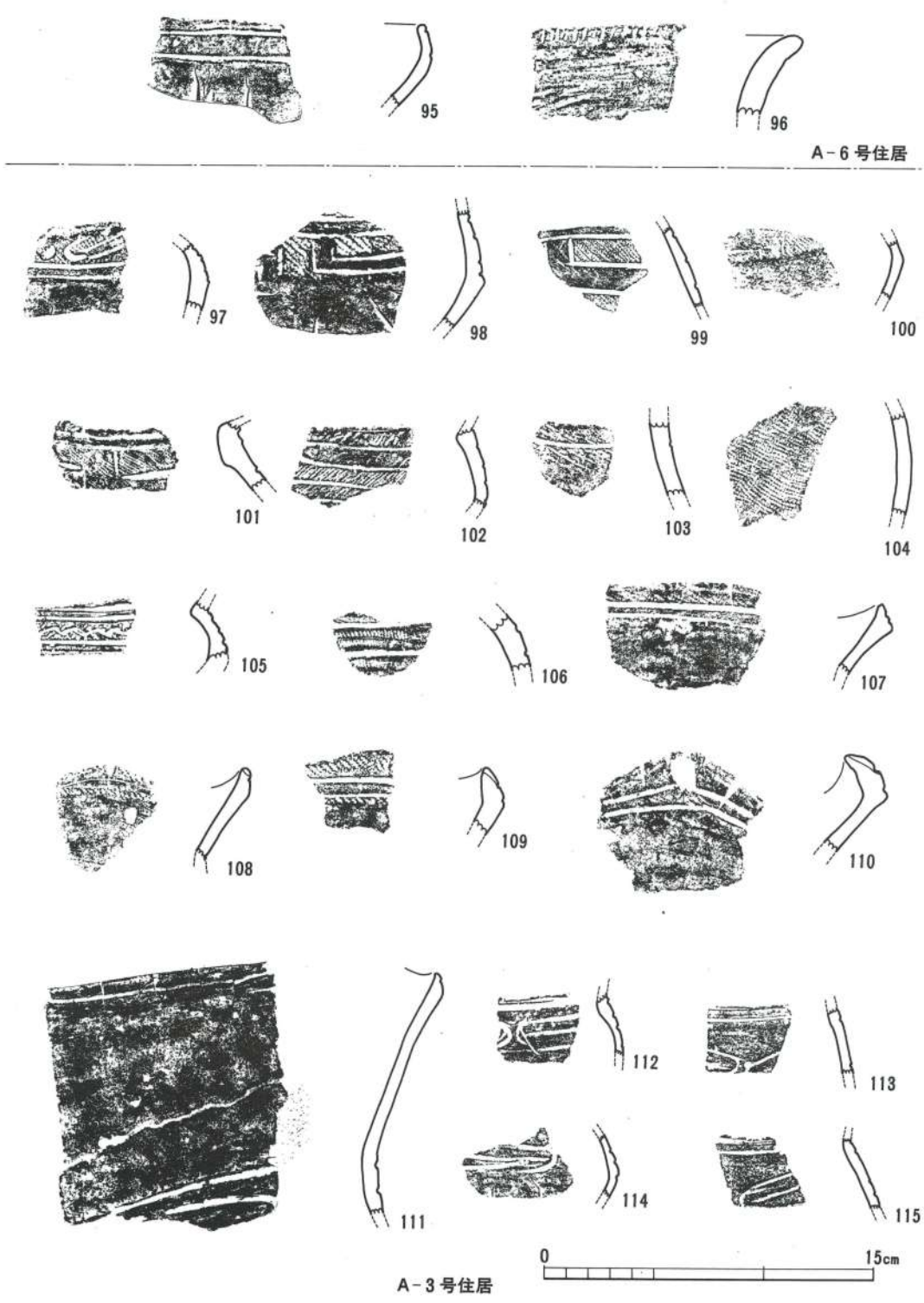
A-8 号住居



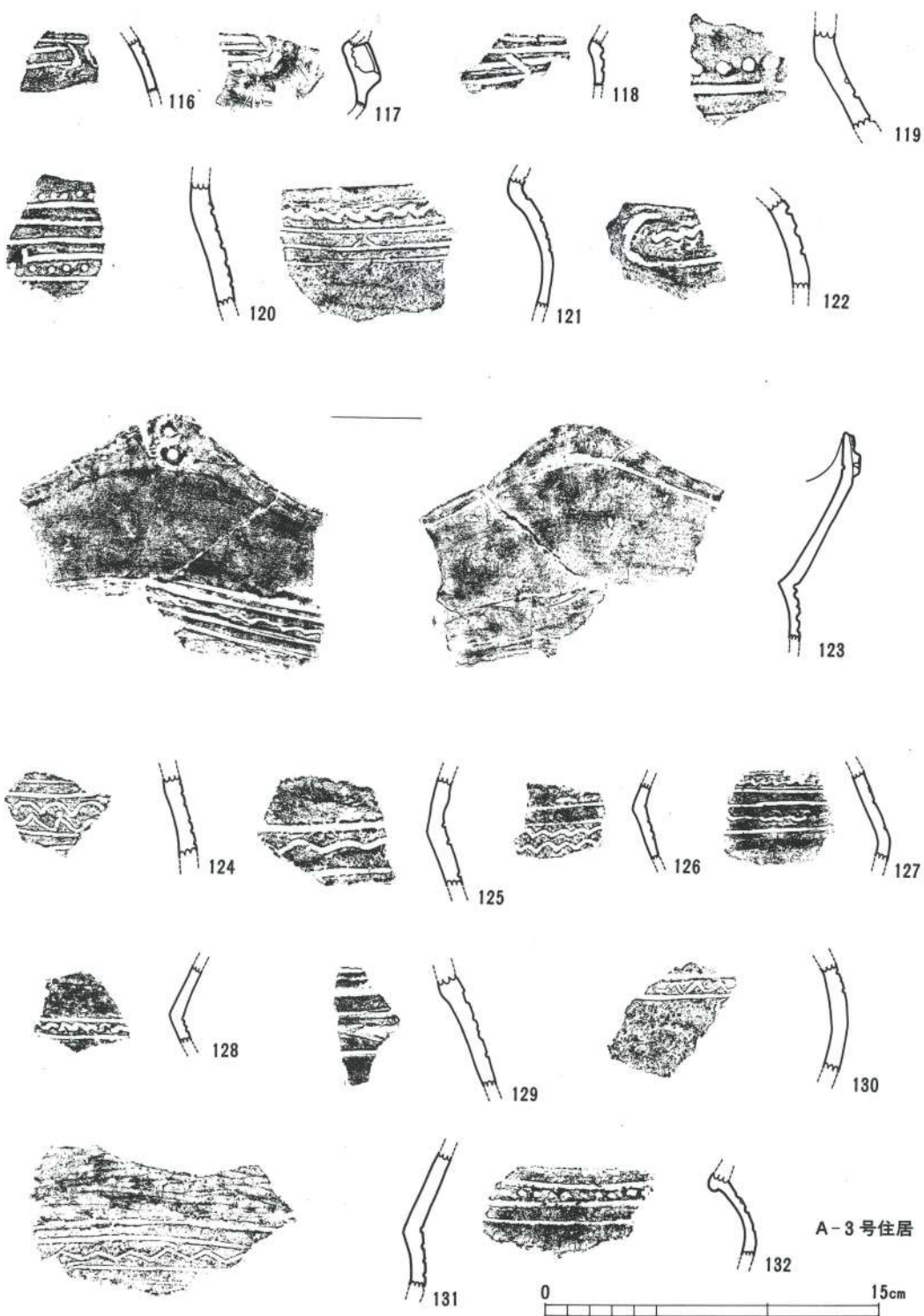
第21図 遺構内出土土器拓影 4 (1/3)



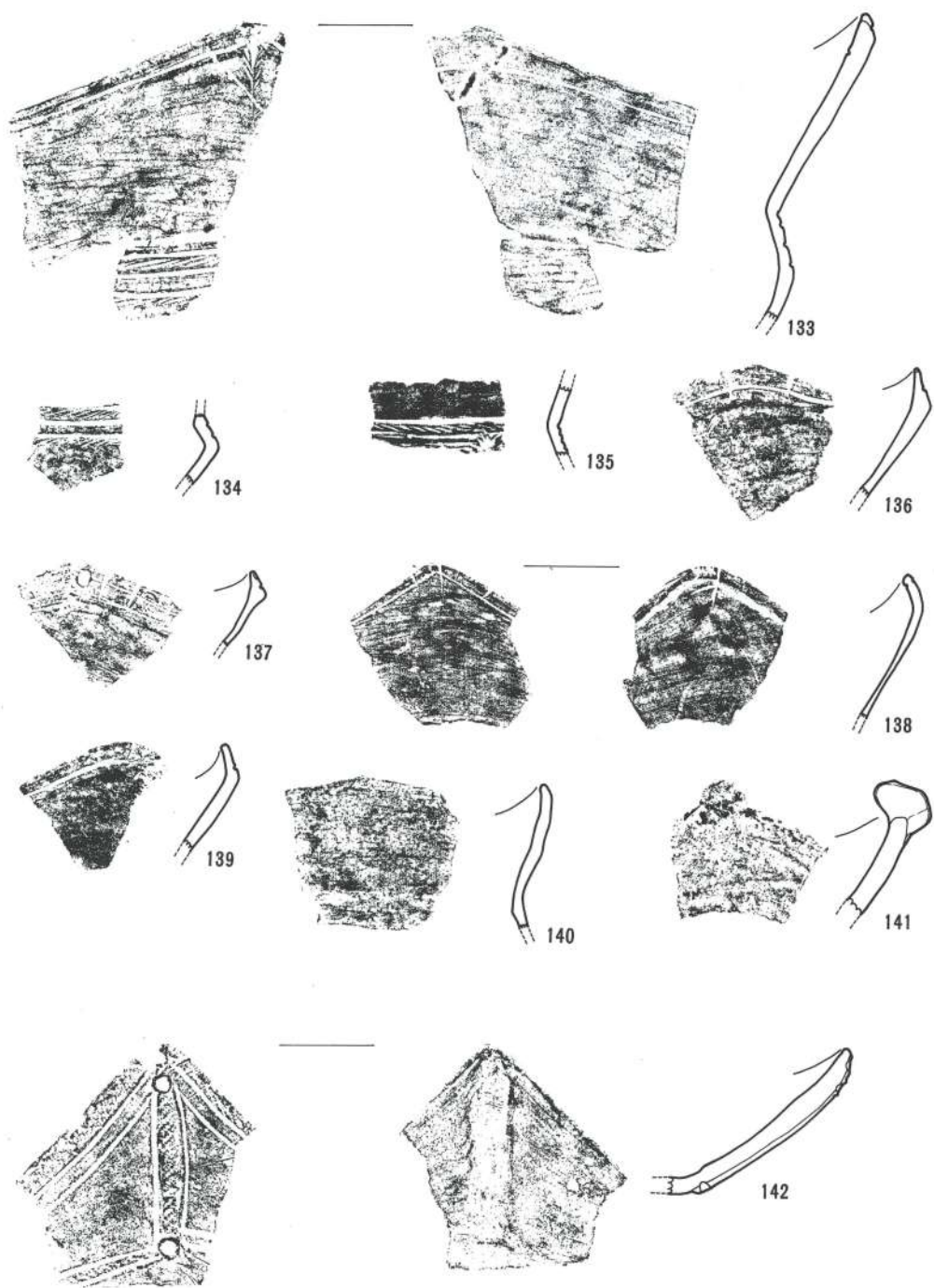
第22図 遺構内出土土器拓影 5 (1/3)



第23図 遺構内出土土器拓影 6 (1/3)



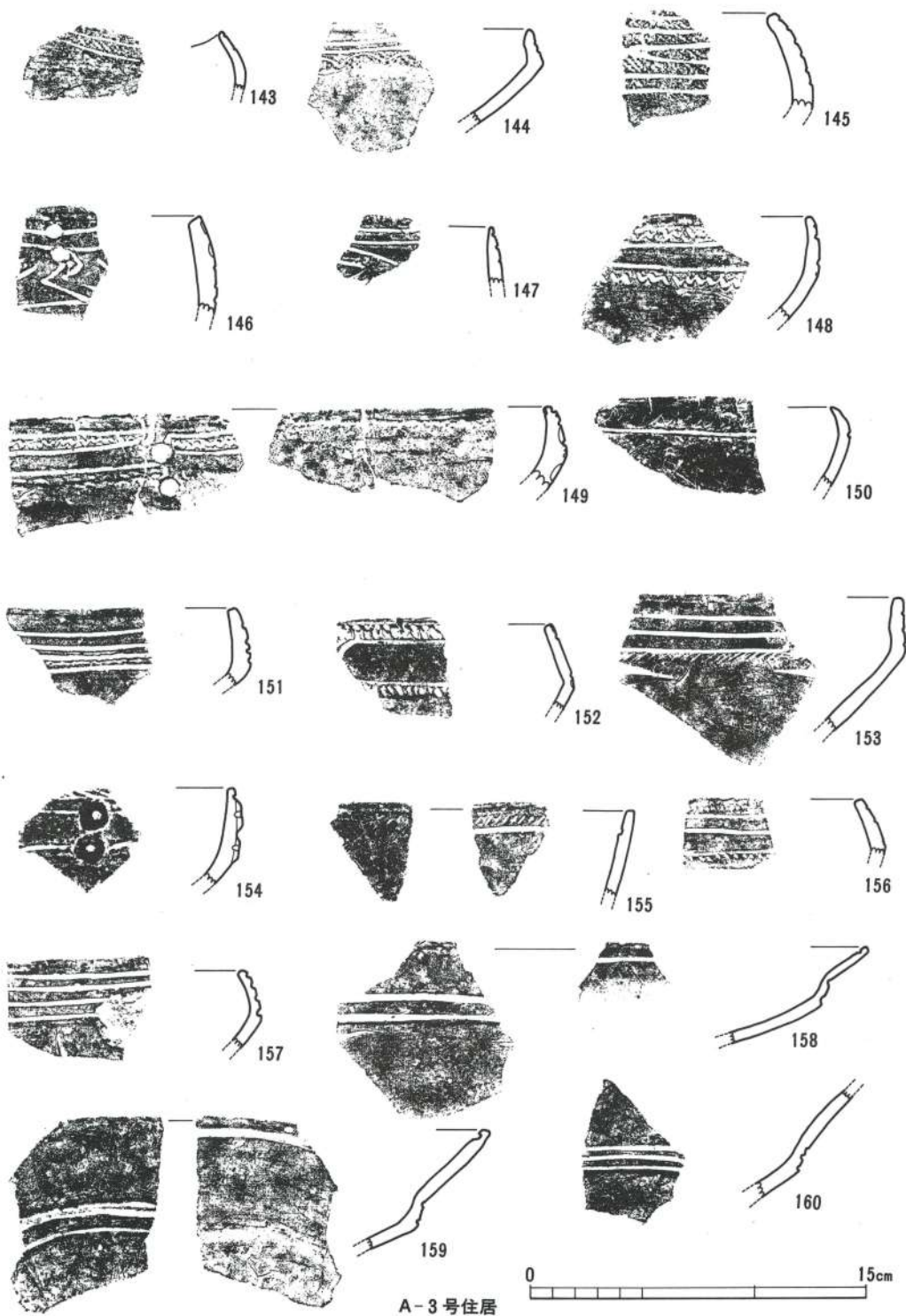
第24図 遺構内出土土器拓影 7 (1/3)



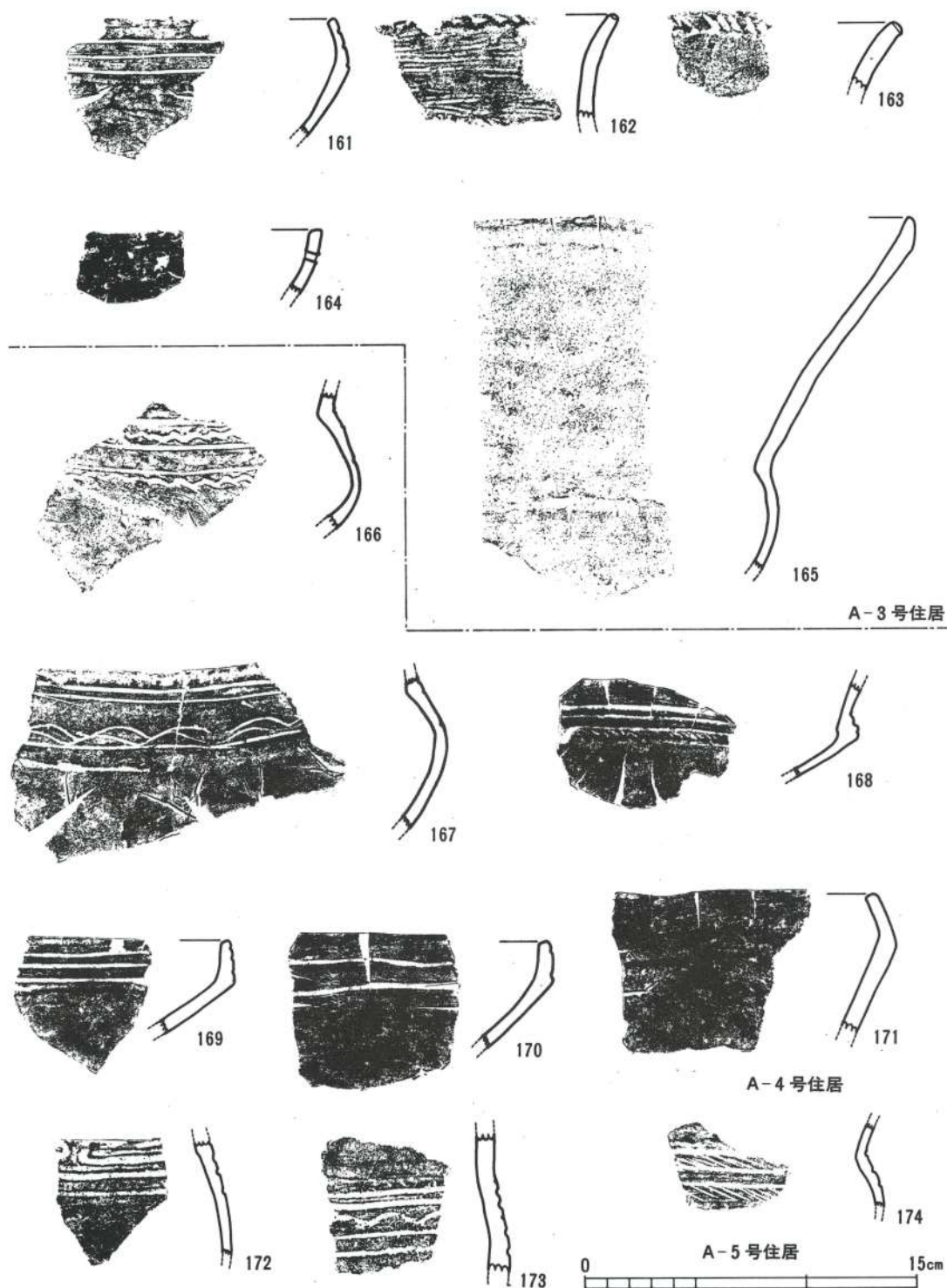
A-3 号住居

0 15cm

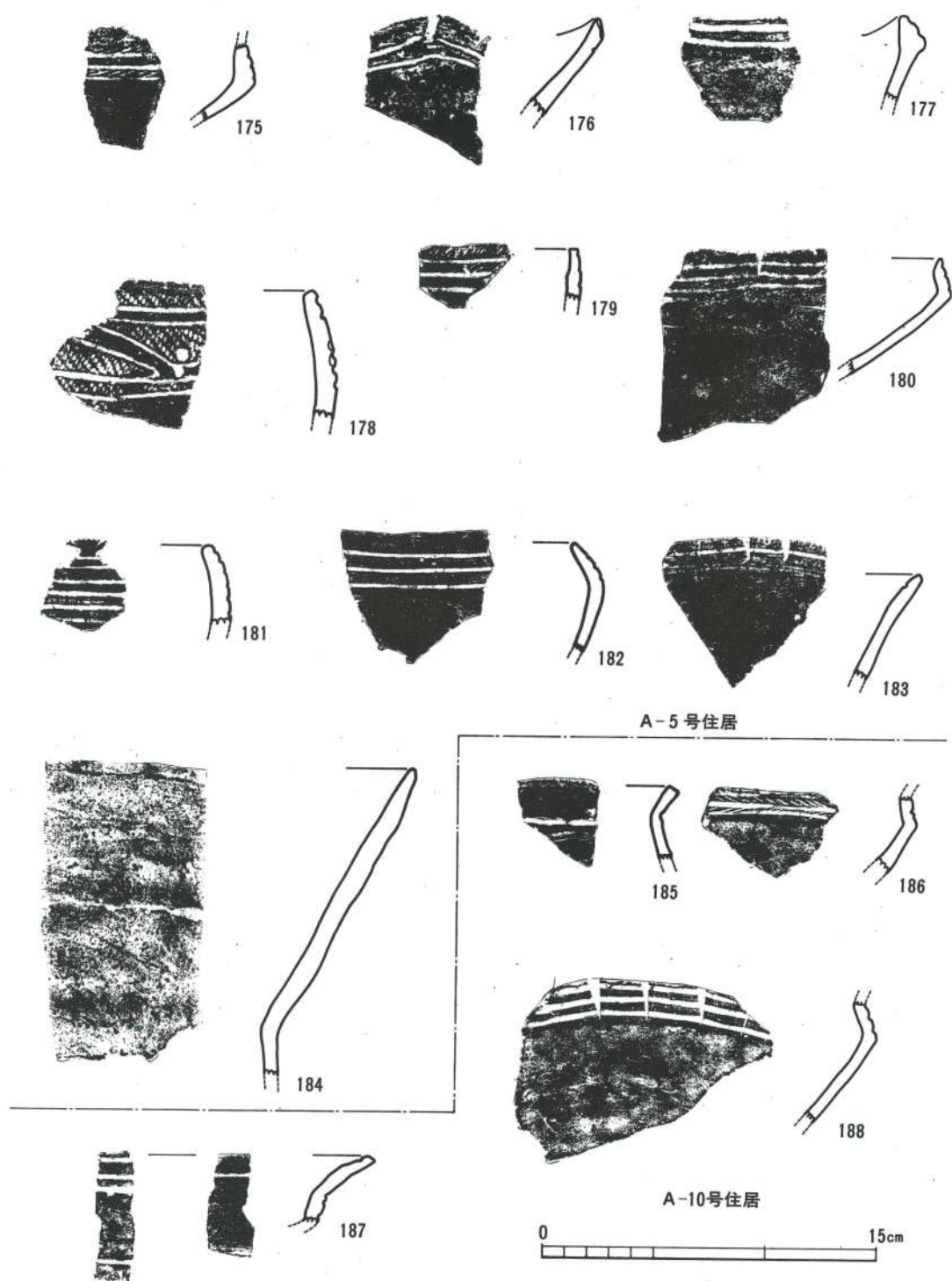
第25図 遺構内出土土器拓影 8 (1/3)



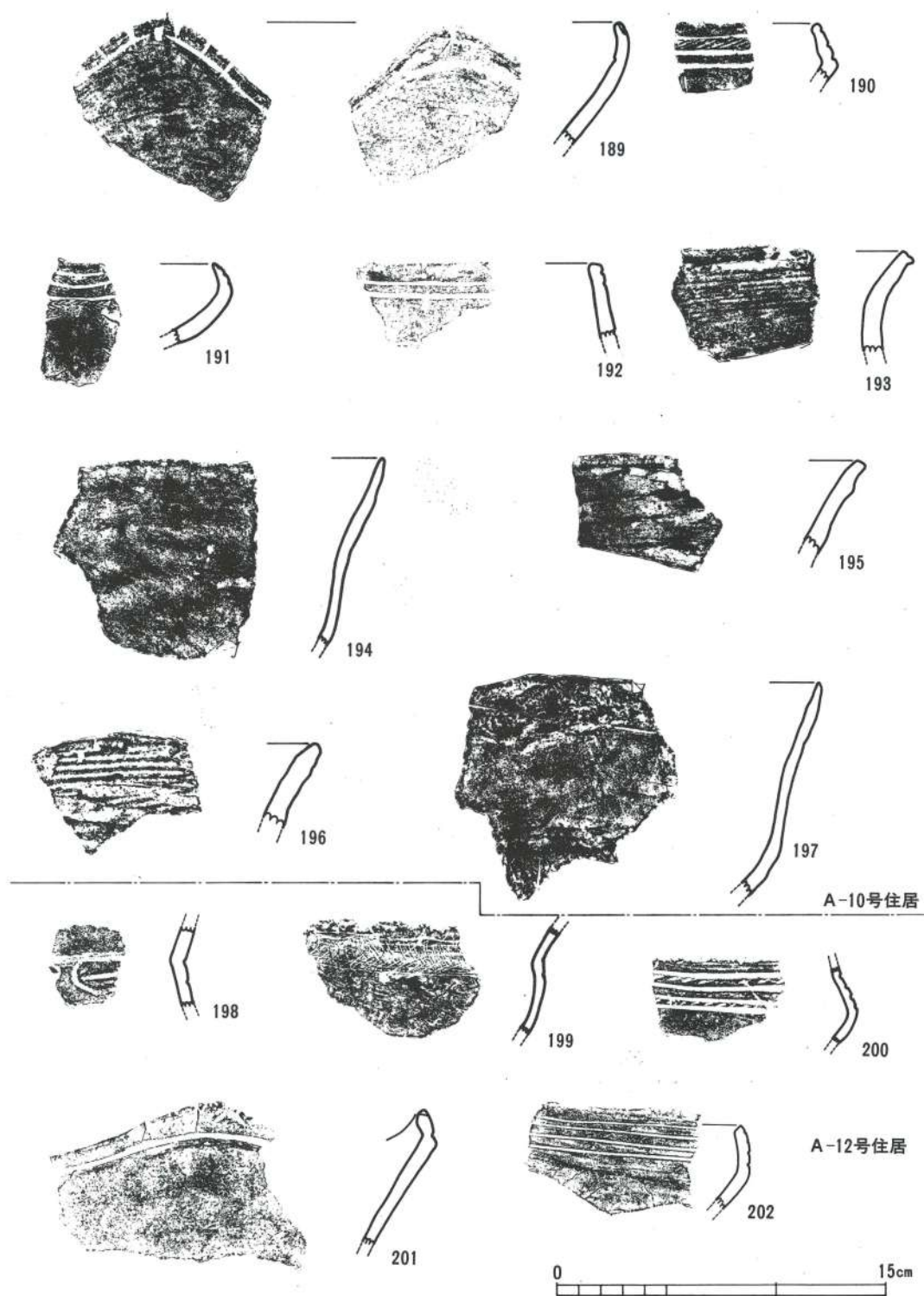
第26図 遺構内出土土器拓影 9 (1/3)



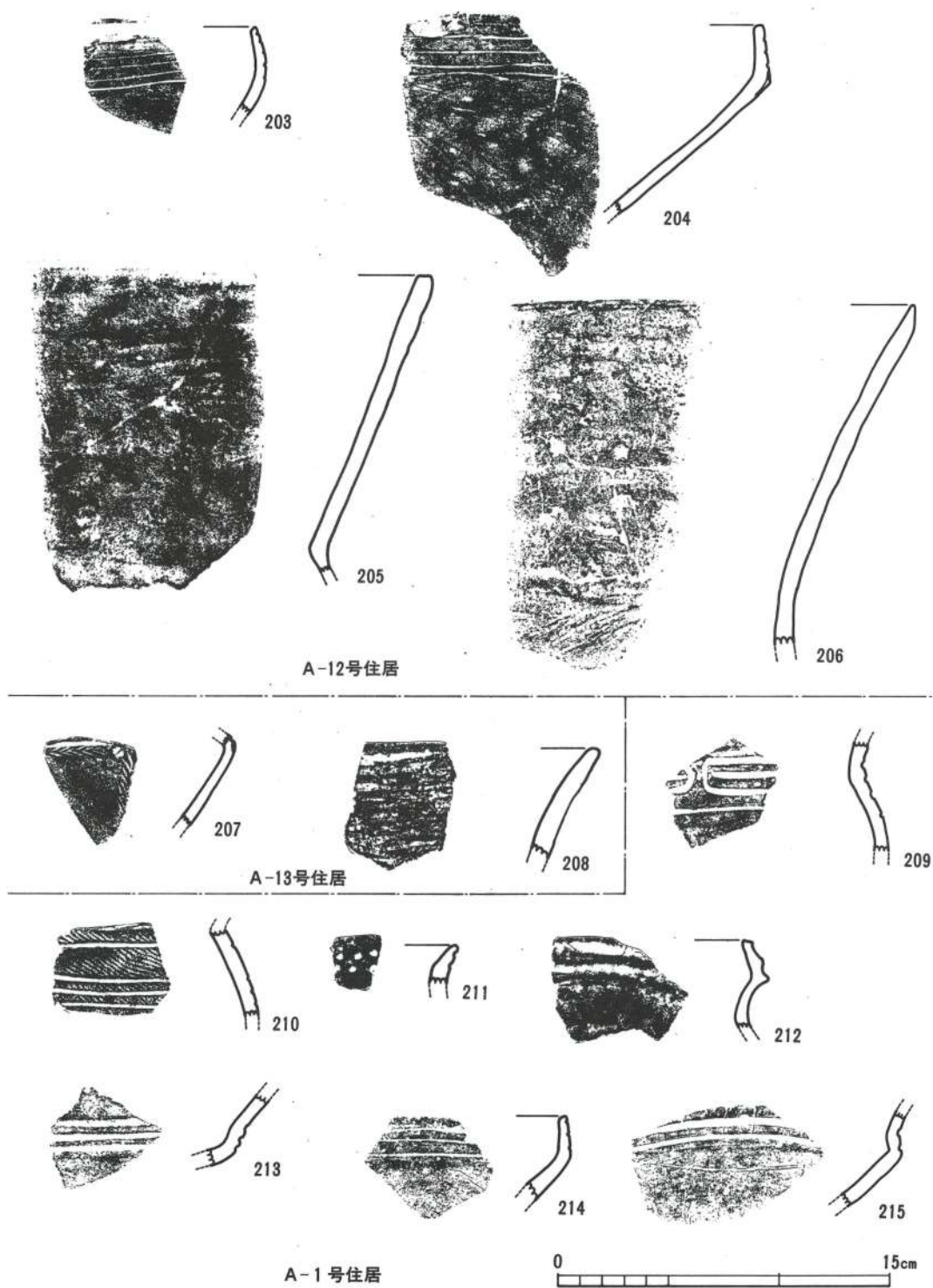
第27図 遺構内出土土器拓影 10 (1/3)



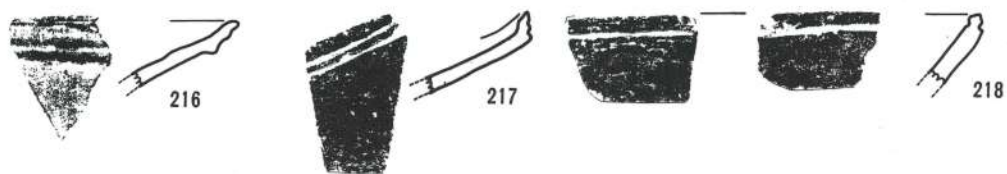
第28図 遺構内出土土器拓影 11 (1/3)



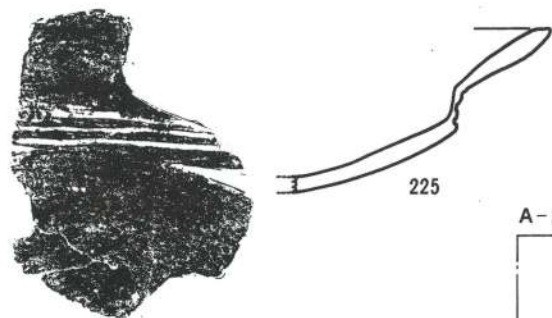
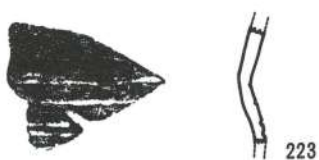
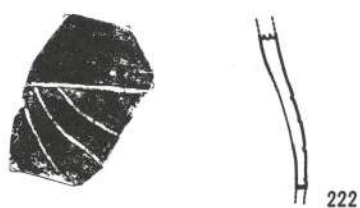
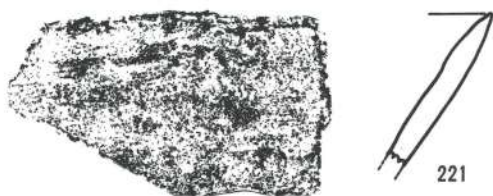
第29図 遺構内出土土器拓影 12 (1/3)



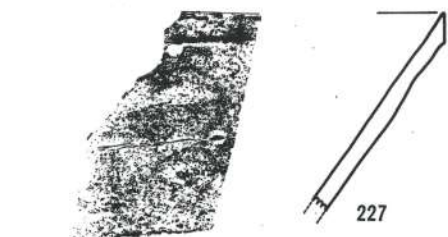
第30図 遺構内出土土器拓影 13 (1/3)



A-1 号住居



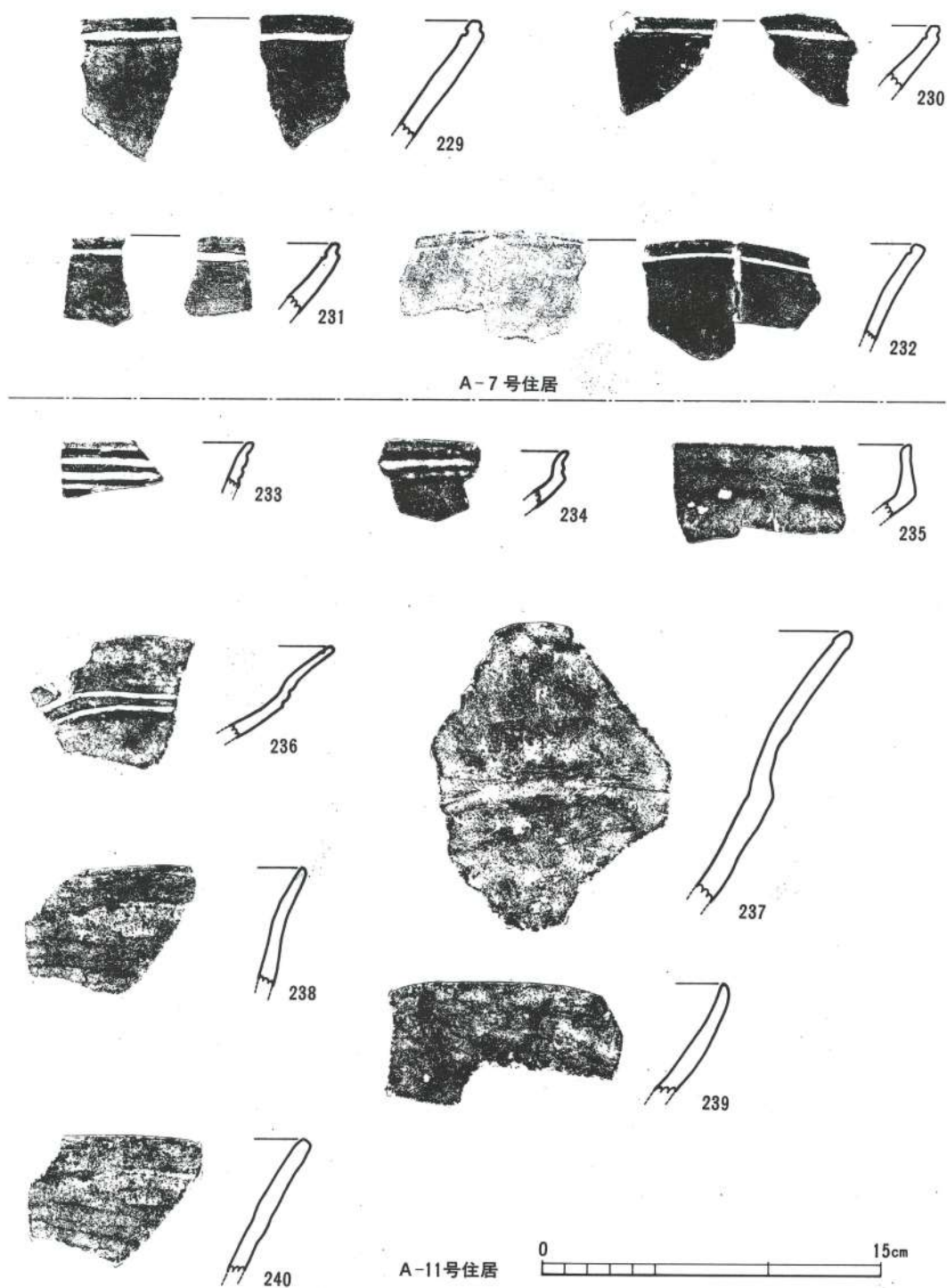
A-2 号住居



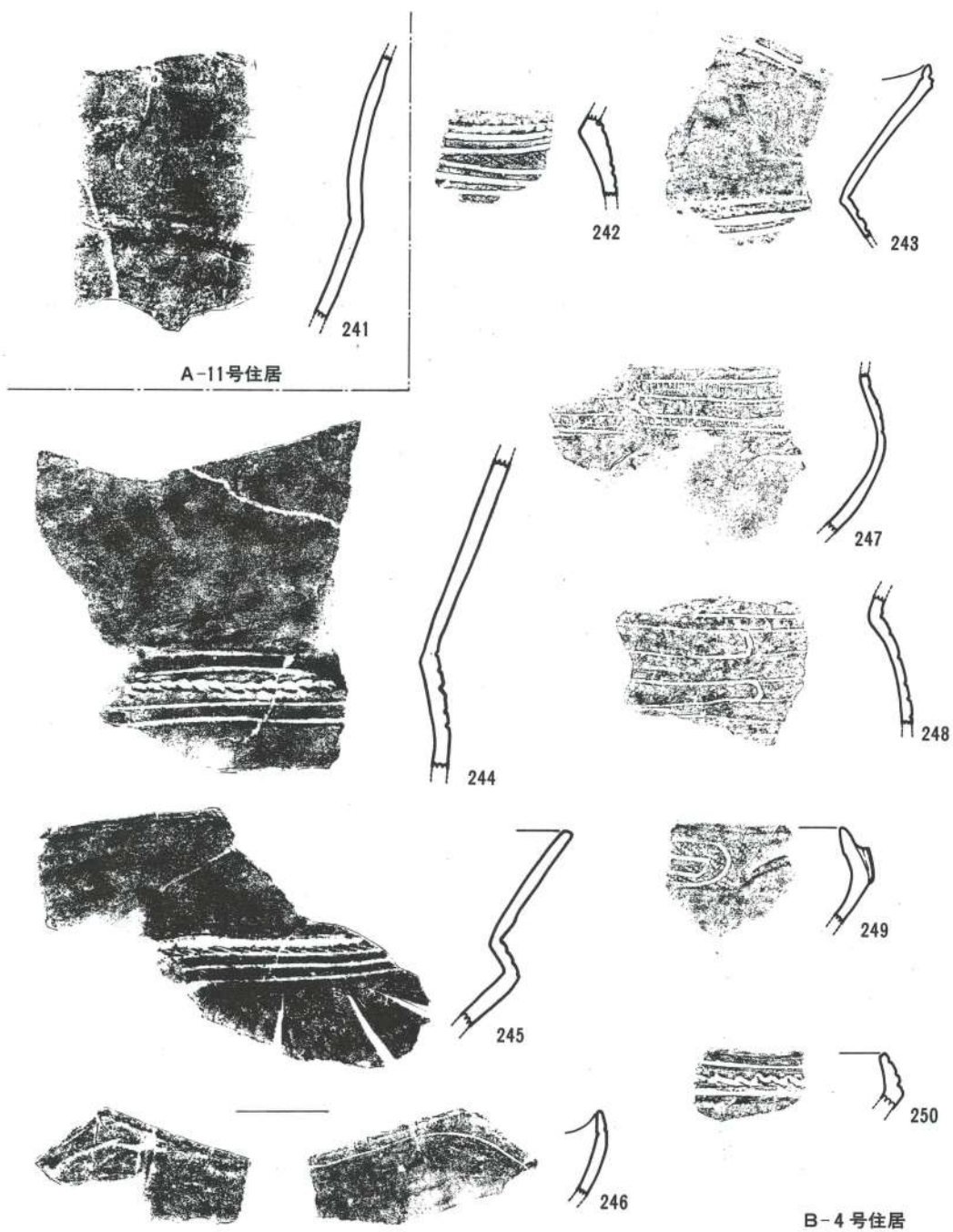
A-7 号住居



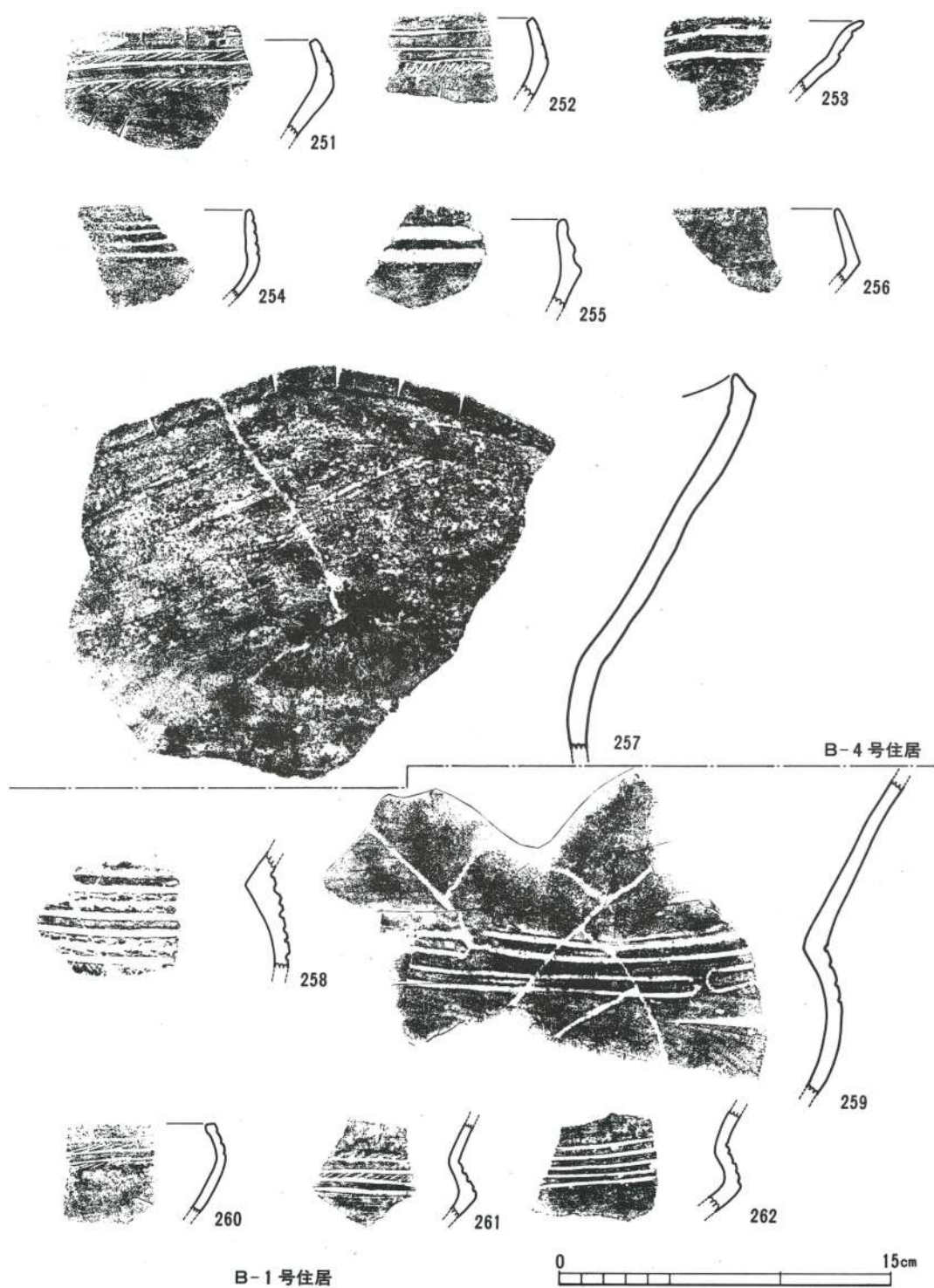
第31図 遺構内出土土器拓影 14 (1/3)



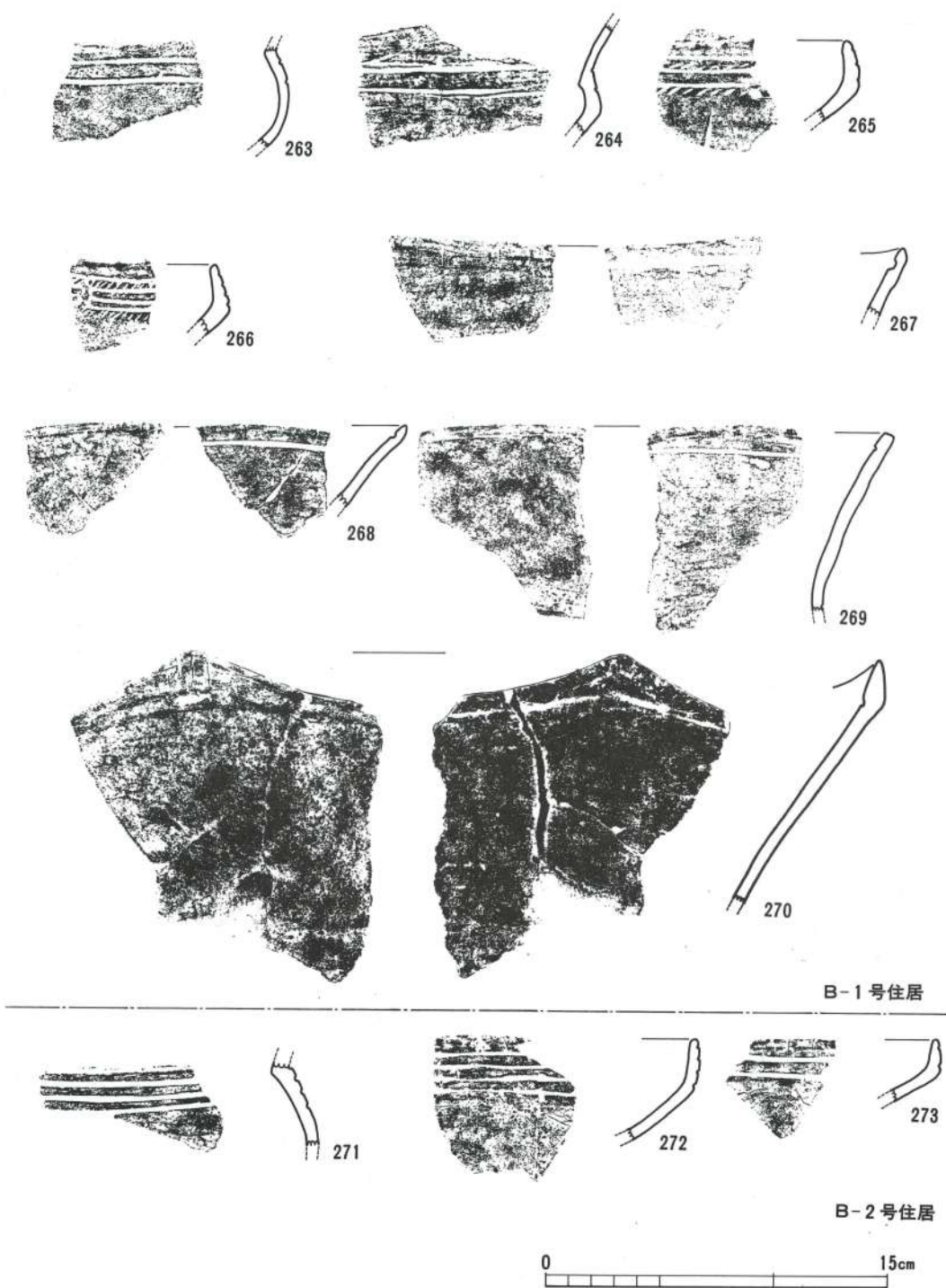
第32図 遺構内出土土器拓影 15 (1/3)



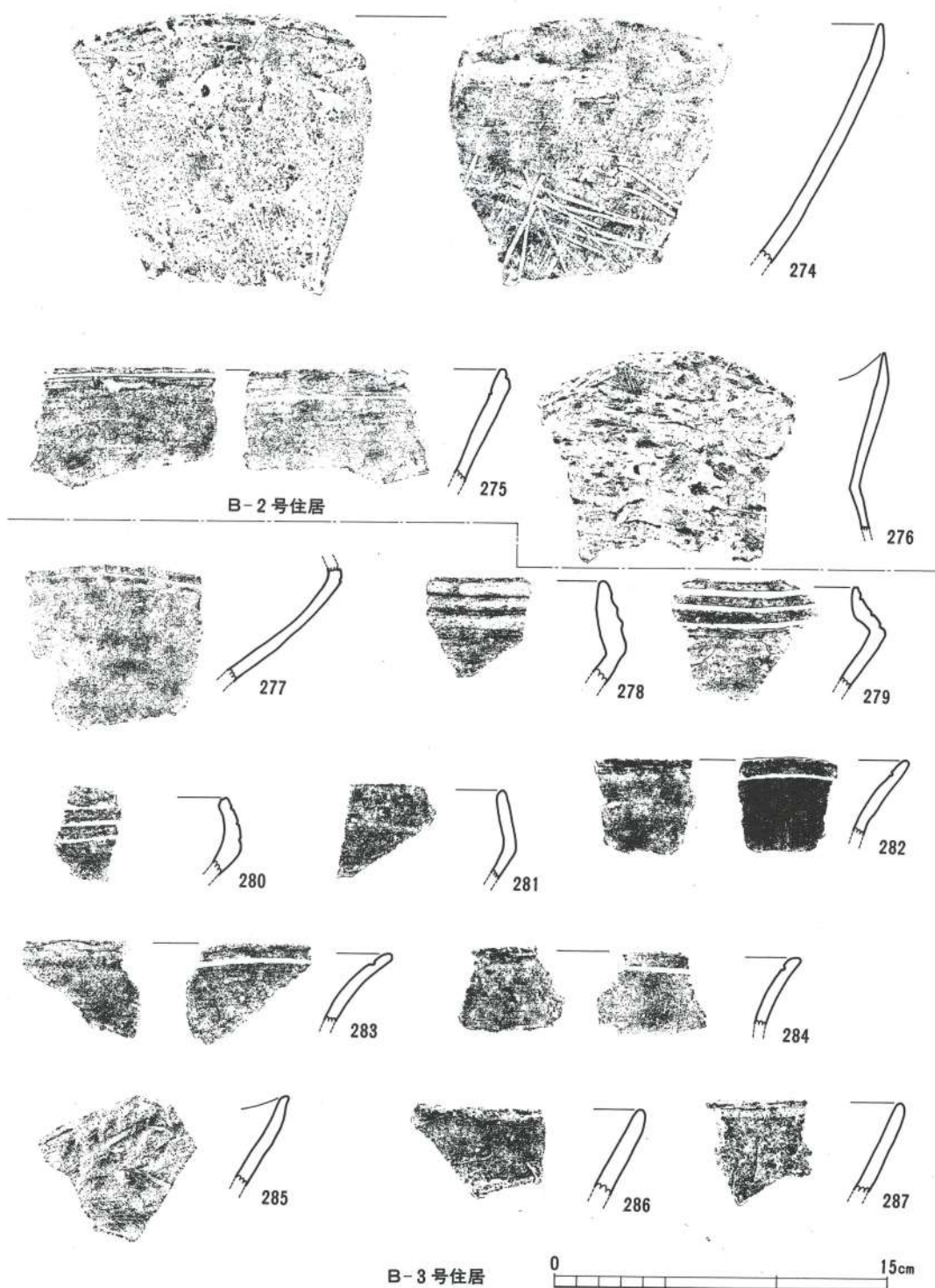
第33図 遺構内出土土器拓影 16 (1/3)



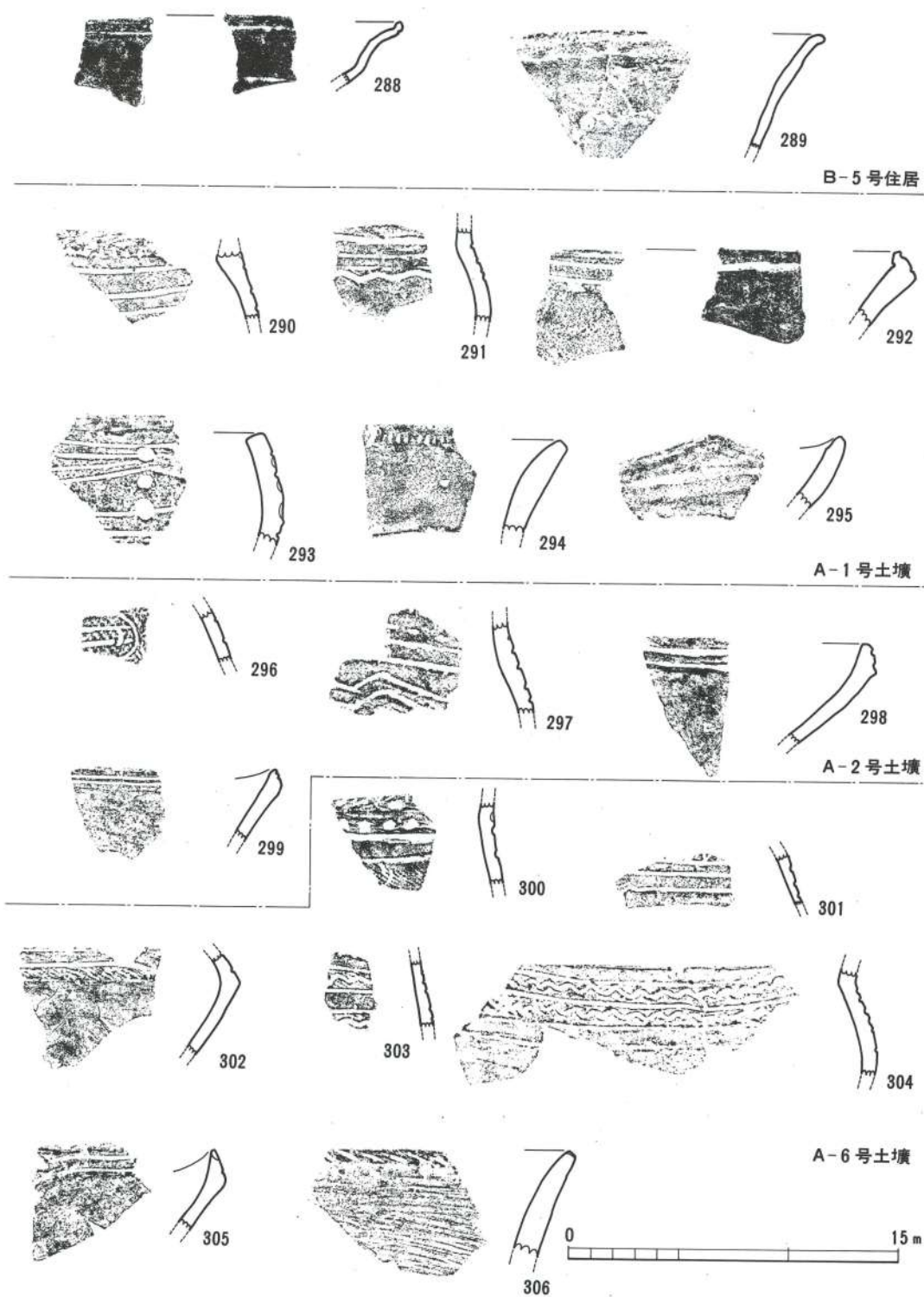
第34図 遺構内出土土器拓影 17 (1/3)



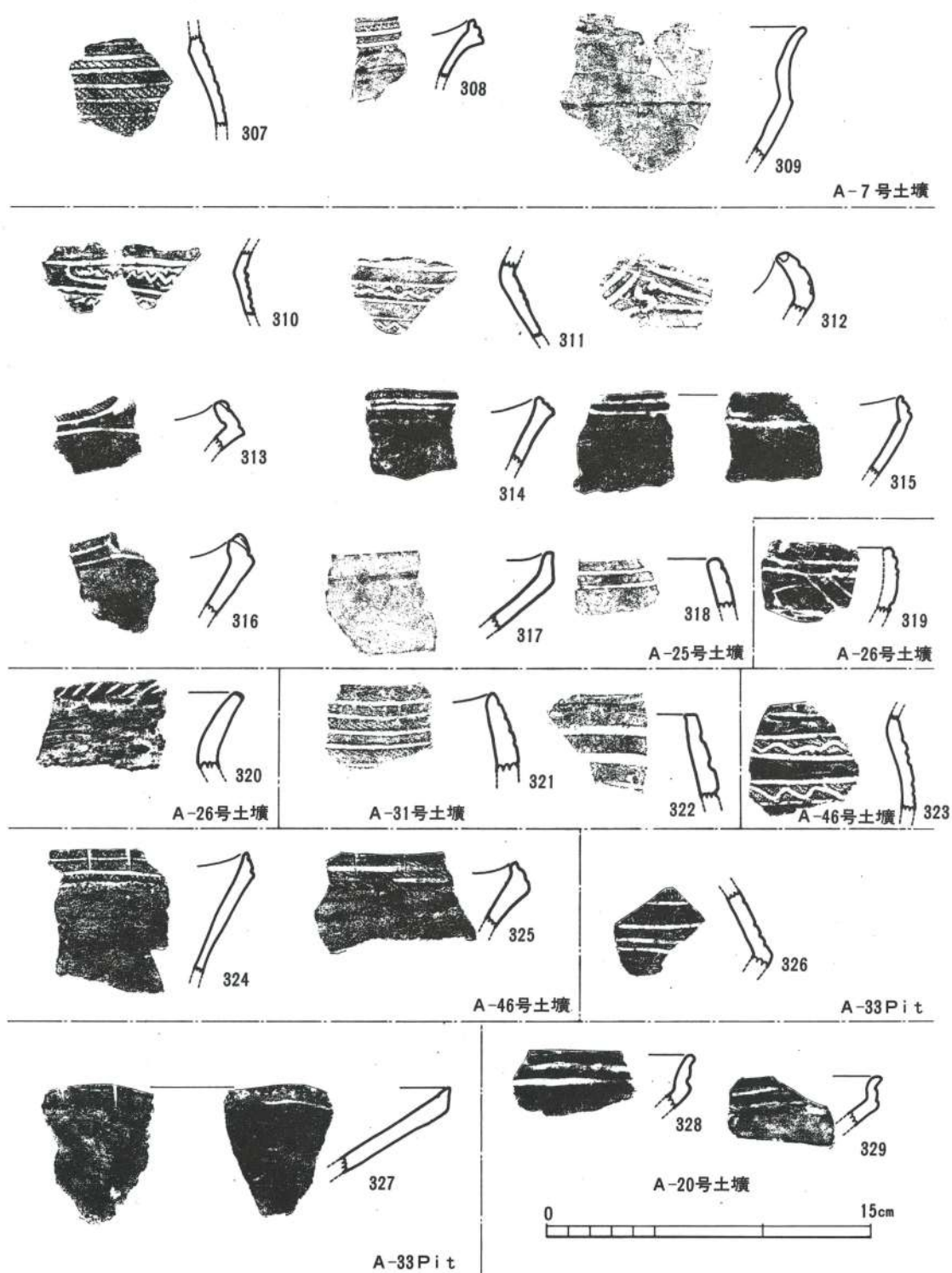
第35図 遺構内出土土器拓影 18 (1/3)



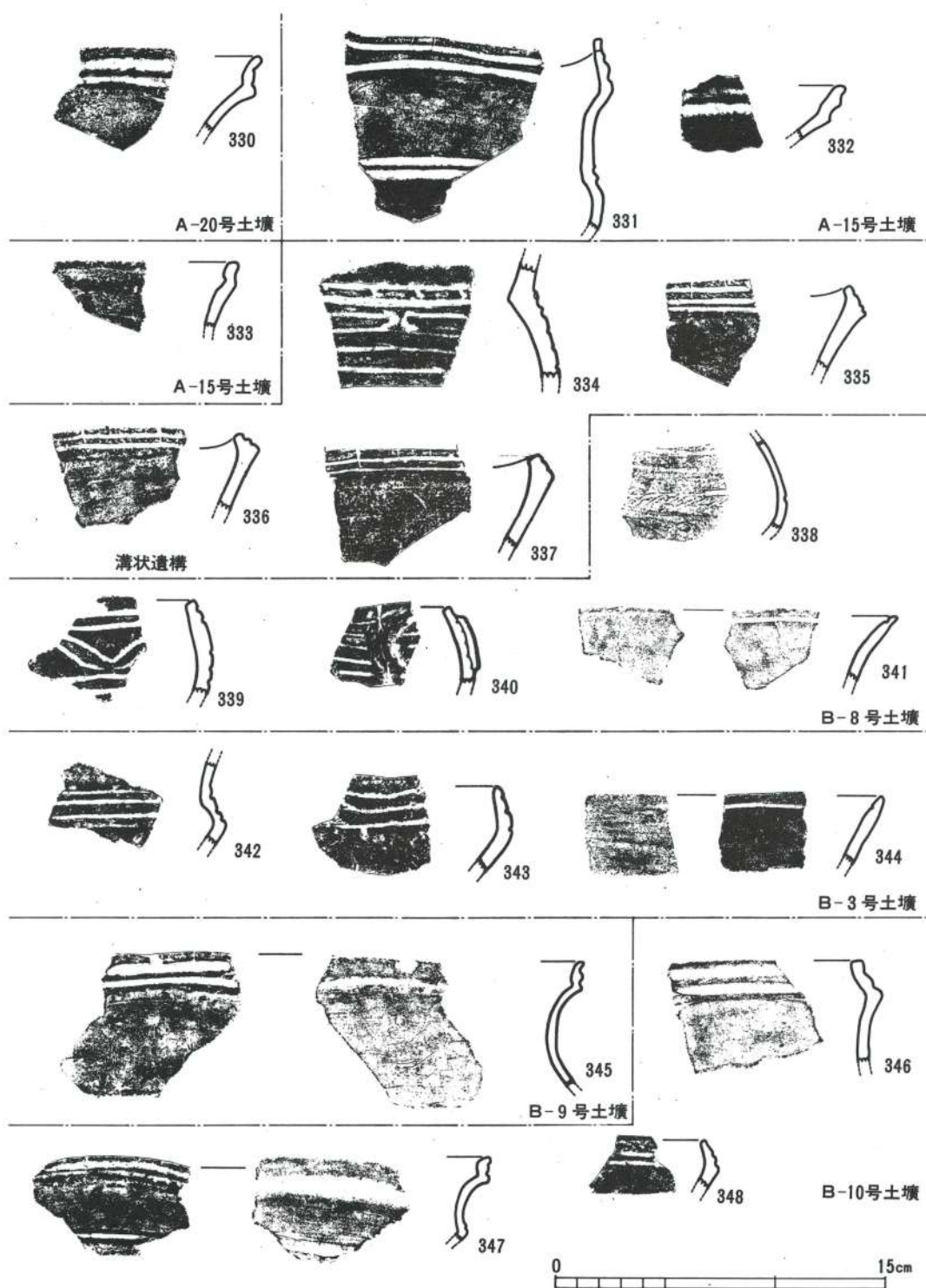
第36図 遺構内出土土器拓影 19 (1/3)



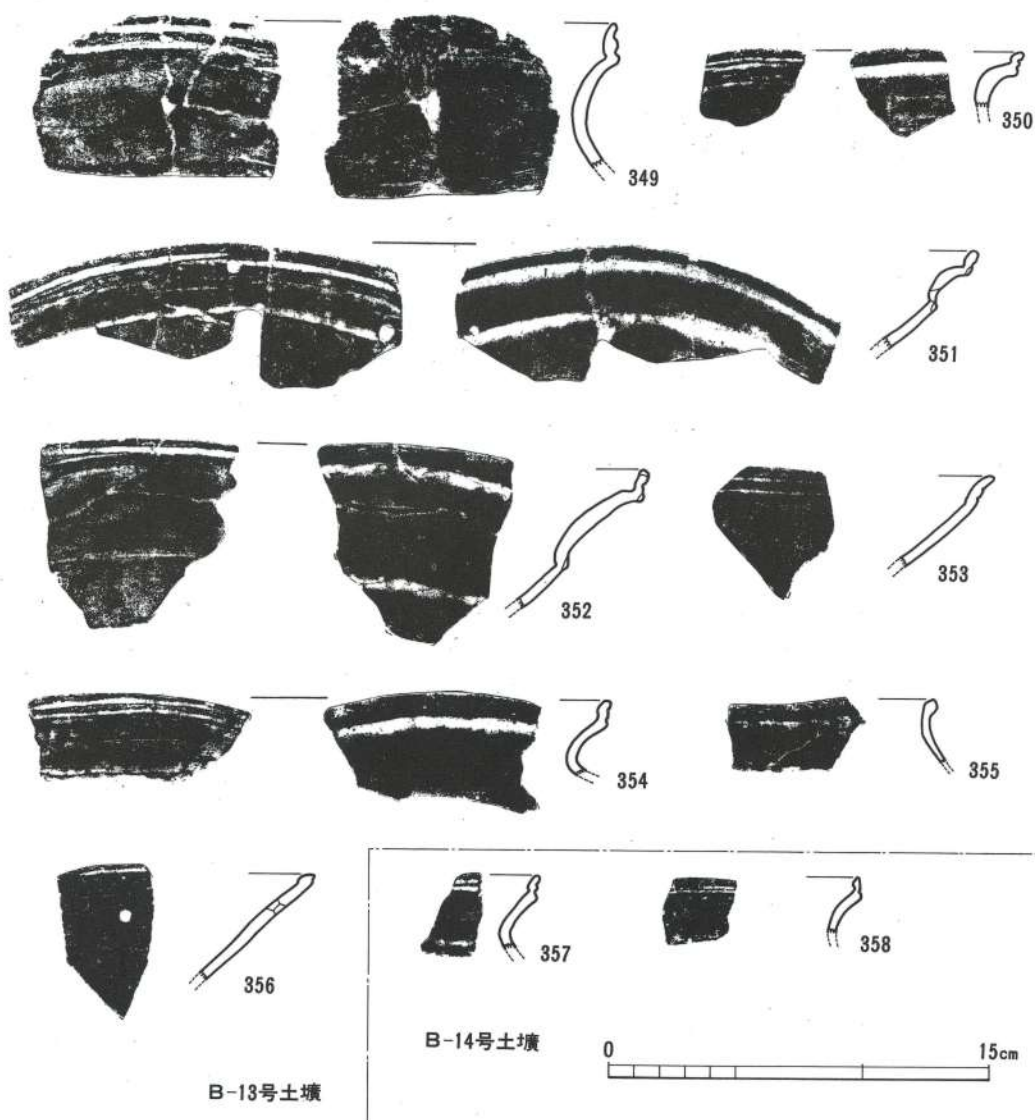
第37圖 遺構内出土土器拓影 20 (1/3)



第38图 遺構内出土土器拓影 21 (1/3)



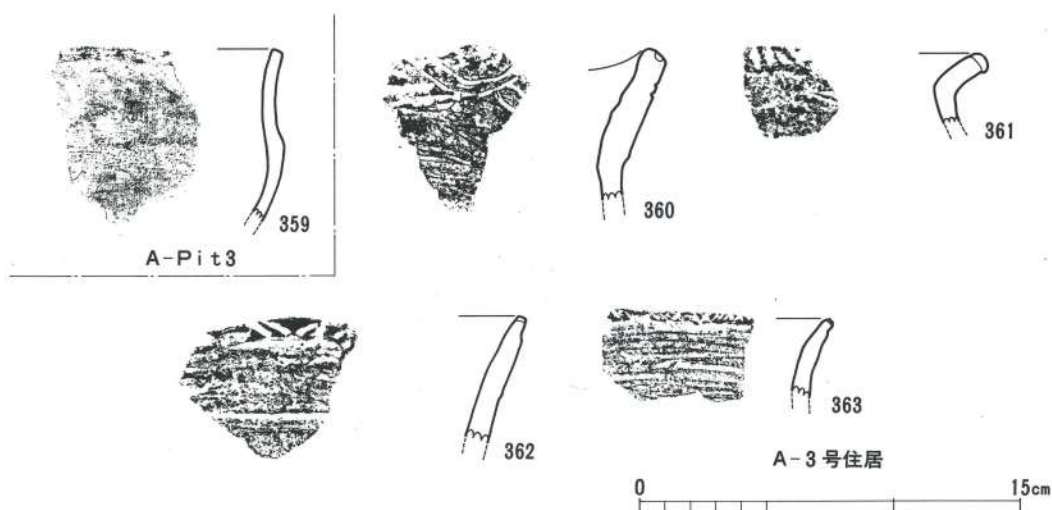
第39図 遺構内出土土器拓影 22 (1/3)



第40図 遺構内出土土器拓影 23 (1/3)

B群土器 (第43~36図、図版18・19) A-8・6・3号住居内出土土器群を資料とする。

I-a類 8は波状口縁を呈した深鉢で、口縁文様帯は省略されているが、胴部文様帯は2条の沈線とその間にχ字状文が施されている。12は波状口縁を呈した深鉢で、口縁部文様帯は、1条の沈線が施され、内面に1条の沈線が巡らされる。胴部文様帯は5条の沈線とχ字状文が組み合わせられている。13は波状口縁を呈した鉢と思われる、口縁部文様帯には1条の沈線が配され、胴部には、4条の横位方向の沈線と2条の縦位方向の沈線によってχ字状文が描き出されている。



第41図 遺構内出土土器拓影 24 (1/3)

I - b 類 7は大きな波状口縁を呈した深鉢で、口縁部文様帯は省略されるが、胴部文様帯は4条の凹線文が巡っている。

I - c 類 9は波状口縁呈した深鉢で、口縁部文様帯は2条の沈線が施されるが、胴部文様帯は省略されている。

I - d 類 10は平縁の鉢で、口縁部文様帯には1条の沈線が巡らされ、胴部文様帯は2条の沈線間にサイクルの短い波状文を組み合わせた文様を2段に施している。

II - a 類 15は浅鉢で、口縁部文様帯として2条の沈線と逆ノの字状の隆線を施す。

II - b 類 16は浅鉢で、口縁部文様帯として2条の沈線を巡らせている。

II - c 類 14は小形の浅鉢で、口縁部には1対の突起を配し、横位方向の回転斜縄文RLと沈線による弧文を加えている。

III 類 11は口縁部が直立する深鉢で、17・18は口縁部が逆くの字状に屈折する深鉢で、いずれも粗製もしくは半精製の土器である。

C 群土器 (第48～49図、図版19) A - 4・5・10・12号住居内出土の土器群を資料とする。

I - a 類 23はやや小形の鉢で、胴部文様帯にX字状文を配し、さらに胴部中央に2条沈線を引き、その間に細線羽状文を充填する。

I - b 類 26は深鉢に近いが、胴部のみで、やや小形であるため鉢として分類する。胴部文様帯は幅広の沈線を4条巡らさせており、A 群 (I - b 類) に近似するが、やや細身である。

II - a 類 19は浅鉢で、胴部文様帯に4条の沈線を巡らせ、押点文を上下2段に配して正面的なアクセントを描き出している。31は平縁の浅鉢で、頸部に1条の沈線を巡らせてるが、装

飾文的なものは省略されている。34は平縁の浅鉢で、文様帯は胴部のみである。文様は4条の沈線を巡らせており、口縁部内面には1条の沈線を配している。

Ⅱ - b類 21は外反する口縁部が短い浅鉢で、胴部文様帯として3条の幅広な沈線を巡らせ、屈曲部に細線羽状文を加えている。

Ⅱ - c類 20は口縁部が内傾しており、口縁部文様帯として4条の沈線と細線羽状文が組み合わせてある。

Ⅱ - a類 22はボール形の浅鉢で、口縁部内面に沈線を巡らせる。

Ⅲ類 25は脚台付鉢の脚部である。

Ⅳ類 粗製もしくは半精製の土器である。32と36は口縁部の内面に1条の沈線を巡らせている。33と35は無文で口唇部が鋭角になっている。24は小形の深鉢で粘土の輪積み、もしくは巻き上げ痕を残している。

D群土器 (第48図、図版19) A-1号住居出土の土器群を資料とする。

I - a類 27は浅鉢で口縁部内面に1条の沈線を巡らす。文様帯は胴部上半にあって3条の幅広の沈線を施す。30は小形の浅鉢で、胴部文様帯として2条の沈線が巡っている。

I - b類 28は浅鉢で、口縁部文様帯として2条の凹線文が巡り、その上に押点文を2段に施す。29は浅鉢で口縁部文様帯として2条の凹線文を巡らせ、胴部文様帯は退化し沈線1条が巡るのみである。

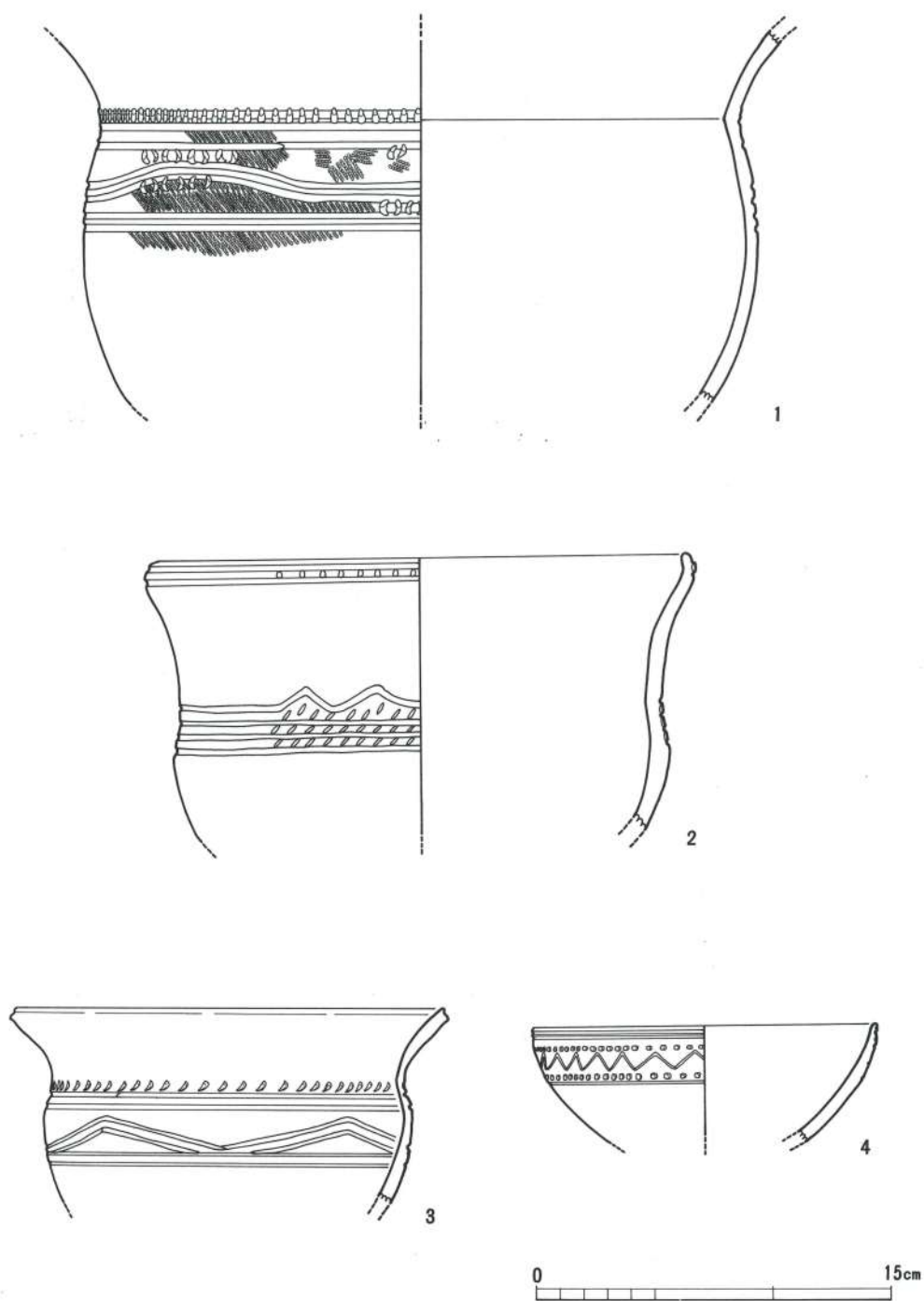
E群土器 (第51図、図版20) B-6号住居出土の土器を資料とする。

I類 37は浅鉢で、口縁部が外反し、胴部が強く屈曲する。文様帯は、口縁部と胴部屈曲部分とに巡る1条の沈線のみで、文様帯は退化しまさにその痕跡を留める。

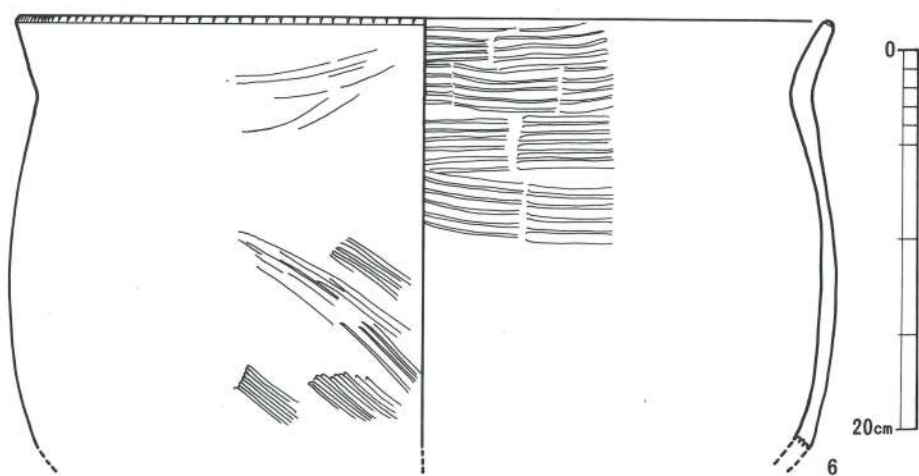
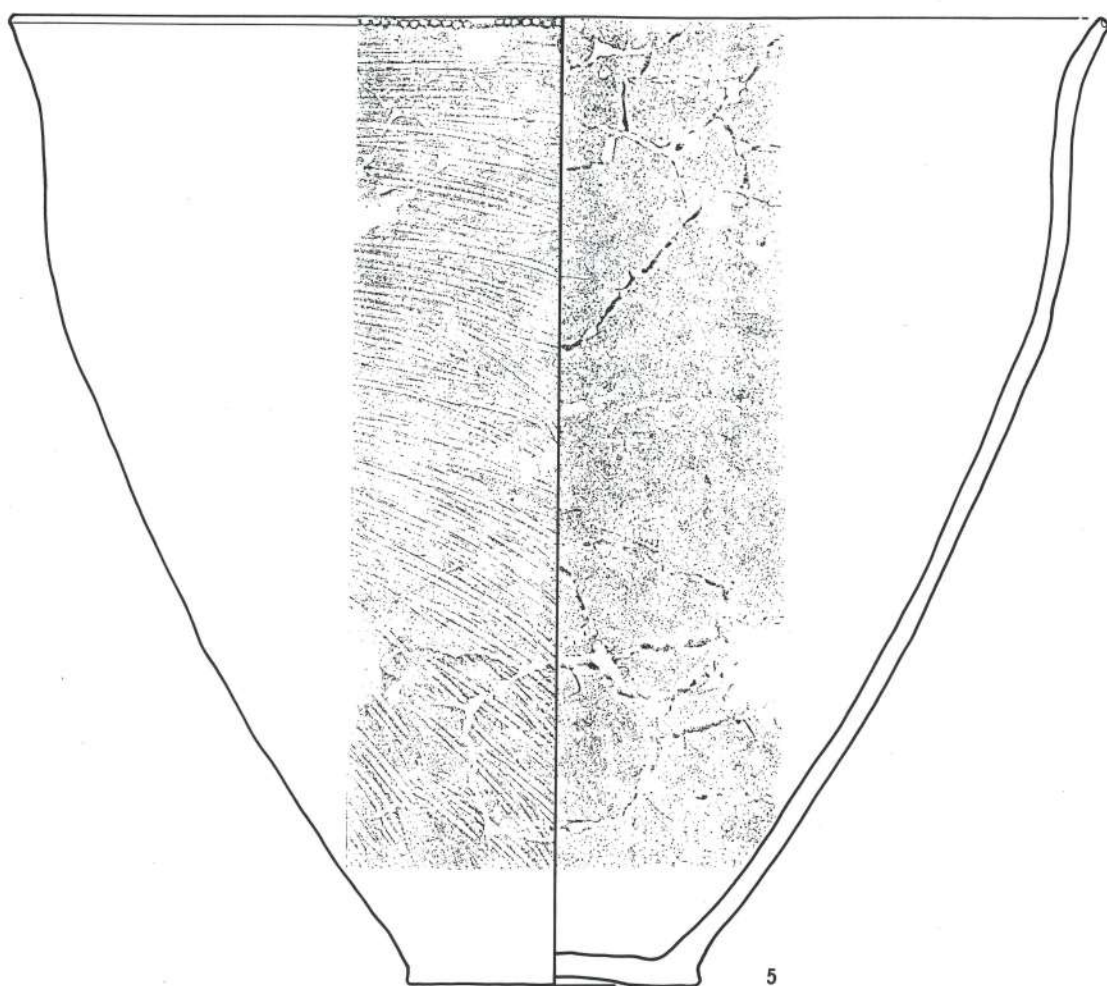
F群土器 (第51図、図版20) B-5号住居出土の土器を資料とする。

38は丸底の小形甕であり、それまでの器形とは異なっている。文様帯は全くなく外面を磨研によって仕上げている。口縁部には突起が附されている。

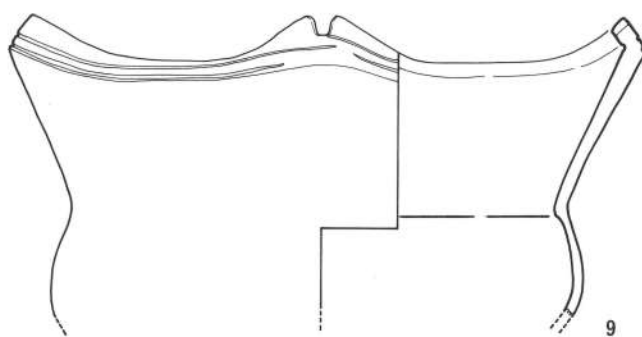
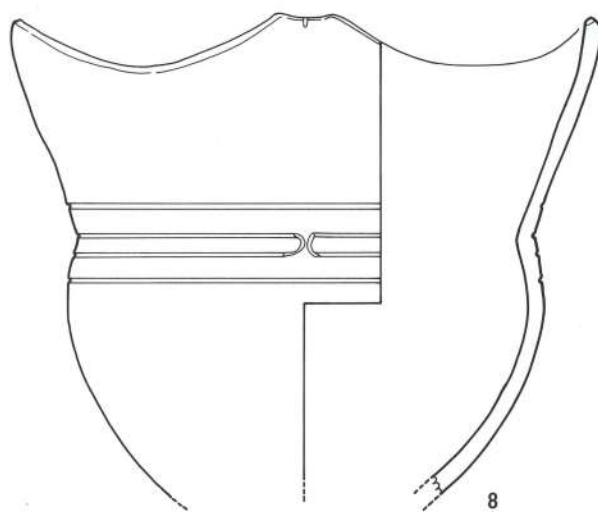
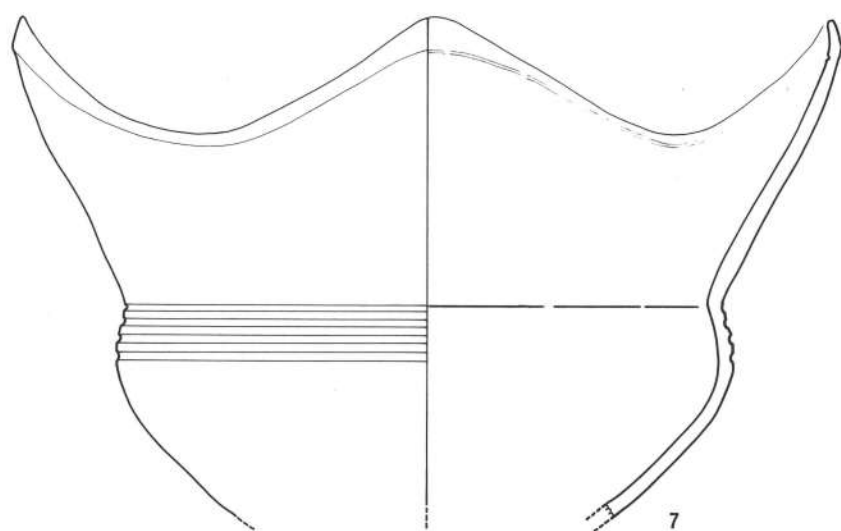
遺構内出土の土器群は、破片資料では0~7群に区分され、完形土器ではA~Fの6群に区分された。両者の関係が示すところは、縄文後期から晩期にかけての土器型式を再度整理する基本となり得よう。



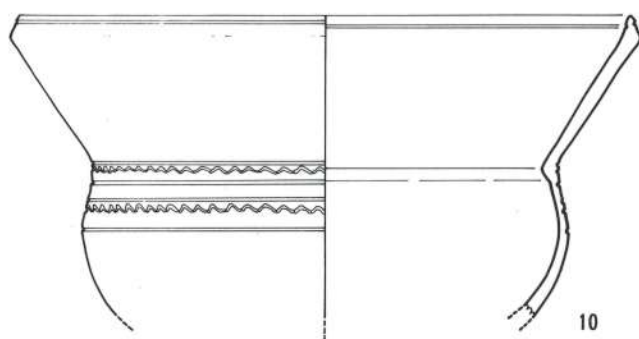
第42図 遺構内出土土器実測図 1 (1/3)



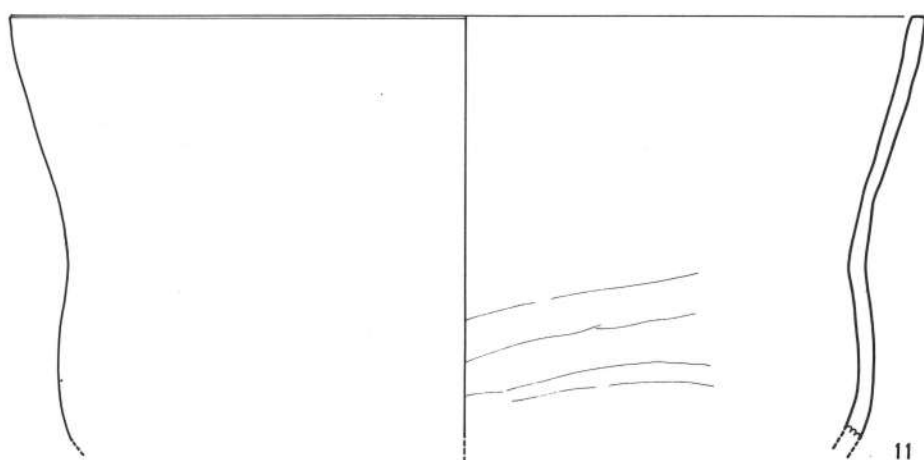
第43図 遺構内出土土器実測図 2 (1/4)



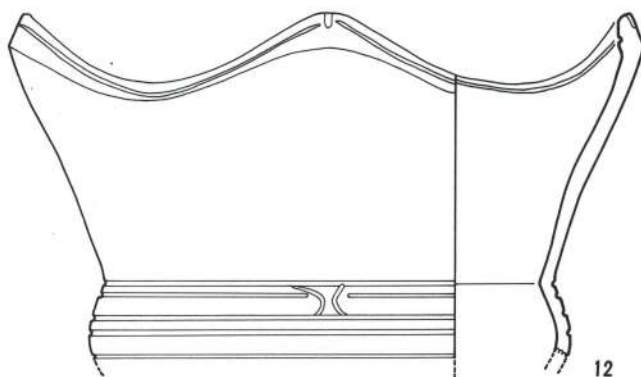
第44図 遺構内出土土器実測図 3 (1/3)



10



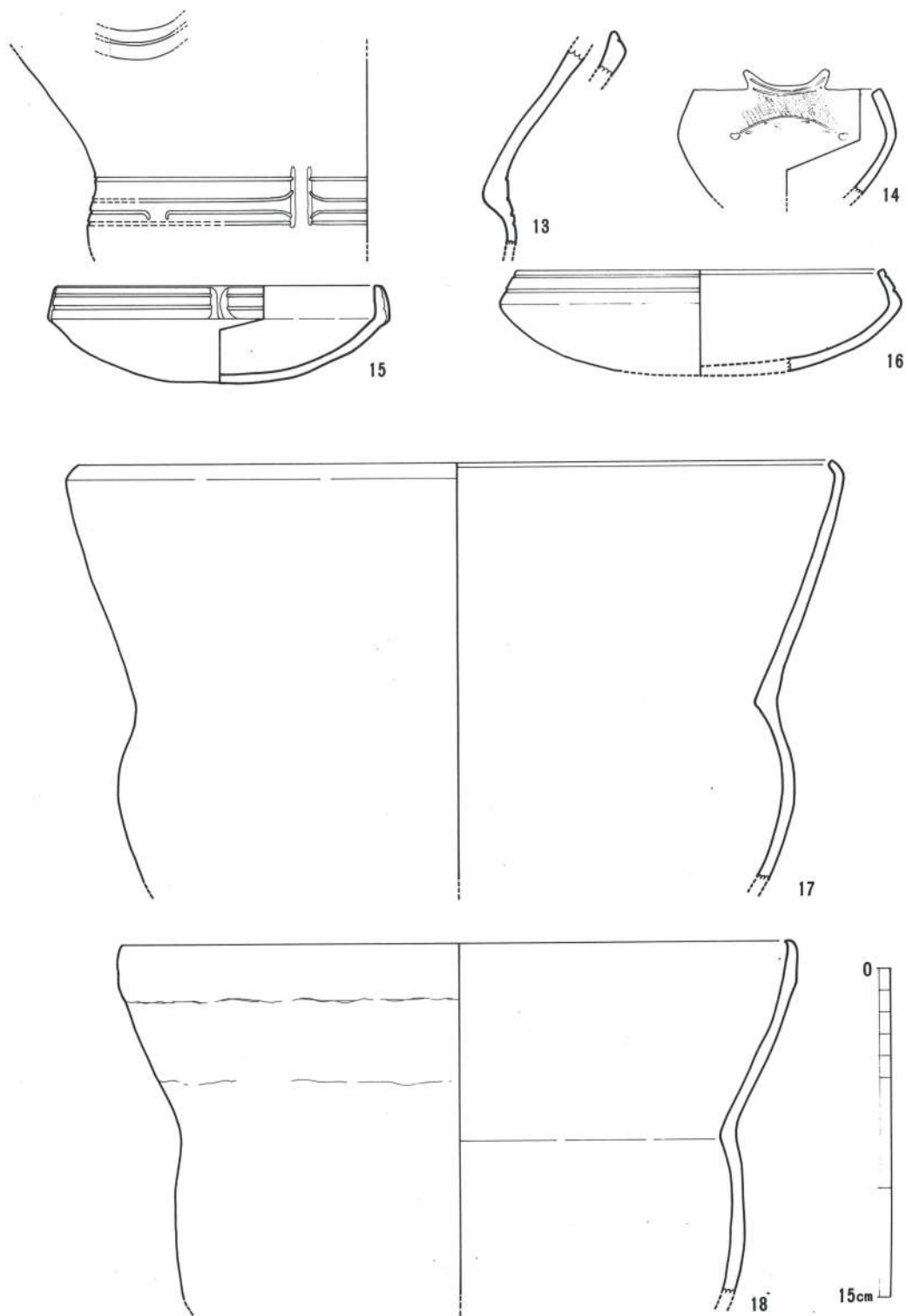
11



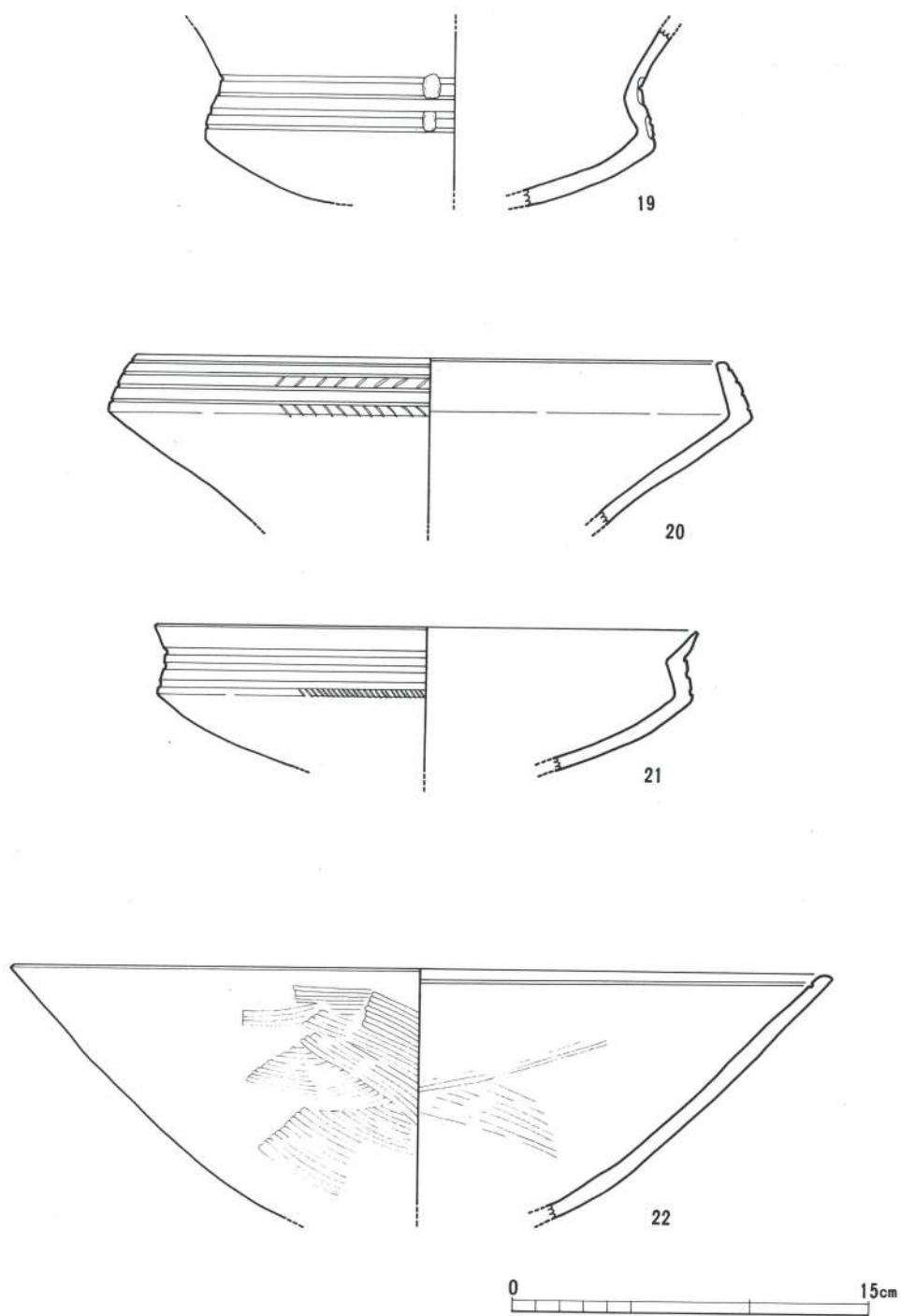
12



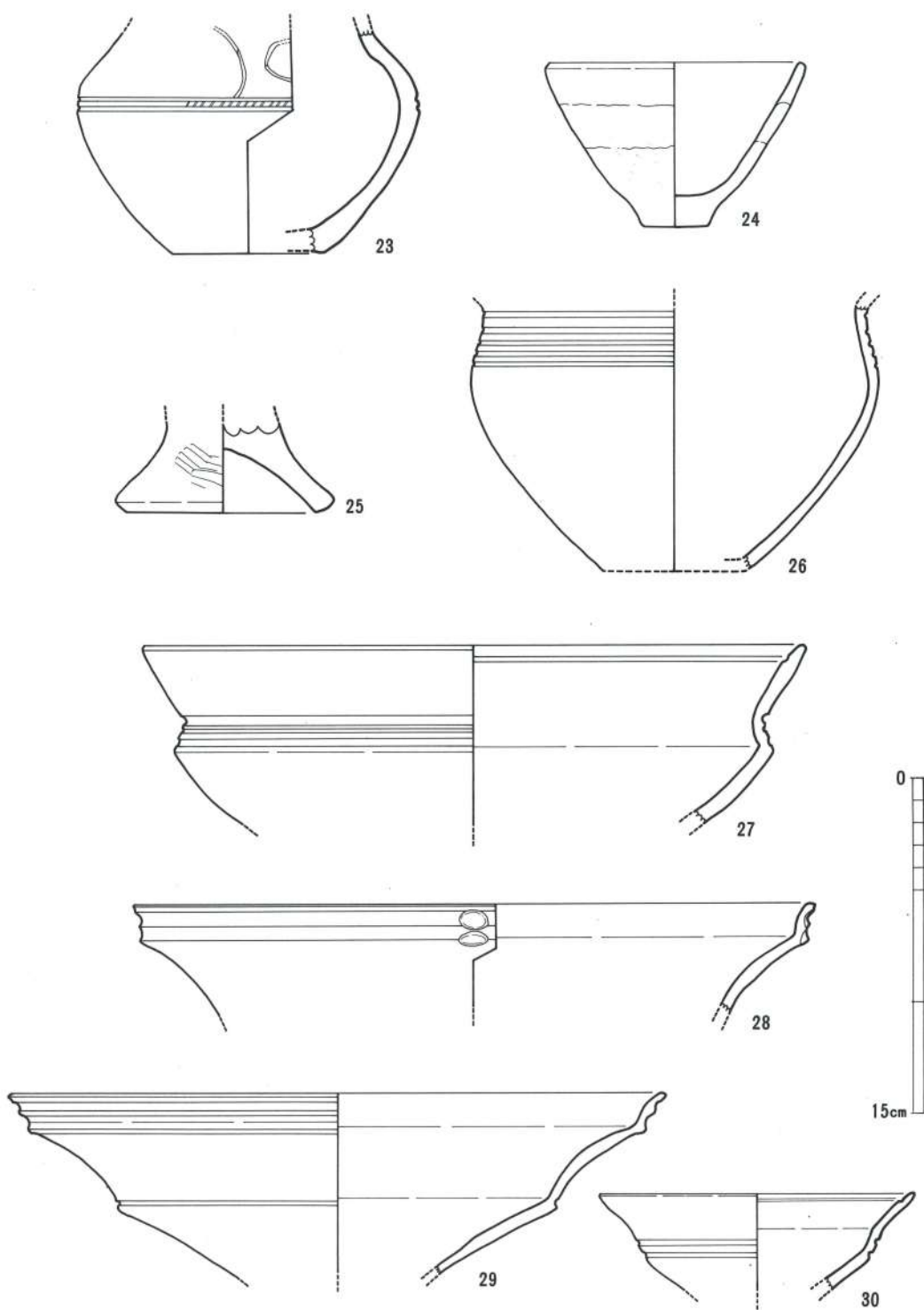
第45図 遺構内出土土器実測図 4 (1/3)



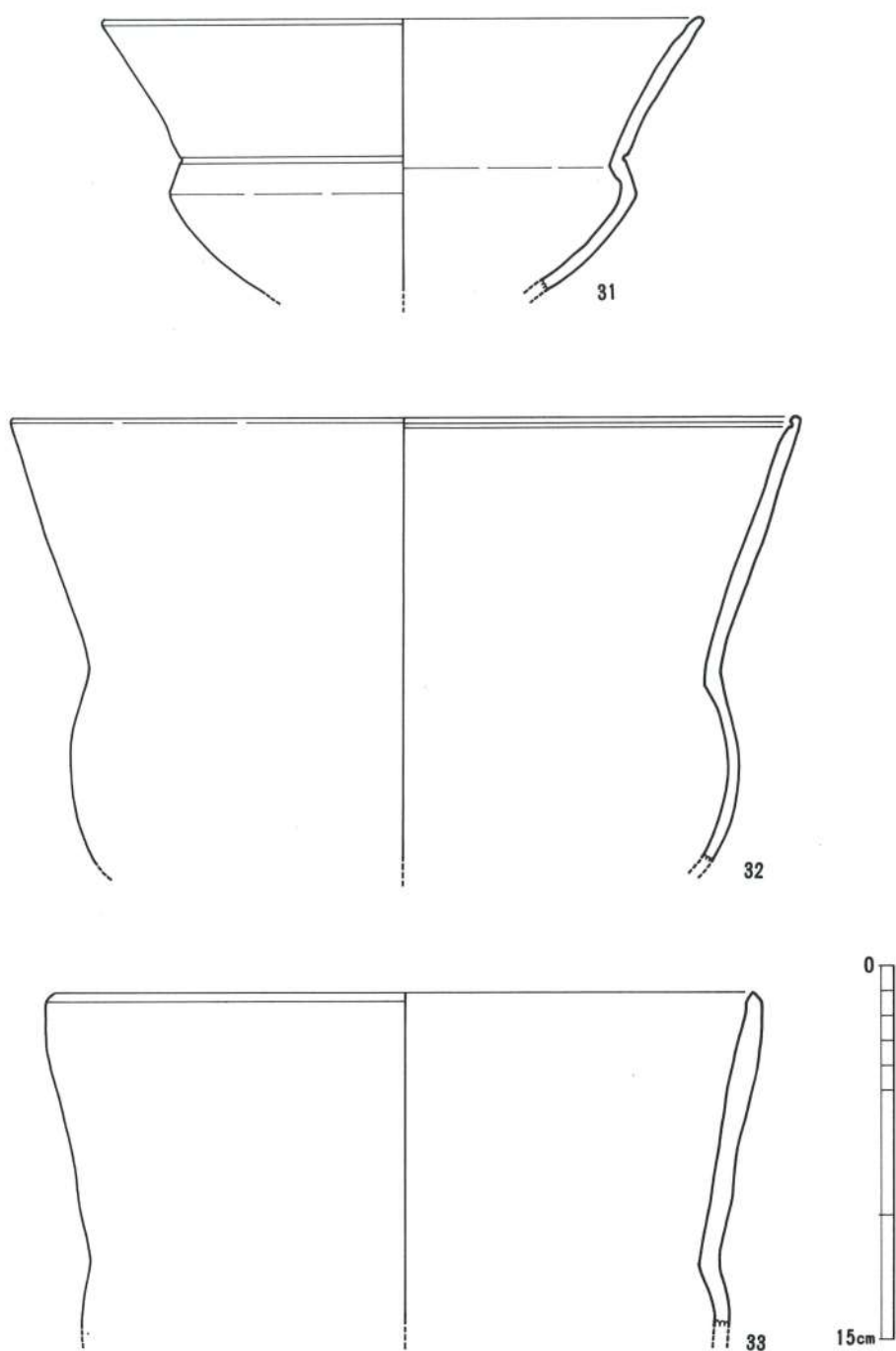
第46図 遺構内出土土器実測図 5 (1/3)



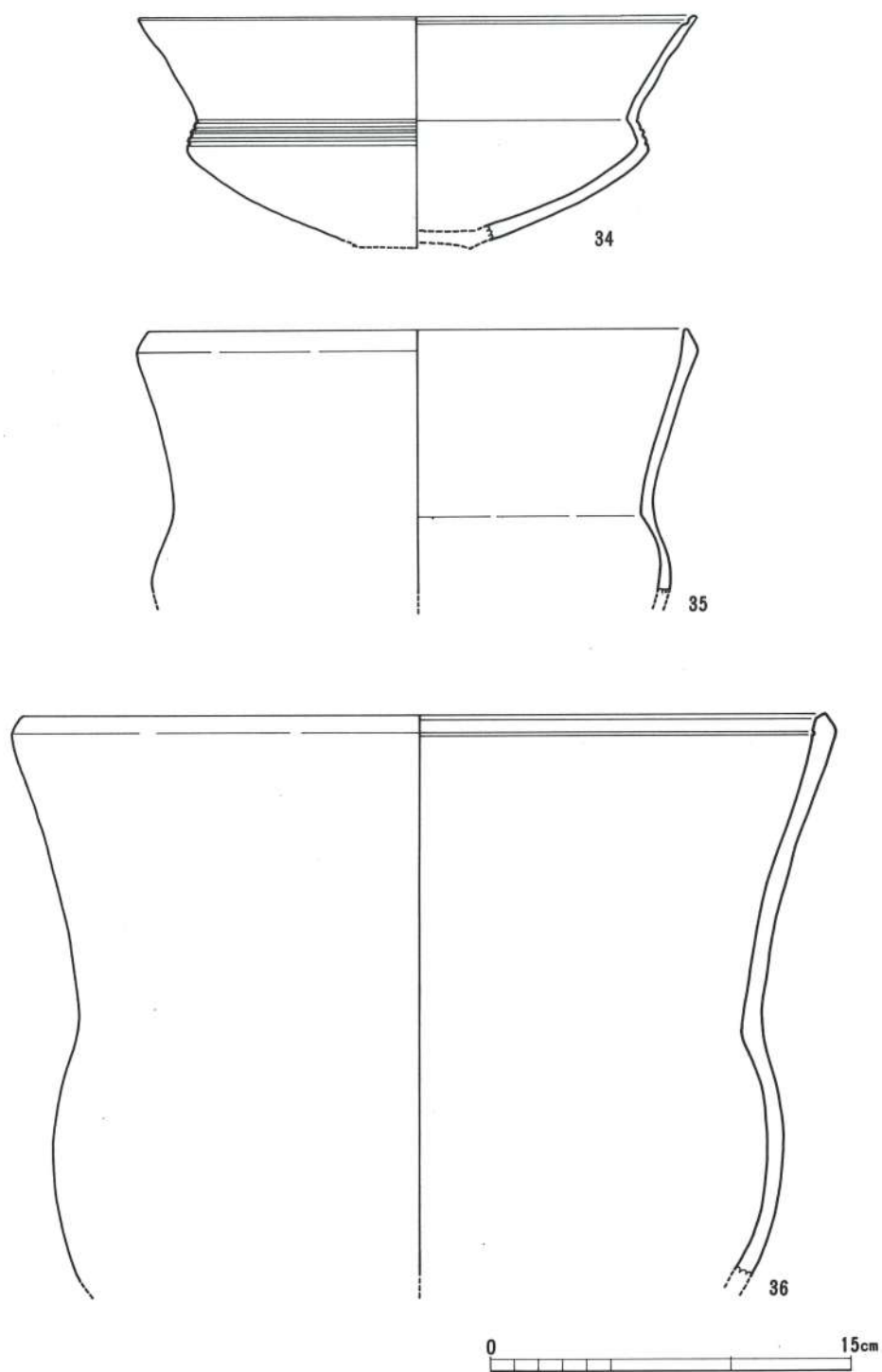
第47図 遺構内出土土器実測図 6 (1/3)



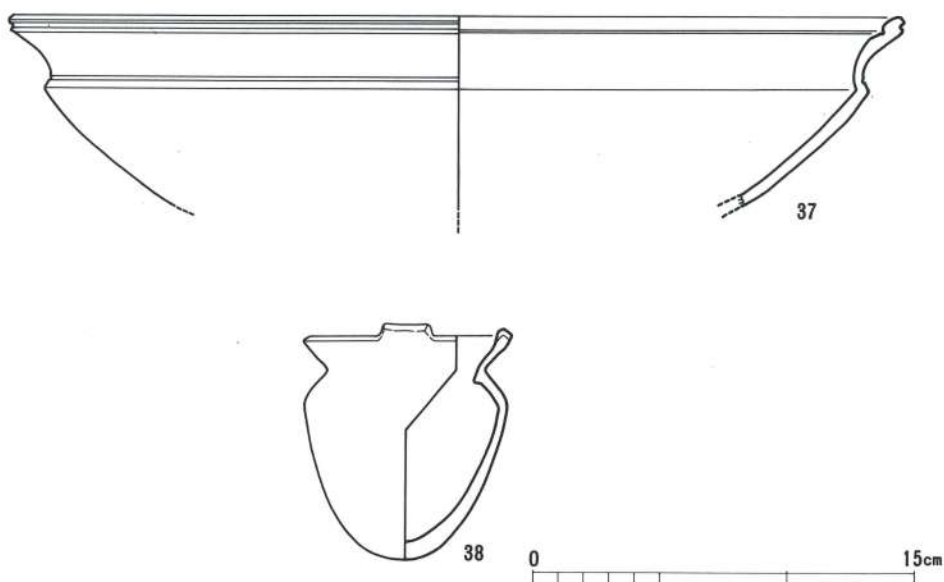
第48図 遺構内出土土器実測図 7 (1/3)



第49図 遺構内出土土器実測図 8 (1/3)



第50図 遺構内出土土器実測図 9 (1/3)



第51図 遺構内出土土器実測図 10 (1/3)

完形土器一覧表

法量の()推定高

遺物 番号	器 種	法 量(cm)			色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器 高				
1	精製深鉢			(15.5)	暗茶褐色	石英・カクセン石・荒い金雲母多し	やや良い	
2	"	23.2		(12.8)	薄灰褐色	石英・長石・金雲母・カクセン石	やや良い	
3	"	18.5		(8.2)	暗褐色	石英・金雲母	やや良い	
4	精製深鉢	14.6		(5.0)	黄灰褐色	石英・カクセン石・金雲母	やや良い	
5	精製深鉢	58	15.5	51	暗赤褐色	砂粒多い・石英・金雲母	やや良い	
6	"	43		(22.7)	暗褐色	石英・長石・金雲母	やや良い	
7	精製深鉢	32.6		(34.8)	黒褐色	石英・長石・金雲母・カクセン石	良 い	
8	"	23.2		(19)	黄褐色	石英・長石・金雲母	やや良い	
9	"	24.6		(12.4)	暗褐色	"	やや良い	
10	精製鉢	24.8		(12.0)	暗褐色	石英・金雲母	良い	
11	精製深鉢	36		(16.7)	暗灰褐色	金雲母・石英・長石	やや不良	
12	精製深鉢	25		(13.6)	暗茶褐色	細い金雲母が目立つ	良い	
13	"			(7.5)	"	石英・長石・金雲母	やや良い	
14	精製小形浅鉢	8.4		(4.9)	暗褐色	砂流を含む	良い	
15	精製浅鉢	14.8		4.4	暗黄褐色	細くて良好・金雲母	良い	
16	"	16.6		4.8	黄褐色	石英・長石・金雲母	良い	
17	半精製深鉢	35.2		(19)	暗褐色	カクセン石	やや良い	
18	精製深鉢	30.5		(15.8)	暗茶褐色	石英・金雲母	良い	
19	精製深鉢			(7.6)	暗褐色	石英・長石・金雲母	良い	

遺物 番号	器 種	法 量(cm)			色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器 高				
20	精製浅鉢	24.8		(7.0)	暗褐色	石英・金雲母	良い	
21	〃	22.8		(6.0)	黄褐色	石英・長石・金雲母	良い	
22	〃	34.4		(10.5)	暗黄褐色	石英・金雲母・カクセン石	やや良い	
23	精製小形鉢			(10.0)	灰褐色	石英・金雲母・長石	良い	
24	〃	11.4	2.8	(7.3)	黄褐色	石英・長石・金雲母	やや良い	
25	精製脚台付鉢		9.7	(4)	〃	石英・長石・金雲母	良い	
26	精製鉢			(11.7)	暗黄褐色	石英・金雲母	ややあまい	
27	精製浅鉢	29.4		(8)	黒褐色	石英・長石・カクセン石・雲母	良い	
28	〃	30.4		(5)	暗褐色	石英・金雲母	ややあまい	
29	〃	29.7		(8.1)	灰茶褐色	石英・長石・金雲母	良い	
30	精製小形浅鉢	14.0		(4.4)	茶褐色	石英・長石・金雲母	良い	
31	精製浅鉢	24		(11)	黄灰褐色	石英・金雲母	やや良い	
32	半精製深鉢	31.6		(17.9)	灰褐色	石英・カクセン石・茶色粒子	ややあまい	
33	精製深鉢	28.5		(13.3)	茶褐色	石英・金雲母	ややあまい	
34	精製浅鉢	23.2		(9.6)	暗茶褐色	砂粒を含む	良い	
35	精製深鉢	23.4		(11.0)	〃	石英・金雲母	ややあまい	
36	精製深鉢	33.8		23.5	茶褐色	石英・金雲母	悪い	
37	精製浅鉢	35.4		(7.5)	暗茶褐色	金雲母	良 い	
38	精製小形甕	8.2		9.3	暗褐色	金雲母	良い	

(2) 埋 甕

住居跡の内外より出土した埋甕は、多数であったが、削平によりその大半は欠損しているため、図化出来たのは9個体であった。

住居内出土の埋甕 (第52・53図、図版20)

A-6埋(A-3号住出土) 口縁部の3ヶ所に小さな突起を有する深鉢で、ラッパ状に開く口縁部と底部近くが外方に張り出すのが特徴である。内外面ともナデによる調整がされる。色調は薄茶褐色で、胎土に石英や金雲母の粗い砂粒を含む。口径51.5cm、器高48cm、底径10.7cmを測る。底部付近の内面にコゲ跡が見られる。

A-10埋(A-10号住出土) 精製深鉢の胴部資料で、胴部文様帯は、沈線と波状文の組み合わせが2段になって施される。器面は磨研によって仕上げられる。色調は暗褐色と黄赤褐色のツートンで、胎土に細い石英、金雲母の粒が見られ、焼成は良い。最大径28.4cm、現高20.5cm、底径8.2cmを測る。胴部下半の内面にコゲ跡が見られる。

B-3 埋 (B-6 号住出土) 口縁部は外反し、胴部が強く屈曲する粗製の深鉢である。胴部の屈曲部分に1条の沈線が巡っていて、口縁部の下方には、補修孔の未完成な穴が残る。調整は内外面ともナデであり、色調は暗赤褐色、胎土に石英、金雲母の粒を多く含む。底部近くの内面にコゲ跡が残る。口径33.6cm、器高37.9cm、底径7.6cmを測る。

住居外出土の埋甕 (第54~56図、図版20)

A-2 埋 粗製深鉢の胴部のみで底部を打ち欠いている。調整は内外面ともナデ、色調は暗褐色で胎土に石英、金雲母の粒を多く含む。胴部径36cm、現高18cmを測る。下部は内面にコゲ跡が残る。

A-3 埋 半精製の深鉢で、口縁部がやや外反し、胴部が屈曲する。色調は暗茶褐色で胎土に石英、金雲母を含む。口径29.5cm、器高34.9cm、底径7cmを測る。底部近くの内面にコゲ跡が残る。

A-4 埋 半精製の深鉢で、口縁部が強く外反し、胴部は屈曲する。色調は暗赤褐色で胎土に石英、金雲母の粒が多く含まれてる。口径16.6cm、現高35.7cmを測る。底部は打ち欠かれており、底部近くの内面にはコゲ跡が残る。

A-7 埋 半精製の深鉢で口縁部を欠損している。胴部は屈曲し、底部はしまっている。色調は赤黄褐色で、胎土にやや粗い石英、金雲母の粒を含む。最大径20cm、現高41.3cm、底径8.8cmを測る。底部近くの内面にコゲ跡が残る。

B-1 埋 粗製の深鉢で口縁部を欠損する。胴部は屈曲し、下方はしまっている。色調は暗褐色を呈し、胎土にやや粗い石英、金雲母の粒を含む。最大径27.2cm、現高28.7cmを測る。底部は打ち欠かれている。

B-2 埋 粗製深鉢で口縁部を欠損する。胴部は丸味をもって屈折し、下方も緩な張りをもつ。色調は灰褐色で、胎土にやや粗い石英、金雲母を含む。最大径40cm、現高32cmを測る。底部は打ち欠かれている。

(3) 石 器 (第57~65図 図版21・22)

剥片鏃 (1・3) 黒曜石の縦長剥片を利用し側縁部と挟入部分への加工が施される。

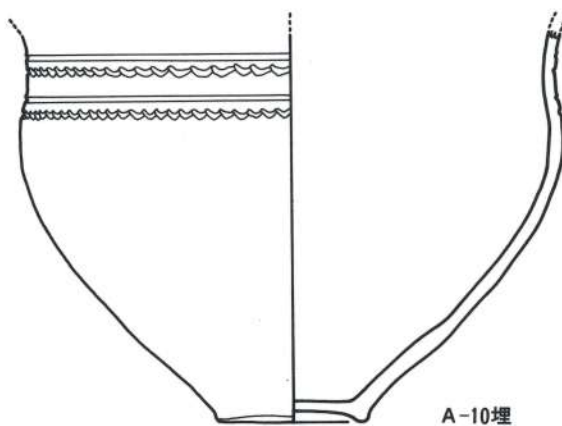
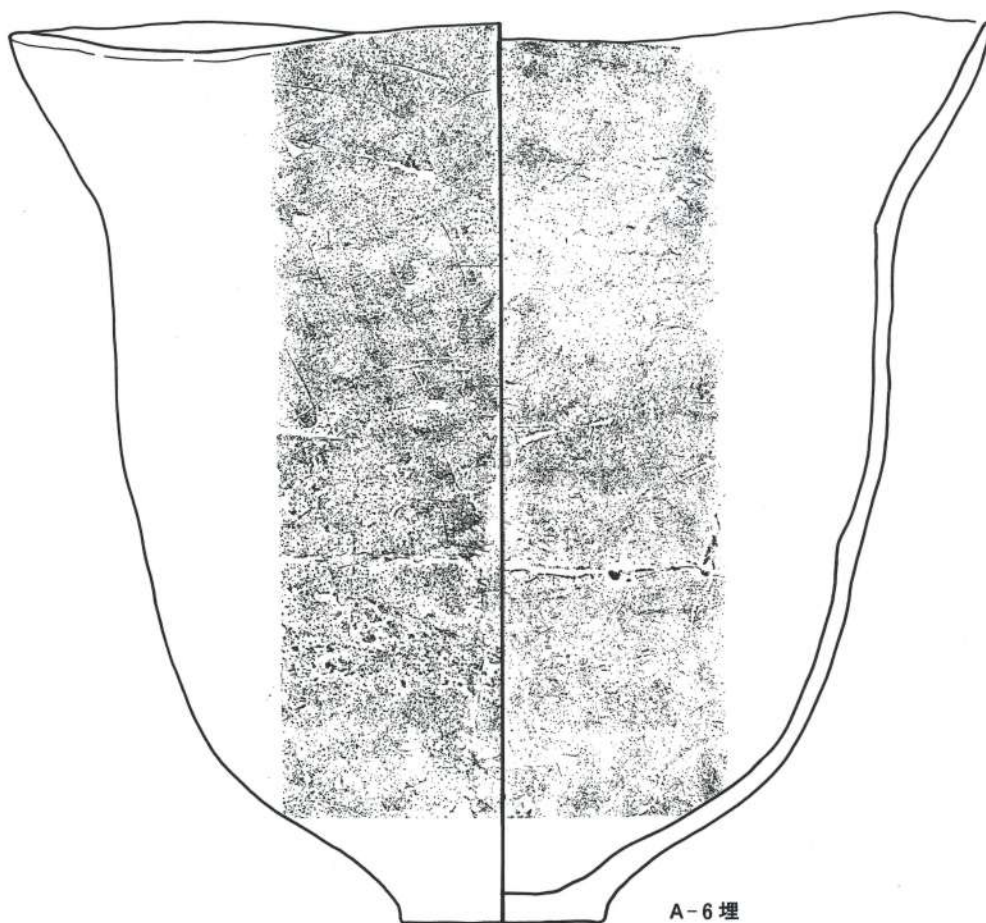
石鏃 (2・4・5) 黒曜石製で周囲より細い加工が施され、5は粗い加工のみである。

石匙 (6・7・8) 6は縦形で縦長の剥片を利用し、西側縁より挟り込みが施され、刃部はほとんど加工していない。7・8は横形で横長の剥片を利用し、両面加工によって製品化されている。

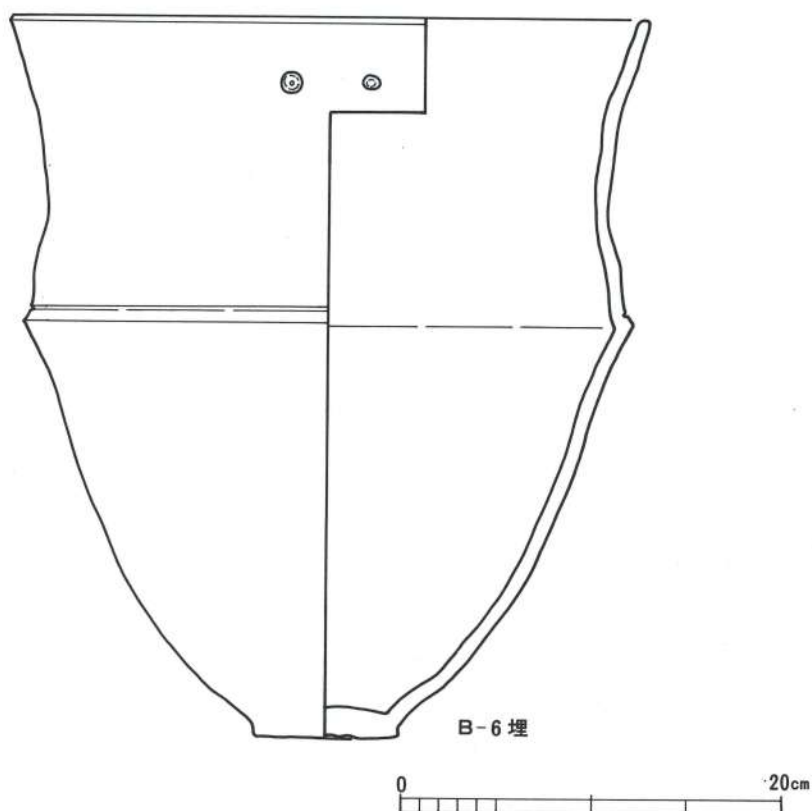
つまみ形石器 (9・10) 黒曜石製のやや厚手の剥片を利用している。

石錘 (11) サヌカイトのやや厚手の剥片を利用し、先端は断面三角形を呈する。

刃器 (12~17) 12~14はサヌカイトのブレードを使用する。15~17は黒曜石のブレードを使用する。



第52図 住居内埋壺 1 (1/4)



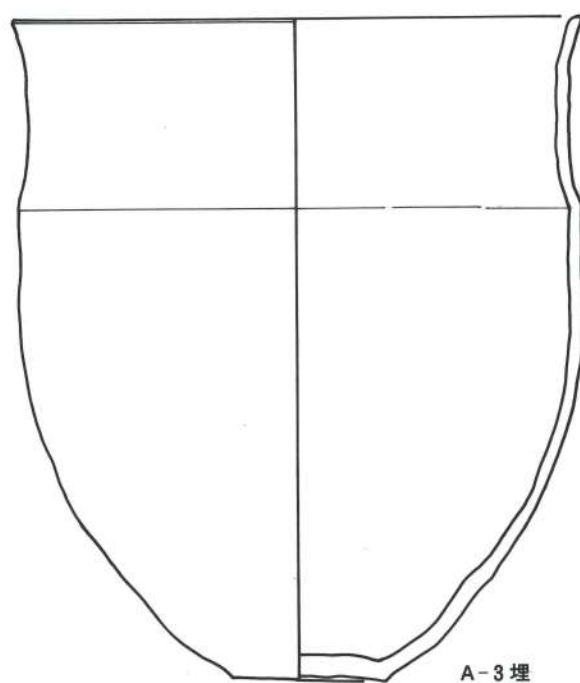
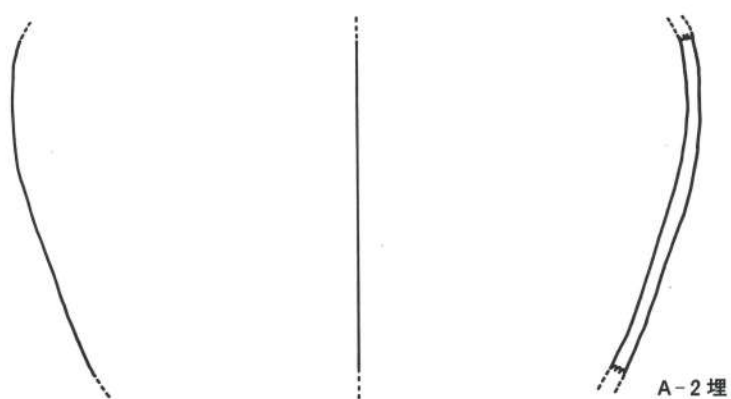
第53図 住居内埋壺 2 (1/4)

磨製石斧 (18～21) 18は分胴形で、胴部の両側縁にはタタキによる成形痕が残る。19は厚手の原材を使用し、20・21は薄手の原材を使用する。

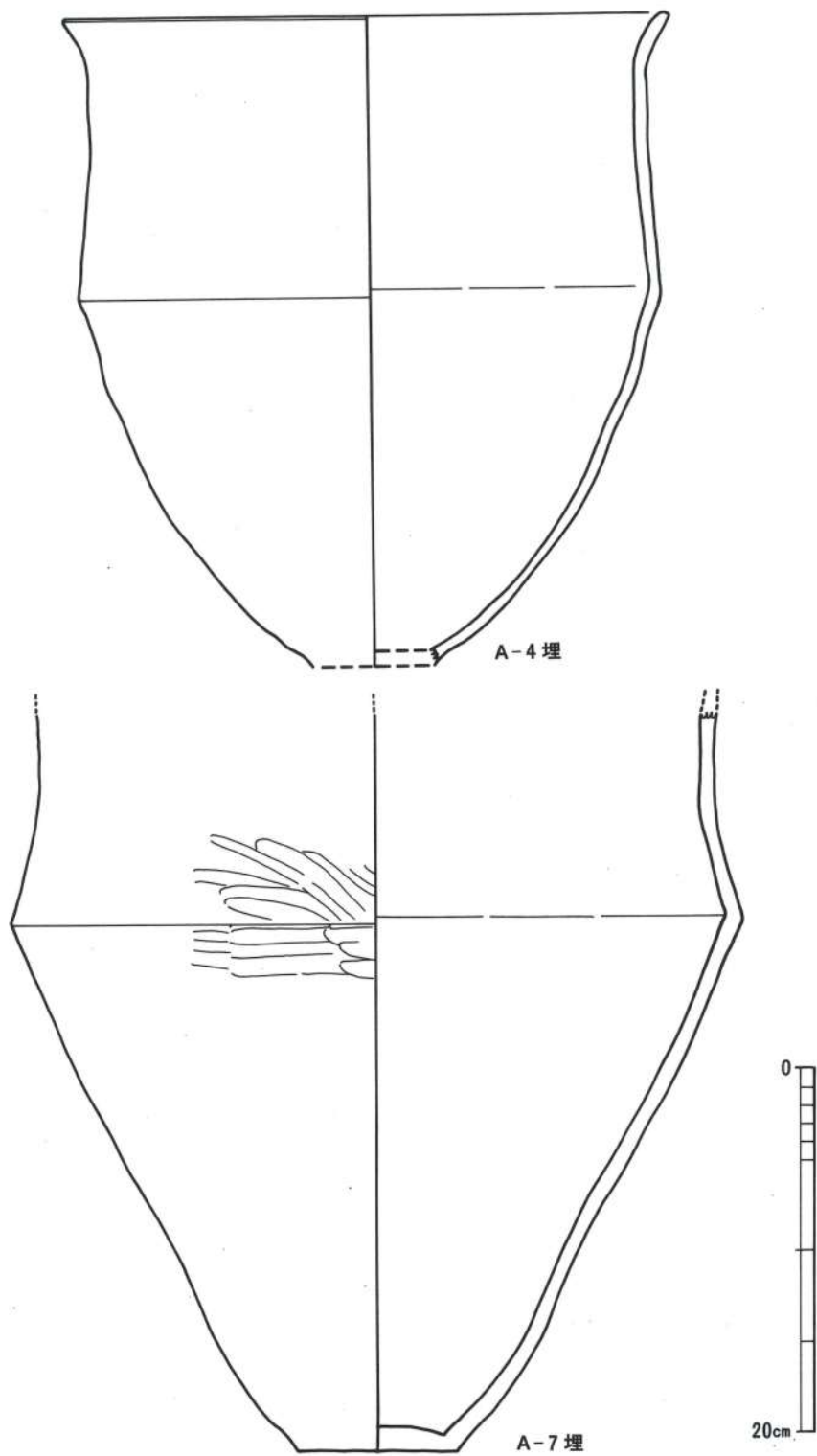
局部磨製石斧 (22～26) 22は幅広で薄手の原材を利用し、刃部を粗く磨く。23は短冊形で薄手の原材を利用し、刃部と頭部の両端を粗く磨く。24は細身の分胴形で、丸味のある刃部先端をやや丁寧に磨く。25・26は細長の丸味のある形で、断面も厚い。刃部先端をやや丁寧に磨く。

打製石斧 (27～45) 27～30は分胴形である。27・28は側面より挟り込みが加えられるが、平行ではなくややズレた位置にある。28～39は短冊形である。32～37は刃部片側が斜めになっており、使用部分の片寄りを示すようである。40・41は厚手の断面で重量のあるタイプである。42は棒状のもので、刃部先端を急角度に粗く磨いている。43は薄手の短冊形である。44・45はトランシェ形を呈しており、44は局部的に磨いて仕上げています。

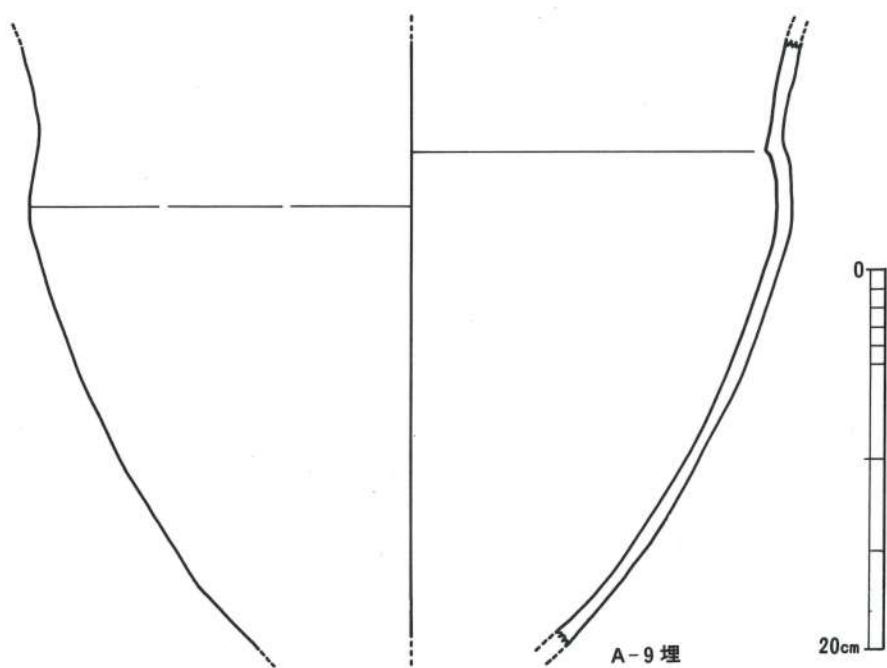
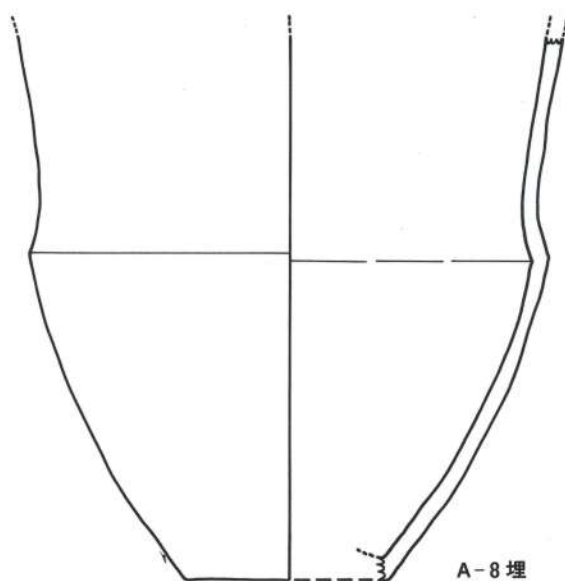
円盤状石器 (46・47) 46は大形の円礫から打ち剥いだ剥片を使用し、周辺より加工を加えている。47は偏平な円礫の周辺を加工する。



第54図 住居外埋壙 1 (1/4)



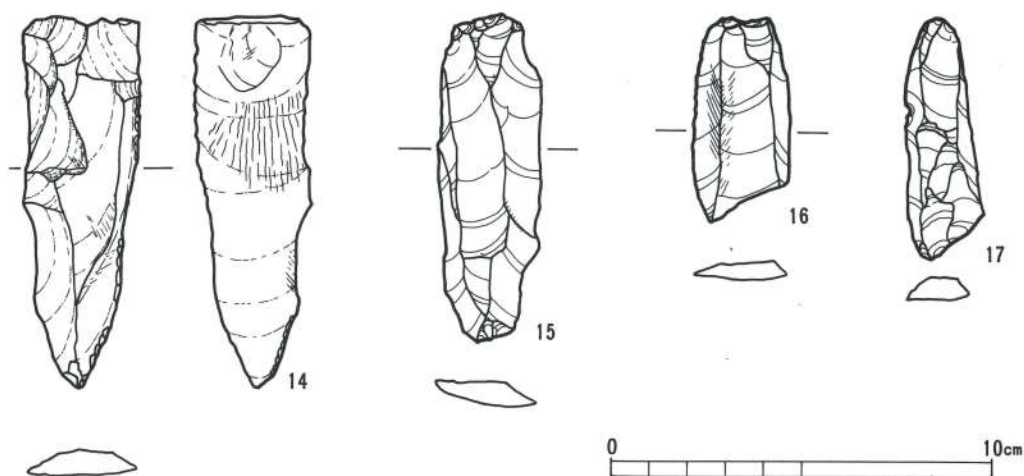
第55圖 住居外埋甕 2 (1/4)



第56圖 住居外埋甕 3 (1/4)



第57図 遺構内出土石器 1. (1/2)



第58図 遺構内出土石器 2 (1/2)

石錘 (48~50) 偏平な円礫の長辺を外側より加工し、抉り込みを入れる。

礫器 (51) 円礫の剥片に片側より刃部を施す片刃礫器で、加工は粗い。

磨石 (52) 円礫の両面を平面になるまで使い込んでおり、一部にタタキ痕を残す。

タタキ石 (53) 円礫を利用しており、周辺の1/2を使用している。礫の表面は使用のため、剝離している。

石皿 (54・55) 54は小片であるが、両面を使用しているようである。片面の使用が著しい。55は使用面の中央付近より割れており、両面を使用していて、片面の使用が著しい。

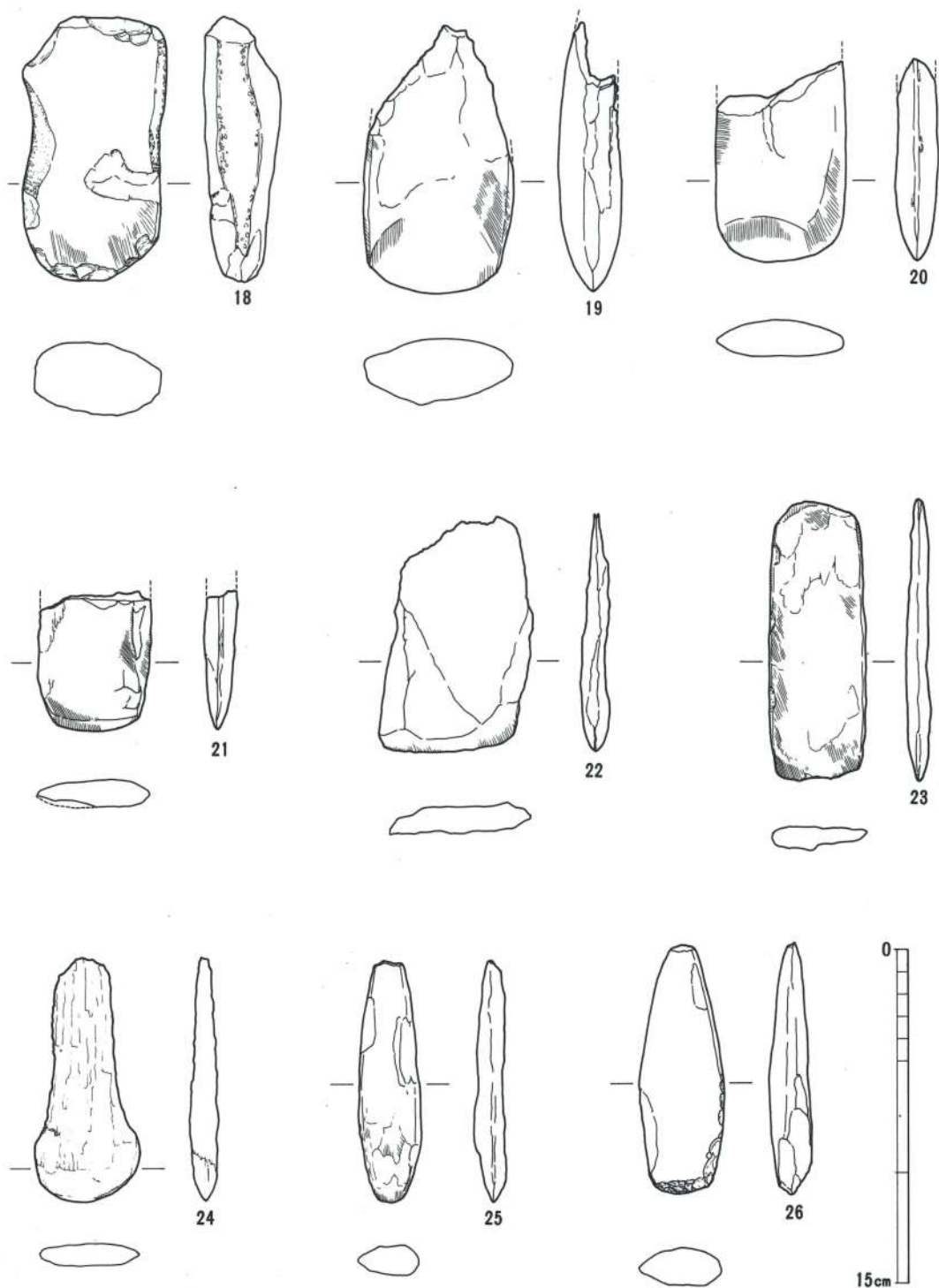
十字形石器 (56) 全面を磨製によって仕上げたもので、四方からの抉り込みは深く、察過痕が著しく見受けられる。また突起の先端にはタタキ痕と察過痕が残っており、使用痕として把握出来よう。

三稜尖頭器 (64) サヌカイトの厚手の剥片を原材とし、一側縁部より両面に粗い剝離加工を加え、断面を三角形に仕上げている。従って一面は全く加工が及んでおらず、この種の特徴をよく示している。

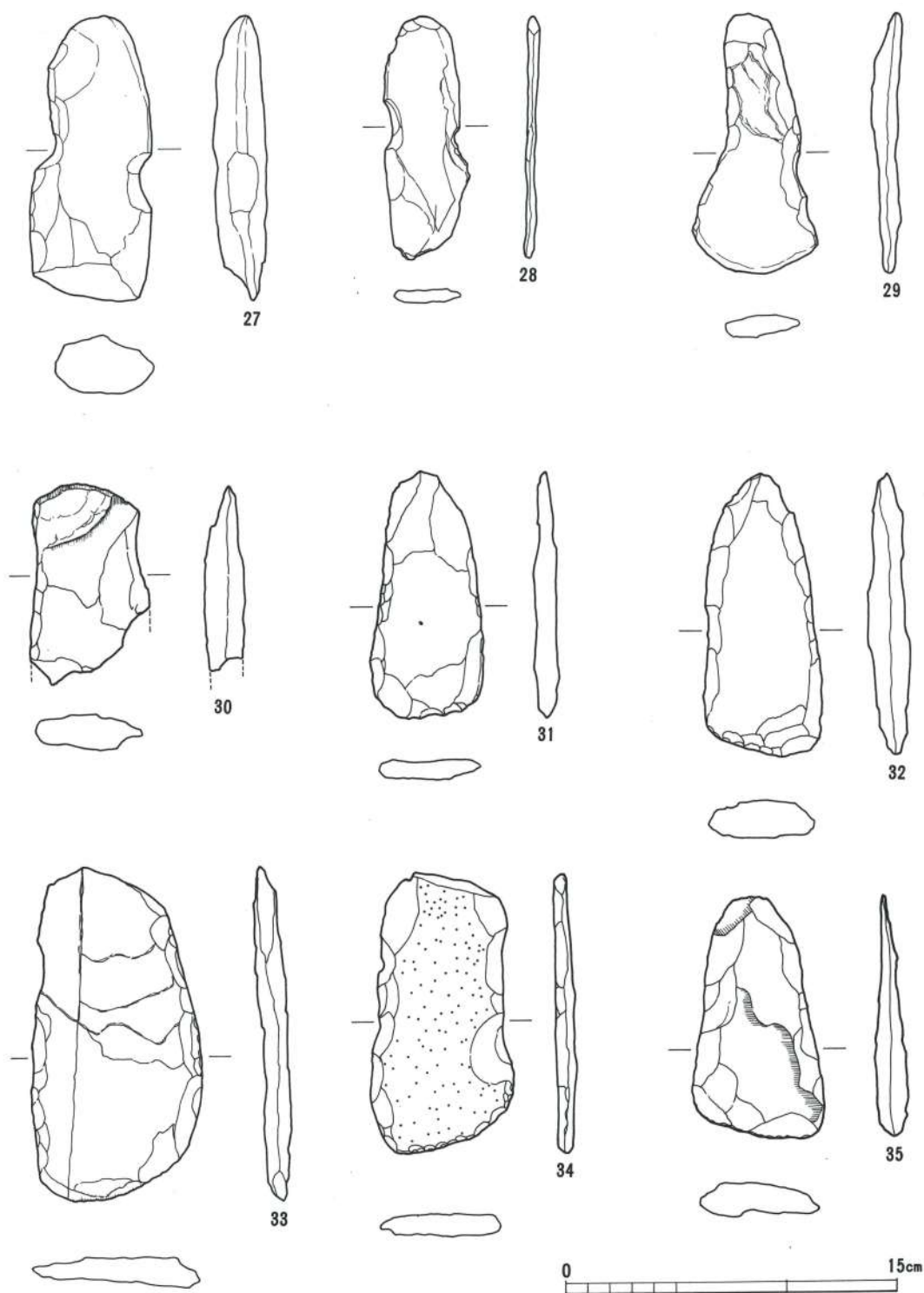
(4) 土製品 (第64・65図 図版22)

土偶 (57) 土偶の右脚部で、胴部より打ち欠かれた部分である。全体に円筒状で、右腰部に相当する部分は張り出しており、腰の部分をややリアルに表現している。

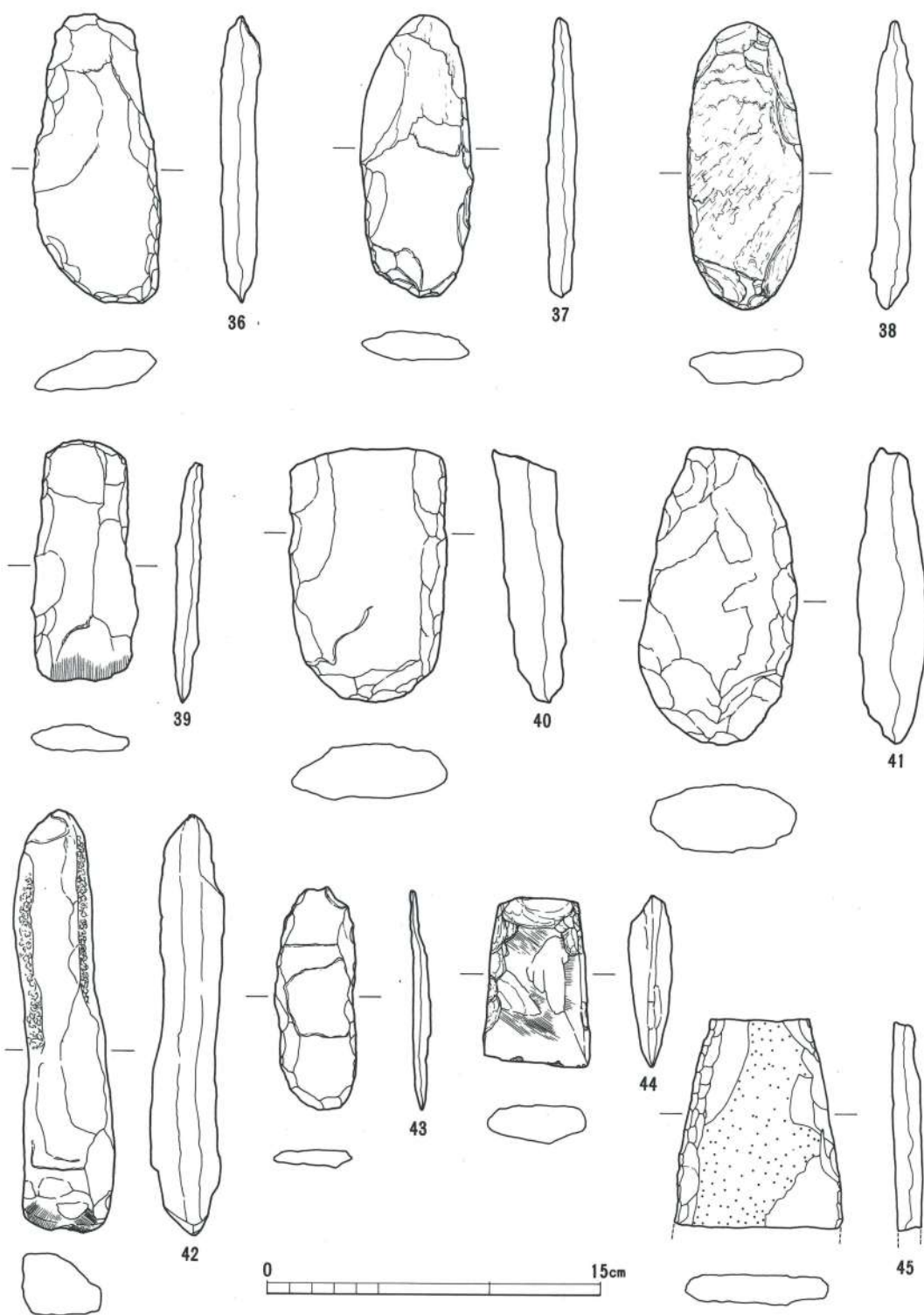
円盤状土製品 (58・69) 土器片の再利用であり、周辺から全面にわたって加工が施してある。



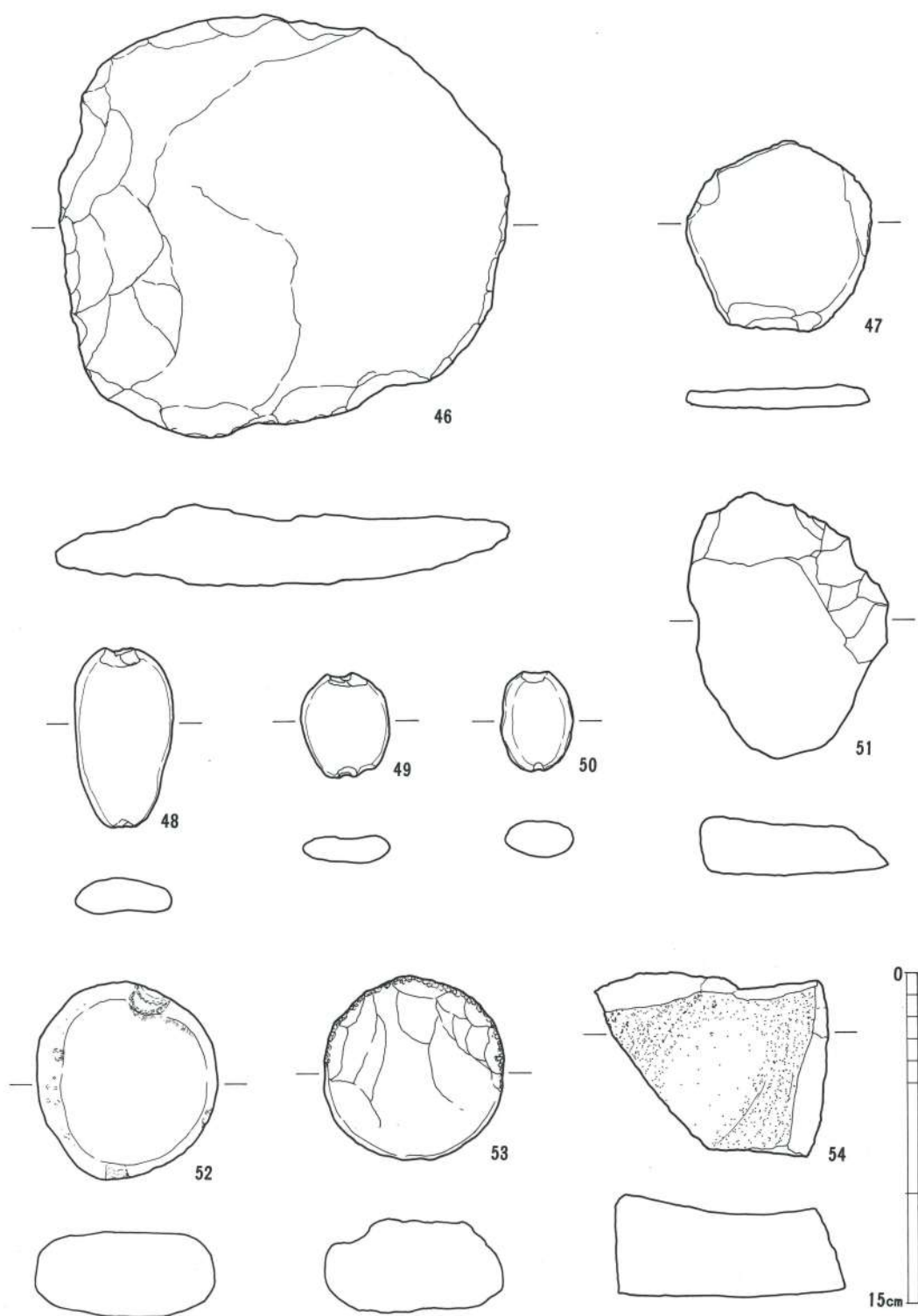
第59図 遺構内出土石器 3 (1/3)



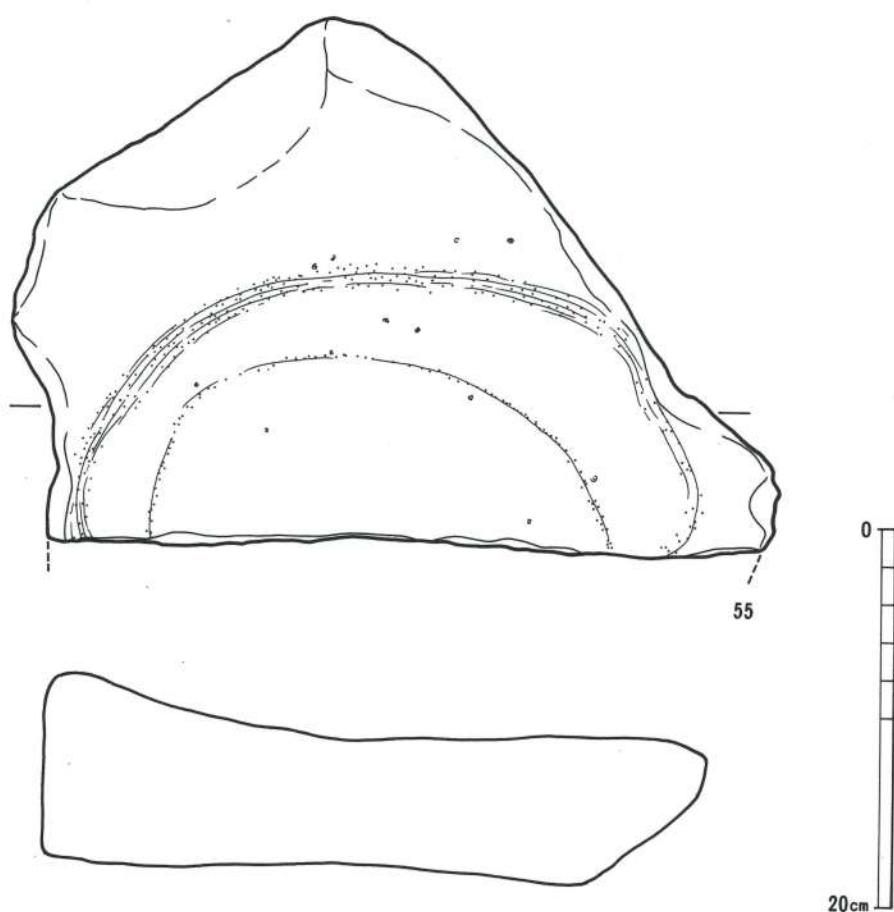
第60図 遺構内出土石器 4 (1/3)



第61図 遺構内出土石器 5 (1/3)



第62図 遺構内出土石器 6 (1/3)



第63図 遺構内出土石器 7 (1/4)

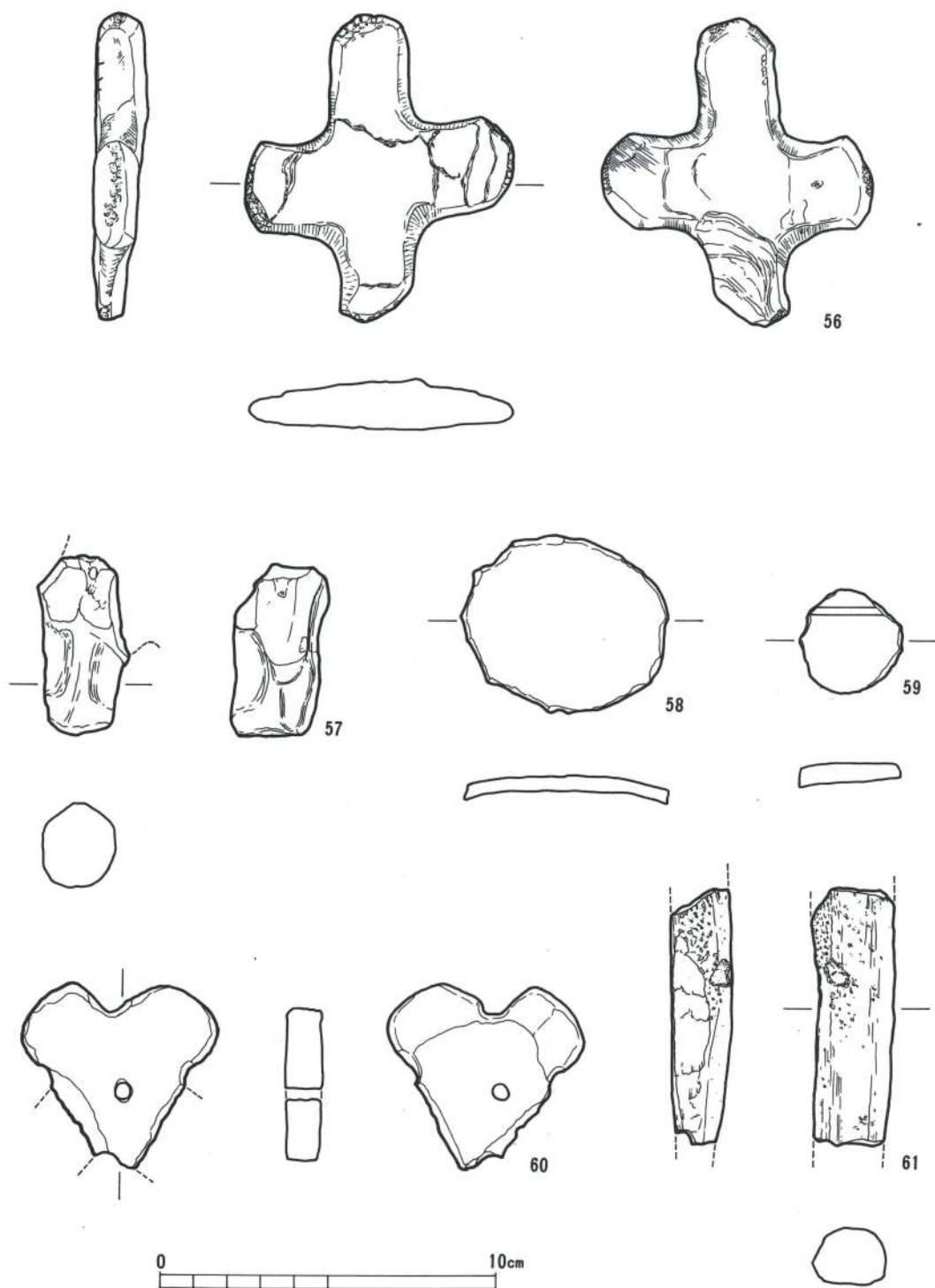
十字形土製品 (60) 土器片の再利用であり、中央に孔がある。加工は、土器片の表から裏に向ってのものが強いようである。

土製紡錘車 (62) 大形で厚手の製品である。器面は丁寧にナデられ、一方は凸レンズ状であり、もう一方は平面である。

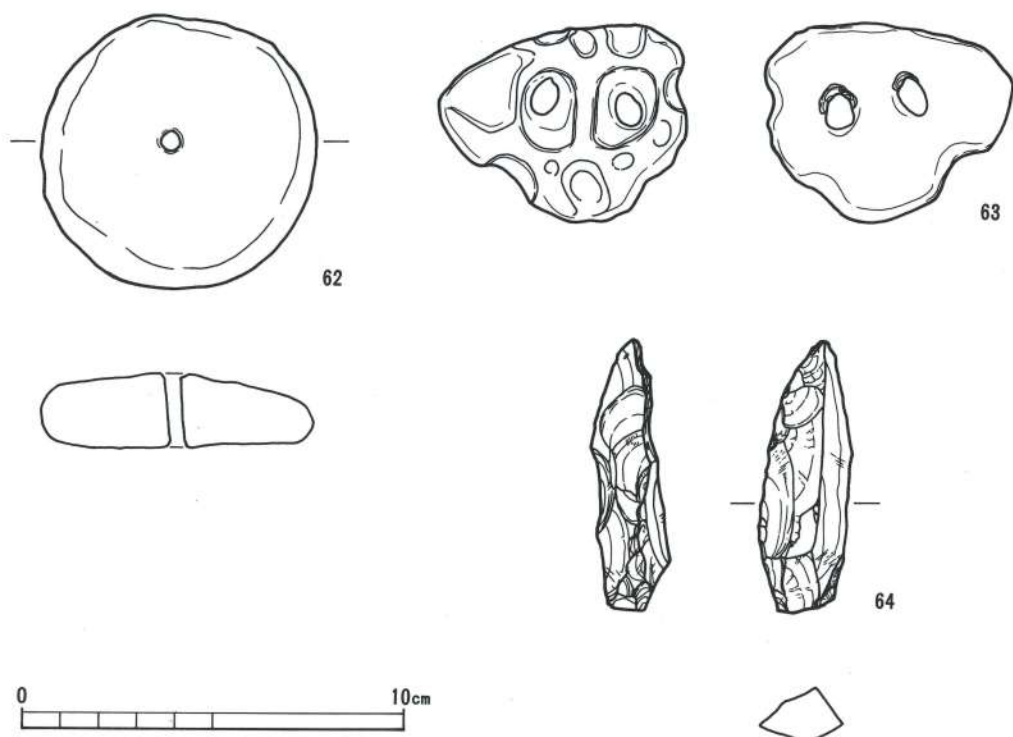
(5) 石製品 (第64～66図 図版22)

石棒 (61) 上下両端部が欠損しているが、断面がカマボコ形を呈し、稜線上に磨製の察痕が残る。また、一部に赤色顔料と思われるものが塗彩されている。

不明石製品 (63) 表面に窪みが多く、中央の2ヶ所は穴になっていて、顔のように見える。さらに裏面から観察すると、穴の上部に打点と剝離があり、紐でつり下げられていたようで、護符的な使用を考えさせる。また、この石は自然礫であるが、表面の窪みは海生動物による可能性が高く、海岸部より搬入されたようである。



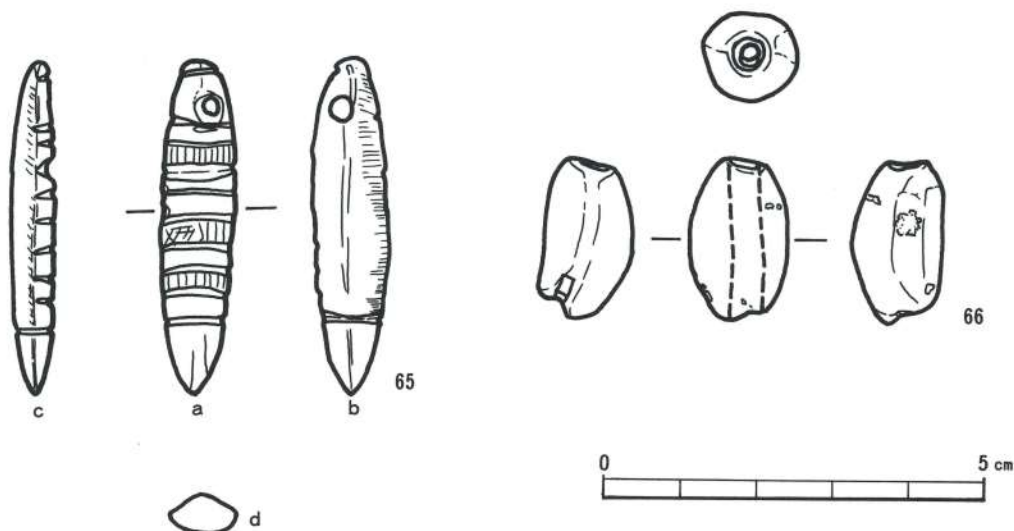
第64圖 遺構內出土石器、石製品 8 (1/2)



第65図 遺構内出土石器、土製品 9 (1/2)

石製垂飾品 (65・66) 65は魚形で、a面は横位方向に深い線刻が10本あって、尾鰭に相当する部分の線刻はb面にまで通っている。線刻の施された間には、縦方向に浅い線刻が見られる。b面は、横位の線刻はa面から続いた1本のみで、尾鰭を表現し、頭部の先端から口に相当すると思われる縦方向の線が見受けられる。a・b両面に見られる表現は尾鰭以外に、頭部に存在する1孔が目として考えられ、前者同様に縄文人の考える魚の表現として重要な部分を示すと思われる。全長4.4m、幅1m、厚さ0.5cmを測り、色調は翠緑色で深い光沢を有し、材質は長崎翡翠と称されるものと思われる。

66は幅広で丸味をもった棗玉状の管玉で、真横から見ると肉厚な三日月形をしている。上端より貫通する孔は両端の幅が広く中央が狭くなっており、両側からの穿孔が行われたようである。全長2.1cm、幅0.8cm、孔の直径4mmを測る。色調はオリーブ・グリーン色で、65よりも若干黄色にくすむが、材質は同じ長崎翡翠と称されるものと思われる。



第66図 石製錘飾品 10 (1/1)

石器計測表

() は現在地

遺物 番号	器 形	長さ	幅	厚さ	備 考	遺 構 番 号
1	剥片鉄	2.7	2.0	0.4	黒曜石	A-3号住
2	石鏃	3.3	1.8	0.4	黒曜石	B-3号住
3	剥片鉄	1.4	1.6	0.3	"	Pit 33
4	石鏃	2.3	1.8	0.4	"	B-4号住
5	"	3.9	2.6	1.3	黒曜石(姫島産)	A-8号住
6	石匙	7.4	3.6	0.9	サヌカイト	A-10号住
7	"	3.6	6.2	0.7	"	A-8号住
8	"	3.8	6.5	0.6	"	A-12号住
9	つまみ形石器	3.0	1.8	0.7	黒曜石	B-4号住
10	"	2.3	2.2	0.8	"	A-3号住
11	石鏃	5.0			サヌカイト	A-5号土壙
12	剥片石器	8.4	2.0	0.8	サヌカイト	A-3号住
13	"	7.5	2.6	0.6	サネカイト	B-12号土壙
14	"	9.8	3.0	0.7	サヌカイト	A-6号土壙
15	刃器	8.6	2.7	0.7	黒曜石	B-2号住
16	"	5.4	2.5	0.5	"	B-16号土壙
17	"	6.3	1.7	0.6	"	B-4号住
18	磨製石斧	11.8	6.5	3.2	蛇紋岩系	A-3号住
19	"	12.0	6.0	2.9	緑泥片岩系	"
20	"	8.9	5.8	1.7	蛇紋岩系	A-8号住
21	"	6.2	5.0	1.4	緑泥片系	B-6号土壙
22	局部磨製石斧	10.6	6.9	1.0	"	B-12号土壙
23	"	12.4	4.2	1.0	蛇紋岩系	A-11号住
24	"	11.9	4.7	1.0	"	A-45号土壙
25	"	10.8	2.7	1.3	"	A-4号住
26	"	11.1	3.8	1.8	"	B-10号土壙
27	打製石斧	13.0	5.5	2.6	絹雲母片岩	A-11号住
28	"	11.0	3.7	6.0	"	B-2号住
29	"	11.9	5.6	1.0	緑泥片岩	B-3号住
30	"	9.5	5.5	1.7	"	A-10号住
31	"	11.3	5.2	1.0	緑泥片岩系	B-5号住
32	"	12.9	5.3	1.7	蛇紋岩系	B-3号住
33	"	15.1	7.6	1.5	緑泥片岩系	溝状遺構
34	"	12.8	6.5	1.0	"	A-20号土壙
35	"	11.0	6.0	1.5	蛇紋岩系	A-11号住

遺物 番号	器 形	長さ	幅	厚さ	備 考	遺 構 番 号
36	打製石斧	13.0	5.7	1.7	蛇紋岩系	溝状遺構
37	"	13.0	5.2	1.5	蛇紋岩系	A-3号住
38	"	13.0	5.2	1.5	緑泥片岩系	A-6号住
39	"	10.8	4.8	1.5	玄武岩	A-3号住
40	"	11.4	7.0	2.5	緑泥片岩	B-6号土壌
41	"	13.5	6.9	3.0	滑石片岩	B-1号埋藏付近
42	"	19.1	4.0	2.7	蛇紋岩系	B-3号住
43	"	10.0	3.5	8.0	緑泥片岩	B-6号土壌
44	磨製石斧	7.6	4.8	1.7	玄武岩系	B-4号住
45	打製石斧	9.5	7.5	1.3	玄武岩系	B-13号土壌
46	円盤状石器	19.1	20.3	3.6	緑泥片石系	B-5号住
47	"	8.6	8.3	1.0	緑泥片岩系	B-4号住
48	石鏃	8.1	4.4	1.5		A-3号住
49	"	4.8	4.0	1.2	緑泥片岩	A-3号住
50	"	4.5	3.2	1.6	安山岩	A-3号住
51	礫器(片刃)	12.1	10.0	2.6		B-4号住
52	磨石	8.4	8.1	3.8	安山岩	A-9号住
53	タタキ石	8.4	8.1	4.1	緑泥片岩	A-3号住
54	石皿	10.7		4.7	花崗岩系	B-12号土壌
55	"	40.0	27.5	10.0	花崗閃緑岩系	2号屋外炉内
56	磨製十字形石器	9.1	8.0	1.5	蛇紋岩	包含層
64	三稜ポイント	7.0	2.2	1.4	サヌカイト	"
土 製 品						
57	土偶の右脚部	(4.4)	2.2	2.5 ×2.2	石英・長石 ・金雲母を含む	A-20号土壌
58	円盤状土製品	6.2	5.3	0.5	"	A-8号住
59	"	3.0	3.2	0.6	"	"
60	十字形土製品	5.5	5.8	1.1		A-1号住
62	土製紡錘車	7.2	7.2	2.0		B-4号住
石 製 品						
61	石棒	(7.6)	2.4	1.7		A-集石内
63	不明石製品	6.4	5.2	3.0		A-1号住

V 結 語

1 縄文時代後期後半から晩期前半にかけての土器群の整理

(1) はじめに

アマダ遺跡から出土した土器群は、本文中第Ⅱ章の2節で遺構内土の破片資料と完形資料に分け、その分類を試みている。従って、ここでは、型式論的な追求によって土器群を整理し、試行的な土器分類の再検証を行うとともに、北部九州の内陸部における土器編年の地域的な確立に向けての基礎資料としたい。

(2) 器形について

完形土器群を見ると、波状口縁部に球形の胴部を呈した深鉢を特徴とするA、B群、平縁で胴部の張りが強く屈曲部有する鉢を特徴とするC群、平縁で口縁部や胴部の屈曲が逆くの字状に強くなる浅鉢を代表とするD、E群がある。それは、深鉢から鉢、そして浅鉢と器形の主流が移り、しかも、全体に丸く仕上げられるものが、口縁部、頸部、胴部といった各部ごとに、直線的に、しかも、各部の屈曲をもって表現されるようになる。また、それは各部を文様をもって、明確に区分していたものが、各部を屈曲させアクセントを持たせることに移行するものであり、無文化の変遷過程と軌を一にする。

(3) 文様帯と文様について

文様帯は大きく口縁部と胴部に分かれ、さらに頸部にも存在するものがある。また、口縁部及び胴部文様帯は、各種の文様と磨消縄文、巻貝回転圧痕文、細線羽状文の組み合わせによって構成されている。時おり見受けられる縄文や偽似縄文、あるいは文様帯自身の省略化は、同一型式内でも起り得る現象であり、必ずしも型式区分の決め手とはなり得ない。従って、磨消縄文の有無のみをもって型式差は論じられない。

土器片資料分類第1群及び完形土器資料分類A群は、口縁部及び胴部文様帯は直線的な磨消縄文帯で、頸部刺突文が加わる。

土器片資料分類第2群及び完形土器資料分類B群は、口縁部及び胴部文様帯があり、特に胴部は、 χ 字状文によって文様の集約化が行われる。磨消縄文の省略化と巻貝による偽似縄文の充填が見受けられる。

土器片資料分類第3群及び完形土器資料分類C群は、口縁部及び胴部文様帯があり、直線化した沈線文に細線羽状文を充填する。また、口縁部の文様帯は退化し、沈線化あるいは省略が行われる。土器の黒色磨研化が進向する。

土器片資料分類第4群及び完形土器資料分類D群は、口縁部及び胴部文様帯があり、凹線や沈線のみによる文様となる。口縁部や胴部文様帯は退化し直線による表現のみとなる。黒色磨研の精製土器は増加し、以後の主流となる。

土器片資料分類第5群は、口縁部及び胴部に退化した沈線文の文様帯を有するが、胴部の退化は著しく、1条沈線のための側が見受けられ、口縁部の方が後に続くようである。

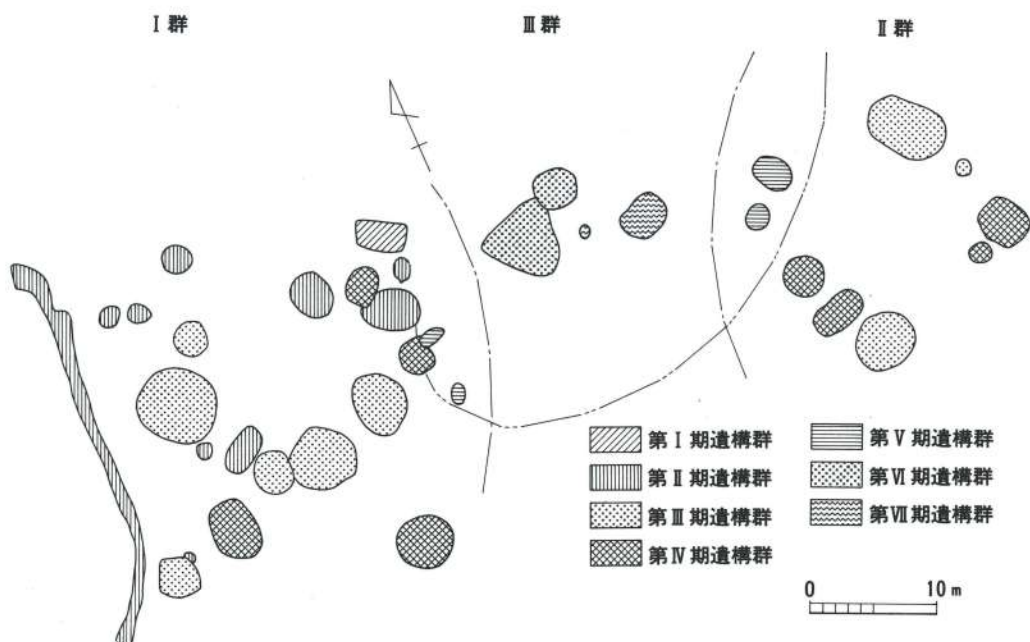
土器片資料分類第6群及び完形土器資料分類E群は、胴部文様帯の終焉であり、口縁部文様帯(2条沈線文)が強調される。

土器片資料分類第7群及び完形土器資料分類F群は、口縁部文様帯のまさに終焉であり、無文化を器形の粗略化が目立つようになる。

文様帯の変化は、磨消縄文帯が χ 字状文によって集約化されるとともに直線化した沈線文となる。次に、沈線文と細線羽状文の組み合わせとなり、数条の凹線や沈線文のみへ移行する。やがて、文様帯は、1～2条の沈線となり消滅へと向かう。この1連の動きをもって、各群の土器を、さらに各型式にあてはめることが可能と思われる。その際には、 χ 字状文(集約化する文様)や細線羽状文をメルク・マールとして考える必要があろう。両者は、西日本のという広域に分布する同時期頃の土器の文様とし見受けられる点で、縄文後期中葉頃に北部九州に伝わる磨消縄文技法と同様で、後期後半に外方より伝わるものと考えられる。従って、両文様は、一系統的な発展でなく、ある時点から共伴し、やがて文様の主流となる傾向を示すものであろう。その点が、後期後半の型式設定を混乱させる要因となっている。

(4) 土器群の型式比定

第0群土器は北久根山式



第67図 縄文集落構造図 (1/600)

第1群土器(A群)は西平式

第5群土器は御領式

第6群土器(E群)は晩期前葉

第7群土器(F群)は晩期中葉

そして、第2群から4群は三万田式に相当し、宮内氏の設定された三万田Ⅰ式、Ⅱ式、Ⅲ式¹⁶にはほぼ相当するものと思われる。ただし、西平貝塚の深鉢は第1群土器に相当し、西平式として独立させて置く必要があるだろう。

(5) おわりに

土器型式の変化という点で、最後にA-3号住居跡を考えて置く必要があるだろう。この住居跡からは、磨消縄文系、細線羽状文系が出土し、しかも前者には、RLの縄文に混ってLLやRRといった反撚りの縄文が存在したり、また文様の中に雷文という、福岡市四箇遺跡¹⁷で見受けられた文様や赤色顔料を塗彩した例があり、外来色豊かな遺構であった。また、住居内の埋甕もあって、他に例を見ない。これが、外来的影響の中で型式変化する現象の表出であり、型式が内部で変化するものとの違いかとも思われる。

以上は土器型式変化を内的と外的とに分けて考えた時の後者の場合の例として今後重要視する必要があるだろう。

2 集落構造の分析と考察

(1) はじめに

九州はおろか西日本でも、縄文集落のほぼ全容が明らかとなった遺跡は、少ないであろう。ここでは、遺構内出土土器の型式比定によって明確になった0～7期に及ぶ遺構群の形成過程を段階的に把握し、その分析を通じて集落の形成、発展、消滅という一連の動向に対し、考察を加えたいと考える。

(2) 集落の形成とその段階的意味

集落形成前段階として、第0群土器の北九根山式段階がある。A-3号住居付近に遺物が集中するが、明確な遺構は検出されておらず、その出土も量的に少ないことから、住まいというよりも一時的なキャンプとして利用した可能性が高い。

第1段階(第67図 第Ⅰ期遺構群)

A-14号住居が一軒、A地点の最も北側に形成される。本格的な竪穴住居であり、ベースキャンプとしての成立が考えられよう。

第2段階(第67図 第Ⅱ期遺構群)

A-6・8号住居及び溝状遺構、西側の土壙群が形成される。住居及び土壙群は、中央の広場の空間を考慮しており、溝は集落の西側に位置し、南側の低地に水が流れるようになっている。溝は集落中央が窪地であり、水の流れ込みを防ぐ排水用で、継続的な住まいと考えられる。

第3段階(第67図 第Ⅲ期遺構群)

A-3・4・5・10・12・13・B-1・4号住居が形成される。A地点では、中央広場の空間の南側を取り巻くように住居が並ぶ。また、B地点の東側には、新たに竪穴住居が設けられ、中央広場の空間を狭んで南北に各1軒ずつが位置していて、A地点と同様の様相を呈する。また、両地点間には20m余りの空間があって、その位置関係を保持している。

第4段階(第67図 第Ⅳ期遺構群)

A-1・2・7・11・B-2・3号住居が形成される。前段階で成立した東西2群の集落はさらに継続され、その相対的位置も変化なく保持されている。A地点では、中央広場の空間とその東側を囲む住居群が、やや南に移行して来ている。B地点では、南北から東西へと住居の位置のみが変化している。

第5段階(第67図 第Ⅴ期遺構群)

この時期は明確な竪穴住居跡を検出出来ず、A-15・20・B-9・10号土壙が確認されただ

けである。A地点では、集落の東端で検出され、B地点では、集落の西端に位置している。この時点でも、両集落の位置関係は成立しているようであるが、見方を変えるなら、今度は両集落間に存在する東西約20m余りの空間へと意識が移行して行くのではないだろうか。

第6段階（第67図 第Ⅶ期遺構群）

B-6号住居が形成される。位置的には、東西両集落の間で、前段階まで保持されて来た空間の中央に設けられる。この場合は、中央広場の空間は明確ではなく、むしろ存在していないと考えた方が良いでしょう。ここに、かつての集落は、位置と形態を大きく変えている。

第7段階（第67図 第Ⅶ期遺構群）

B-5号住居が形成される。

住居の位置は、B-6号住居の東側であり、前段階と同様の形と思われる。

以上の点を総合すると以下の様になろう。

集落形成期 第1～2段階

集落発展期 第3～4段階

集落衰退期 第5～6段階

集落廃絶期 第7段階及びその以降

また、集落形成の段階における集落の位置を考えると、3つの大きな群構成を示している。

第Ⅰ群 A地点西側集落

第Ⅱ群 B地点東側集落

第Ⅲ群 B地点中央集落

最後に各第1～7段階の解釈を記す。

第1期 キャンプからベースキャンプへの移行期であり、人間が移住した。

第2期 移住と定着により、溝を含めた上で本格的な集落形成期

第3期 定着による人口増加によって、Ⅰ群の集落からⅡ群が分かれる分立期

第4期 Ⅰ、Ⅱ群共に住居の配置が変化するが継続的な安定期

第5期 住居が未検出であり、再びベースキャンプからキャンプへの逆行期、あるいは、集落としての崩壊期

第6期 再々度のベースキャンプ地としての集落形成期、ただし5期以前の様相とは異って位置と規模に大きな変化が見受けられる。

第7期 集落として継続するが、小規模であり、やがて消滅へと向う廃絶期

（3）群構成とその解釈

集落形成を段階的に追うことによって区分出来たⅠ群～Ⅲ群は、個別あるいはその中の組み

合わせ、さらに総合化することによって、集落としての存在と意義がさらに明確となろう。よってここでは、住居やその他の遺構をも考え合わせる必要があろう。

(a) 中央広場の存在

I群とII群に広場は存在しており、共に十数m四方のもので、特にI群ではピット群や土壇群が見られる。ピットはその並びを抽出出来ないが、直径20cm前後の小さいものが多く、簡単な構造の建物が存在した可能性は高い。また、I群では、住居よりも中央寄りに屋外炉が3基あり、II群では屋外炉1基と集石遺構があって、それらは調理に関する遺構であり、食生活における共同使用が考えられよう。つまり、広場は住居以外の建物や調理の場であり、共同作業の場としてより公共的な空間と考えられる。

(b) 屋外炉と集石遺構

屋外炉は、I～IV群の全てに設けられ、集石遺構はI群とII群に存在する。前項でも述べたように、両者は組合せた機能が考えられ、縄文人の食を支えていた調理用の遺構であり、公的な存在である。また、I群の集石に混って石棒が出土しており、公的機能をさらに高める祭祀という儀礼行為が行われもした。つまり、各群は、食すことを中心に、個々の群で独立していたことが窺えよう。

(c) 屋内炉の有無

個々の住居内に存在する屋内炉は、屋外炉とは異なり、調理よりも屋内での暖を取るものである。しかし、その形態は不整型で、痕跡は不明確で焼土を残すのみである。しかも、設置されたものとそうでないものがある。

炉は1軒の住居内において、暖を取りつつ、家族の語らう場であり、最も大切なものである。それにも係わらず粗略な形でしか存在しないのは何故か、この解釈として、長期間の埋没状況に耐えることなく消滅するような、例えば木材で組んだ炉枠という上部構造の存在が考えられよう。A-3号住居の炉の周辺で小ピットが数基程存在しており、上部構造の支柱的役割を有するものとも考えられる。また、炉の設置の有無は、住居の機能そのものの差か、季節的な問題との関係か、現在その両者が考えられる。前者では、寝食用の住まいと昼間のみ必要な作業場の住居の差と考え、後者では、暖を必要としない春夏秋用と越冬のための住まいの違いと考えられよう。

以上のように、少なくとも各群は、食料を加工しそれを食す点、広場で共同作業を行ない、個々の家で寝食を共にする家族とその団らんとしての住まい、また何らかの作業を行う住居という点では独立しているが、食料の確保を中心としたより規模の大きな労働、特殊な石材確保を中心とする他村との交易等に関しては、IとII群は共同作業を行うと考えられる。ただし、III群は少規模化しており、その行動範囲や労力といったものはかなり縮小化傾向にあると思われる。

(4) 集落の形成過程での画期

集落形成期は、北九根山式から西平式の段階で他の集落からの移住によって開始される。当初は数多いキャンプの1地点にすぎなかった場所を人々の住まいにしたわけである。嘉穂地方の縄文遺跡を見た場合、先の型式に相当する例はほとんどなく、北九根山式、西平式前後の型式のものが後期を代表する。また嘉穂町内の遺跡でもその両型式の前後が出土している。

従って、集落形成期及びそれ以前は、かなり人々の移動があり、明確な規模と内容を持ったしっかりした集落は形成されなかったかもしれない。そうなれば、嘉穂地方での縄文後期後半における一つの画期と言えるかもしれない。

集落発展期は第3段階における集落の分立を大きな画期と見なければならない。分立の要因は、集落内の人口増でありその解決法としては、2群1単位で半ば独立的な生活を行うことが考えられた。さらにその形態が東日本の集落形態に近似していることを考える必要がある。ただし、それ以上の人口増加は、自然採集段階においてこの地域では困難であり、それは規模の拡大化が継続しない点からも明らかである。また、人口増加の状況は、おびただし打製石斧の存在からも窺えよう。集落生活の安定状況は、A-3号住居内における雷文や赤色顔料の塗彩が施された土器、反撚り縄文の施文土器、細線羽状文の使用と拡大化、そして住居内埋没土器の存在が示す多様な様相に加えこの時期の住居の床面積が最も大きい点から判断出来る。特に遺物の多様性は、福岡市の四箇遺跡に同様のものが見られ、さらに埋設土器の存在及びその埋設法等は、まさに東日本縄文文化の影響と言えよう。つまり、安定期は、遠方との交流の開始期であり、他地域にも広く生活の糧を求めた結果であろう。嘉穂地方でも、この時期の遺跡は筑穂町北古賀をはじめ飯塚市目尾等に広く見られ、前者は規模的にも大きいようである。

集落衰退期は、第5段階であり、人口増加現象と自然採集経済の限度によって生じる矛盾によって衰退へと追い込まれる一方で、新しい経済段階の接近と、それに伴う集落立地の変化による矛盾解決方向へと向う段階である。

集落廃絶期は、まさに経済基盤変革の前夜であり、人々は低地へとその居住を変えて行くことが原因と思われる。

以上をもって本書のまとめとしたい。なお、調査期間中に御指導と御教示をいただいた別府大学長、賀川光夫先生、また、期間を通じて御指導いただいた福岡県教育庁指導第二部文化課技術主査、小池史哲氏に対し記して感謝の意を表します。

なお文末であるが、昭和63年度に調査した遺跡はアミダ遺跡以外に嘉穂町大字馬見字本村の本村東遺跡(弥生中期と中世)、大字馬見字二本楠(古墳時代と中世)、大字千手字アミダのアミダ南遺跡(弥生後期と古墳時代初頭)と3ヶ所の発掘調査を行なったが、紙面の都合上から今回は割愛し、次回の嘉穂町文化財第11集で通常の報告を行いたい。なお、調査地区の遺構

配置図のみ付図とし、その概観を示して置く。

註1. 深野憲智先生の御教示を得た。

2. 海進によって、遠賀川下流域より古遠賀湾が深く入りこんだ湾奥に貝塚が形成されており、現在の直方市付近が湾奥となっている。

3. 安田喜憲 「気候変動」縄文文化の研究1 縄文人とその環境 雄山閣 1982

4. 潮見 浩 「北古賀遺跡」 嘉穂地方史先史編 元野木書店 1973

5. 注4に同じであり、「嘉穂地方文化」の中に記されている。

6. 福島日出海 「嘉穂地遺跡群Ⅲ」 嘉穂町文化財調査報告書第6集 嘉穂町教育委員会 1986

7. 注4に同じ

8. 注4に同じで、2点出土した玉の2番の方である。

9. 器面の装飾文様と磨消縄文や偽縄文、細線羽状文は異なった時限で考える必要がある。

10. 縄文と偽縄文の前後関係は、前者があって後者が出現するものであり、逆の場合は考えにくい。

11. 本遺跡跡より出土した土器の器面に施された縄文は数片以外全てRLであり、条の方向は細線羽状文と逆になる。そこで、羽状文の出現はLRを施す地域である可能性が高いと思われる。

12. 戸田哲也 「縄文」 縄文文化の研究5 縄文土器Ⅲ、雄山閣 1983

13. 二宮忠司他 「縄文時代後期の遺物」 四箇遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集 福岡市教育委員会 1987

14. 注4に同じであり、瀬戸内地方の後期末の浅鉢形土器と比較してある。

15. 注13に同じであり、誠瀬正和「四箇遺跡出土の赤彩土器について」の中で述べられている。

16. 宮内克己 「三万田式土器の研究」 古文化談叢8 九州古文化研究会 1981

17. 注13に同じ

18. 福島日出海 「榎町遺跡他」 「嘉穂地区遺跡群Ⅲ」 嘉穂町文化財調査報告書第5集、第6集

19. 注4に同じ

20. 注4に同じ



1



2

- 1 アミダ遺跡全景(空中写真)
- 2 アミダ遺跡A地点全景(空中写真)



1

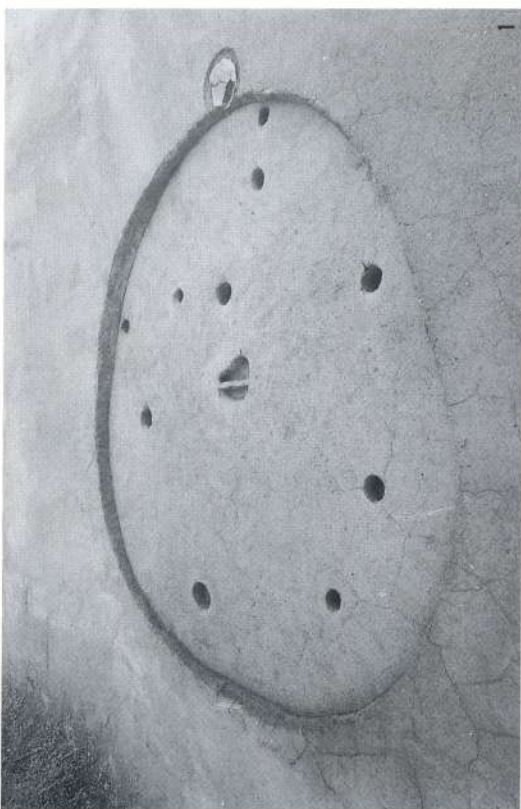


2

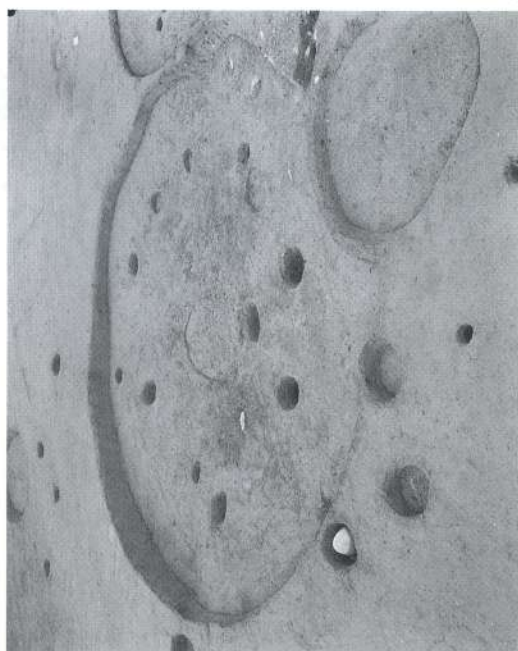


3

- 1 アミダ遺跡A地点西側近影
2 " " 中央部近影
3 " " 東側近影



1 A-1号居住迹
2 A-2号居住迹



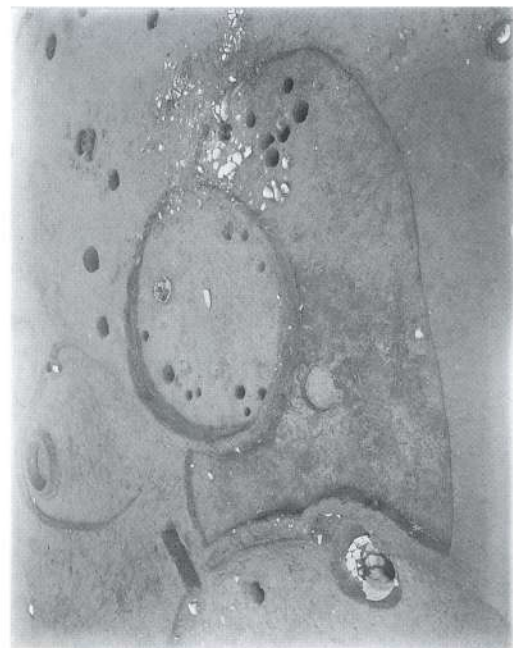
3 A-3号居住迹
4 A-4号居住迹



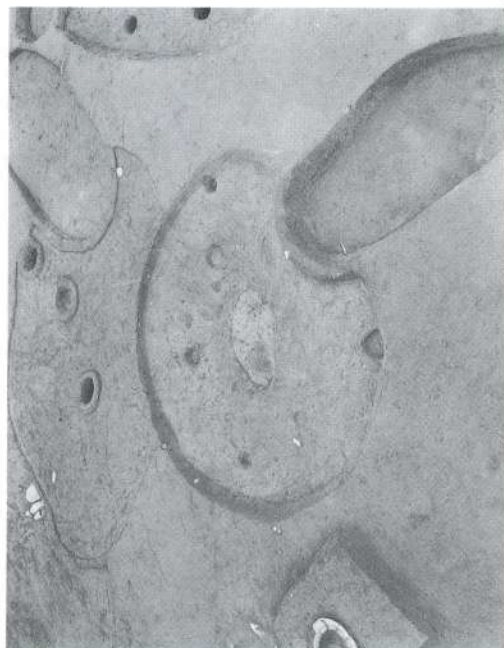
1



2



3



4

3 A-10号住居跡
4 A-11号住居跡

1 A-5号住居跡
2 A-6, 7, 8号住居跡



1



2



3



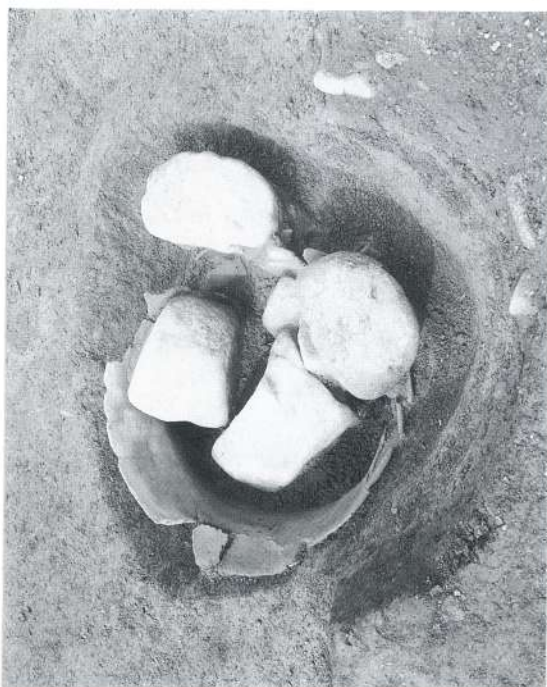
4

3 A-1号土坑

4 A-20号土坑

1 A-12号住居跡

2 A-13号住居跡



1



2

1 A-3号住居跡内埋設埋甕(A-6埋)出土状況
2 " " 埋甕整掃状況

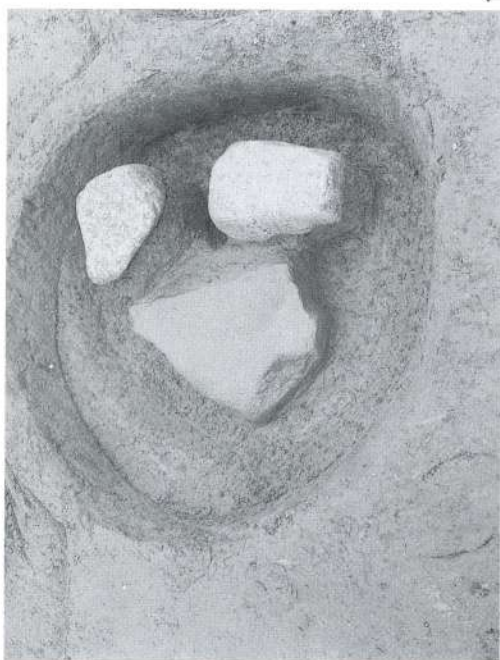


3

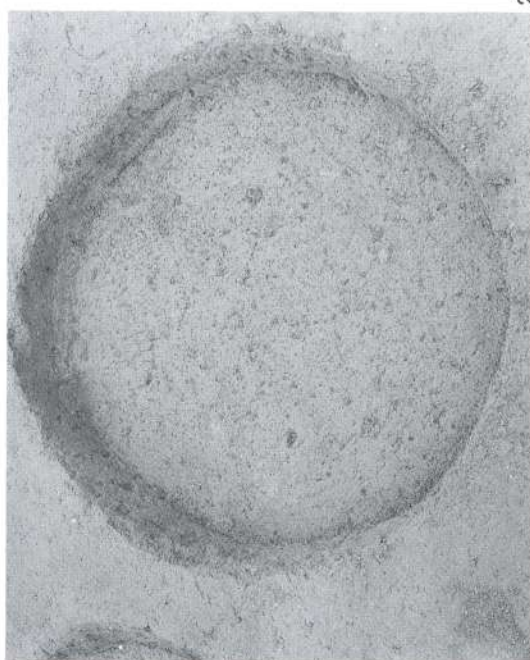


4

3 溝状遺構
4 4号屋外炉



1



2



3



4

1 2号屋外炉
2 3号屋外炉

3 A地点発掘区北西の土壌群
4 21号土壌



1



2

1 A-10号住居跡内埋設埋甕(A-10埋)
2 A-1号屋外埋甕



3



4

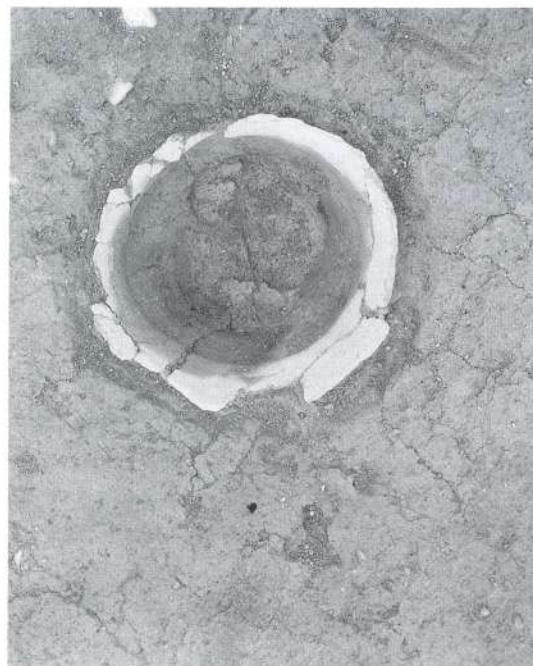
3 A-2号屋外埋甕
4 A-3号屋外埋甕



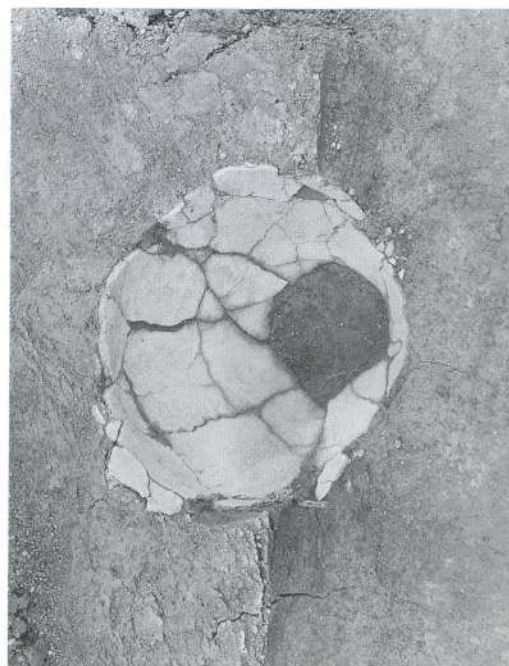
1



2



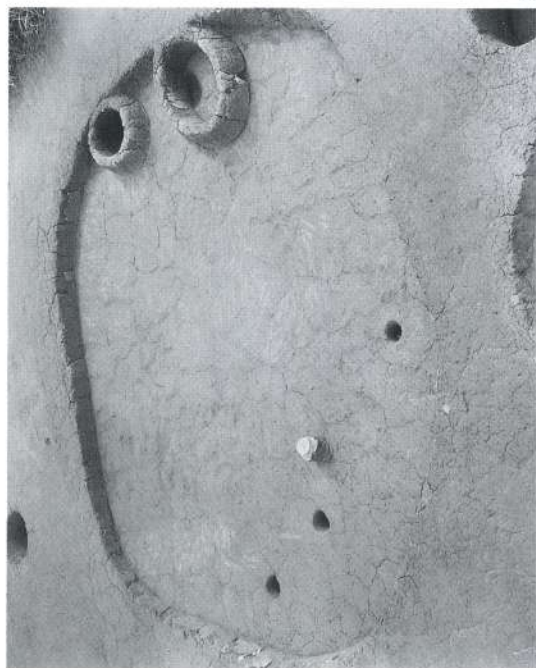
3



4

1 A-5号屋外埋藏
2 A-7号屋外埋藏

3 B-1号屋外埋藏
4 B-2号屋外埋藏



3

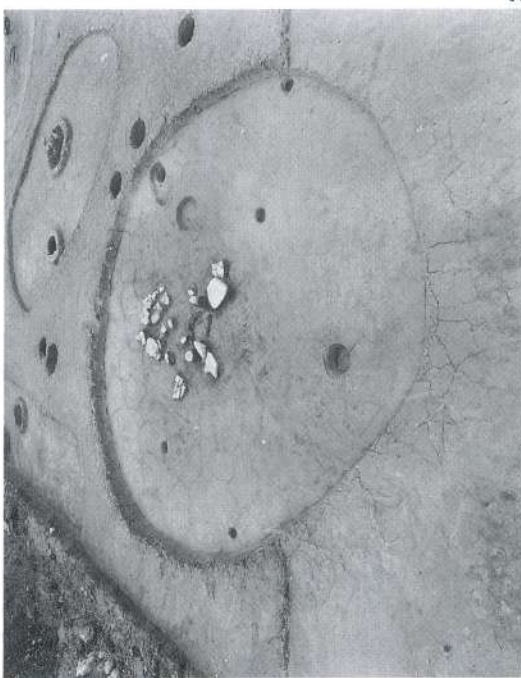


4

3 B-3号住居跡
4 B-4号住居跡



1



2

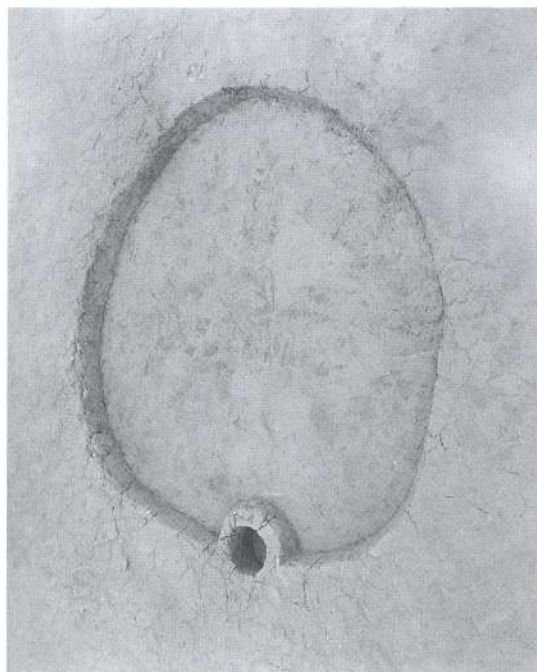
1 アミダ遺跡B地点近景
2 B-1号住居跡



1



2



3



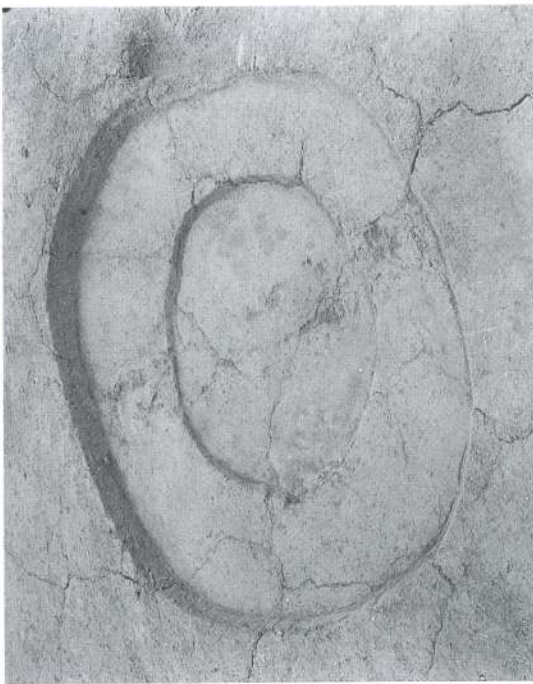
4

1 B-5号住居跡
2 B-6号住居跡

3 B-2号土壇
4 B-3号土壇



1



2

1 B-12号土坑
2 B-1号屋外炉

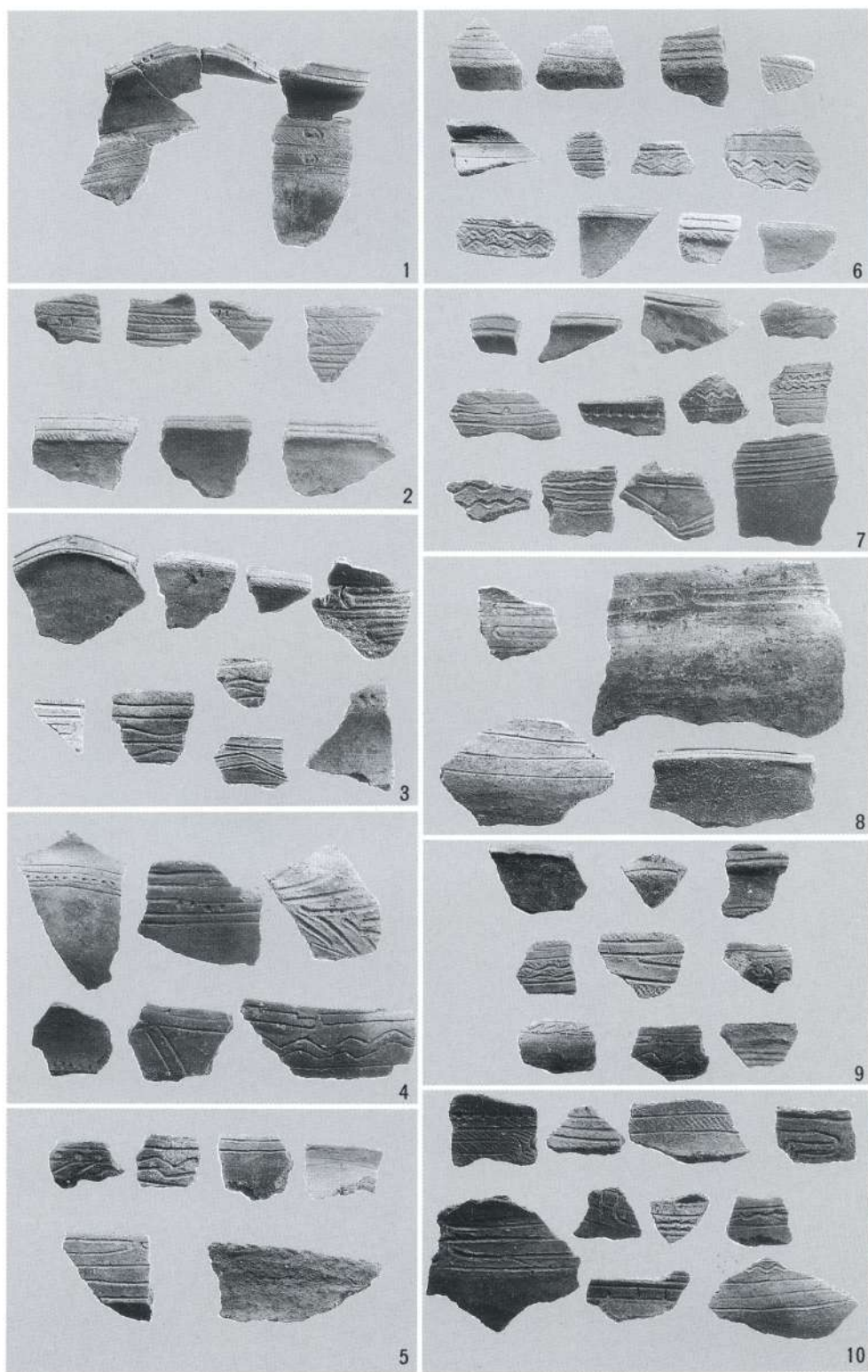


3

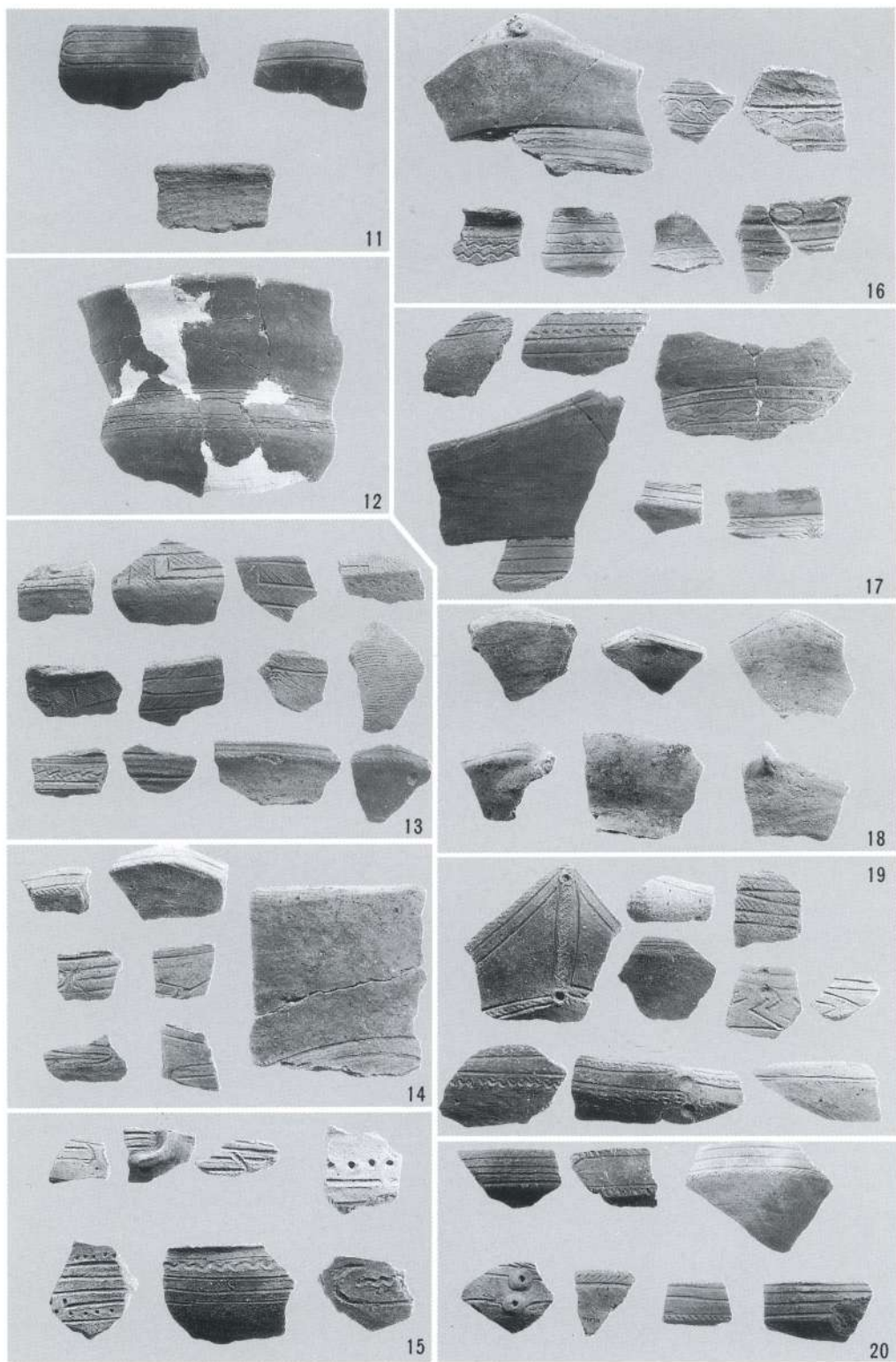


4

3 B-2号屋外炉
4 B-6号住居跡埋設埋藏(B-3埋)

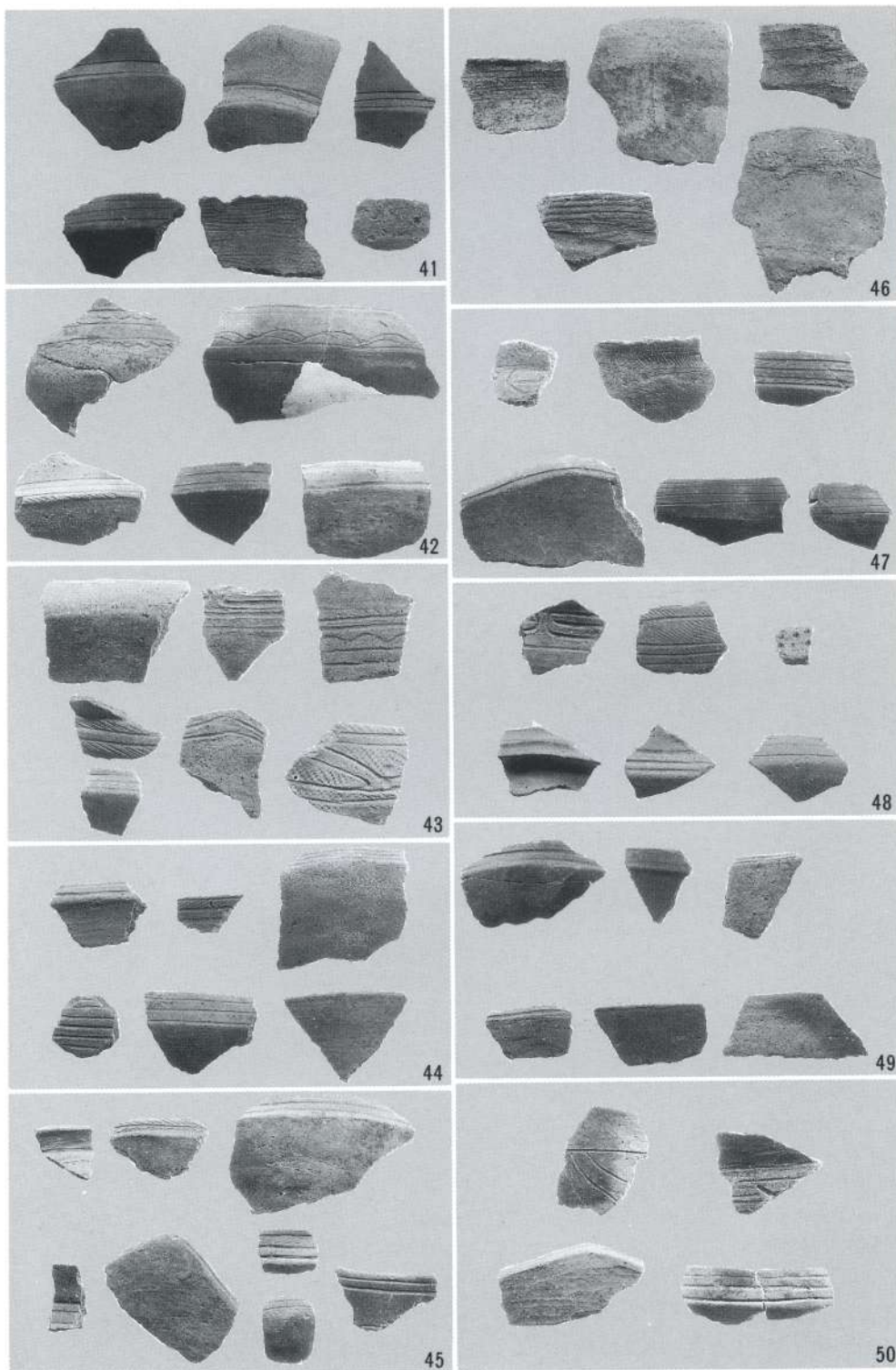


1 ~ 5 A-14号住居内出土土器 (以下拓影資料)
 6 ~ 9 A-8号住居内出土土器
 10 A-6号住居内出土土器



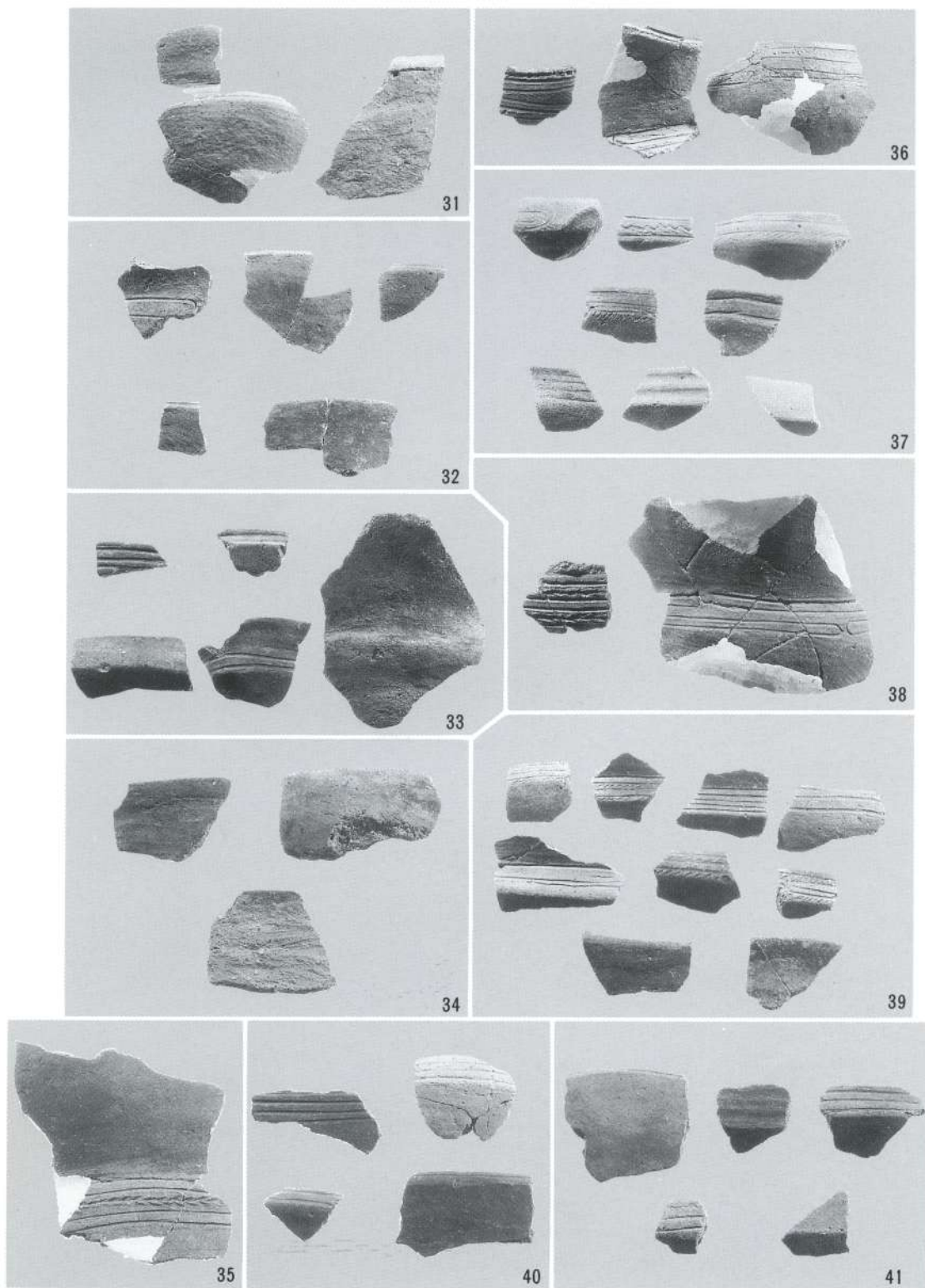
11 A-6号住居内出土土器

12~20 A-3号住居内出土土器



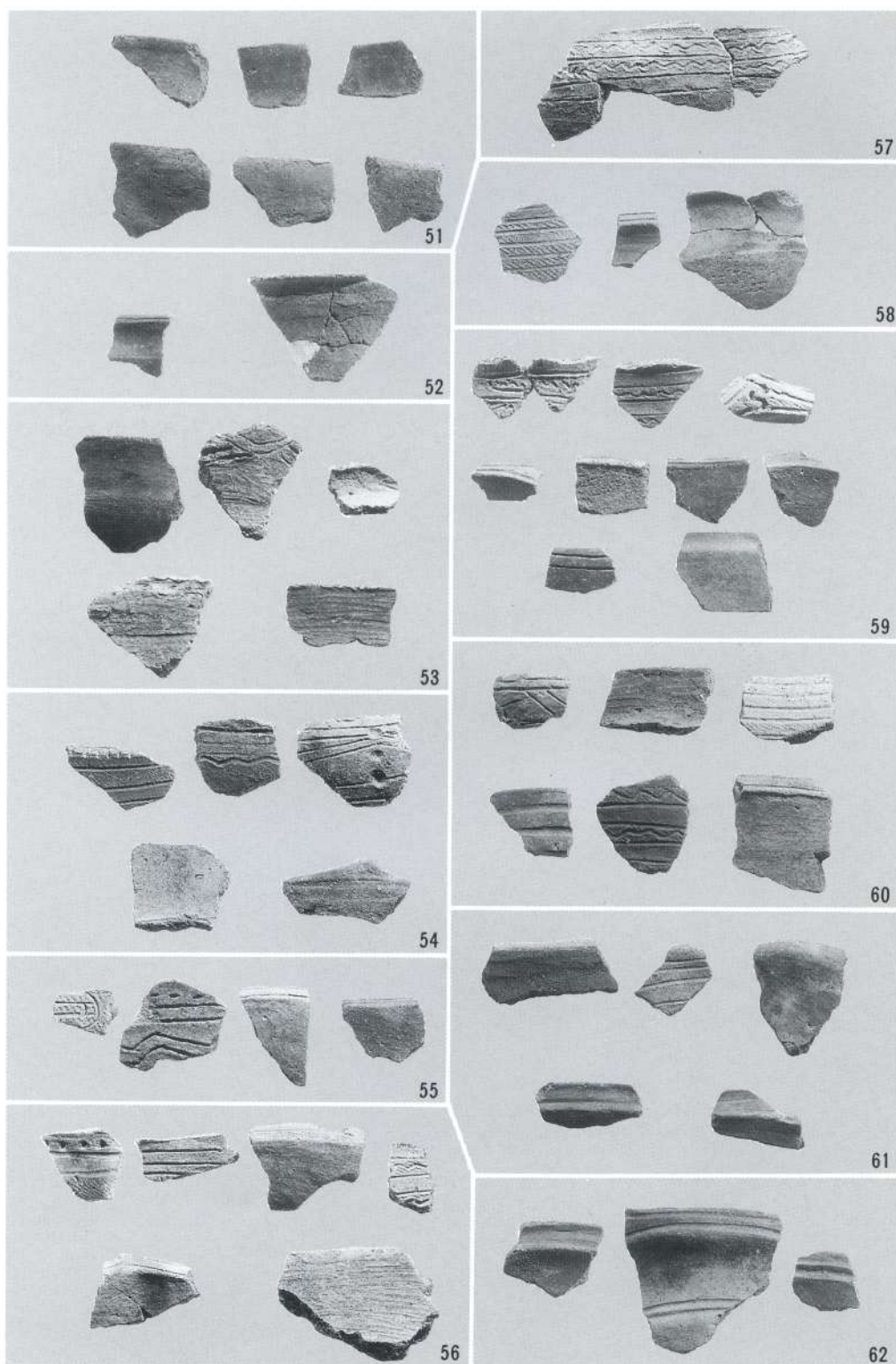
41 A-3号住居内出土土器
42 A-4号住居内出土土器
43, 44 A-5号住居内出土土器

45, 46 A-10号住居内出土土器
47 A-12号住居内出土土器
48, 49 A-1号住居内出土土器
50 A-2号住居内出土土器



31 A-2号住居内出土土器
32 A-7号住居内出土土器
33, 34 A-11号住居内出土土器

35~37 B-4号住居内出土土器
38, 39 B-1号住居内出土土器
40 B-2号住居内出土土器
41 B-3号住居内出土土器



51 B-3号住居内出土土器

52 B-5号住居内出土土器

53 A-3号住・ビット埋土内出土土器

54 A-1号土壌内出土土器

55 A-2号土壌内出土土器

56, 57 A-6号土壌内出土土器

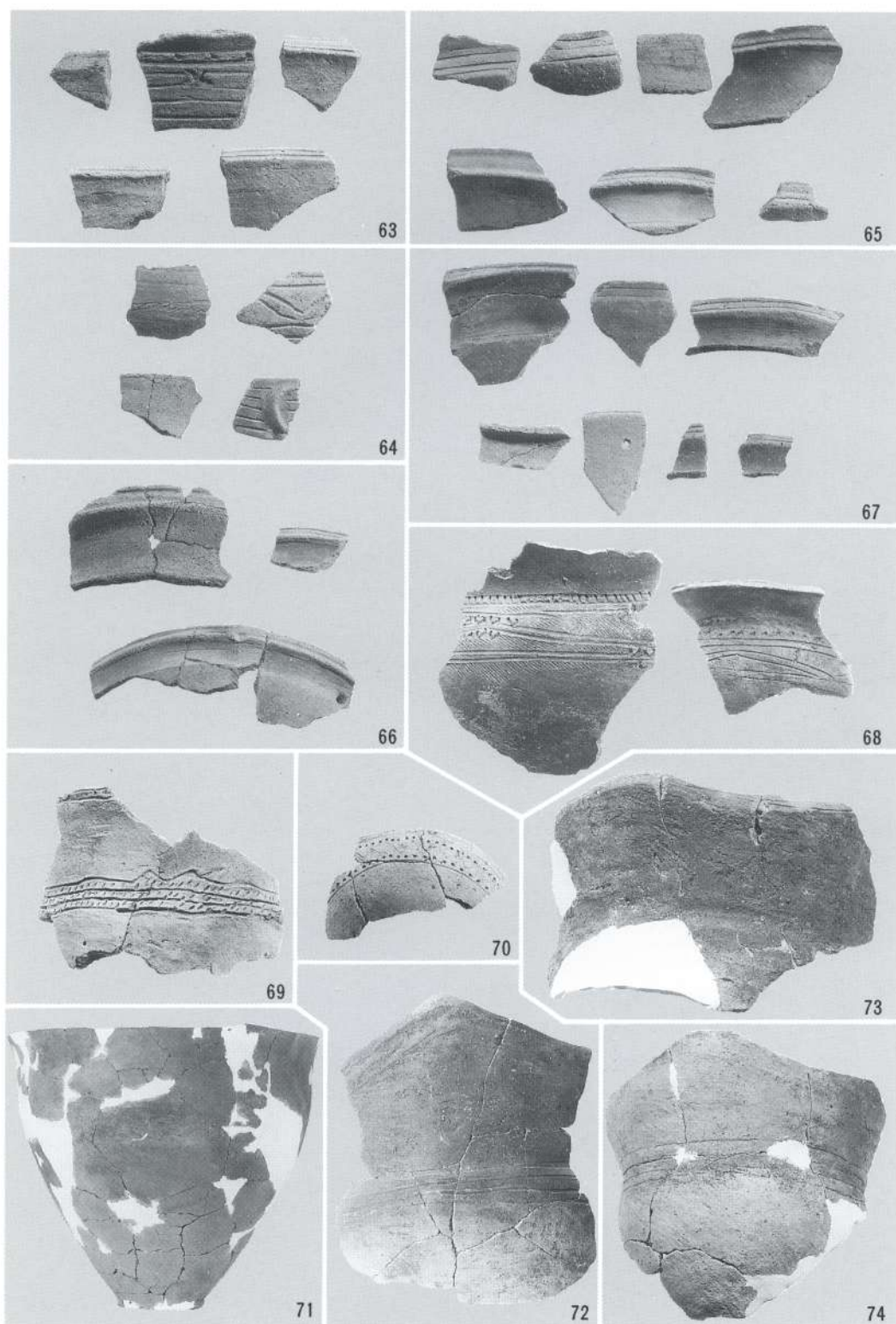
58 A-7号土壌内出土土器

59 A-25号土壌内出土土器

60 A-26, 31, 46号土壌内出土土器

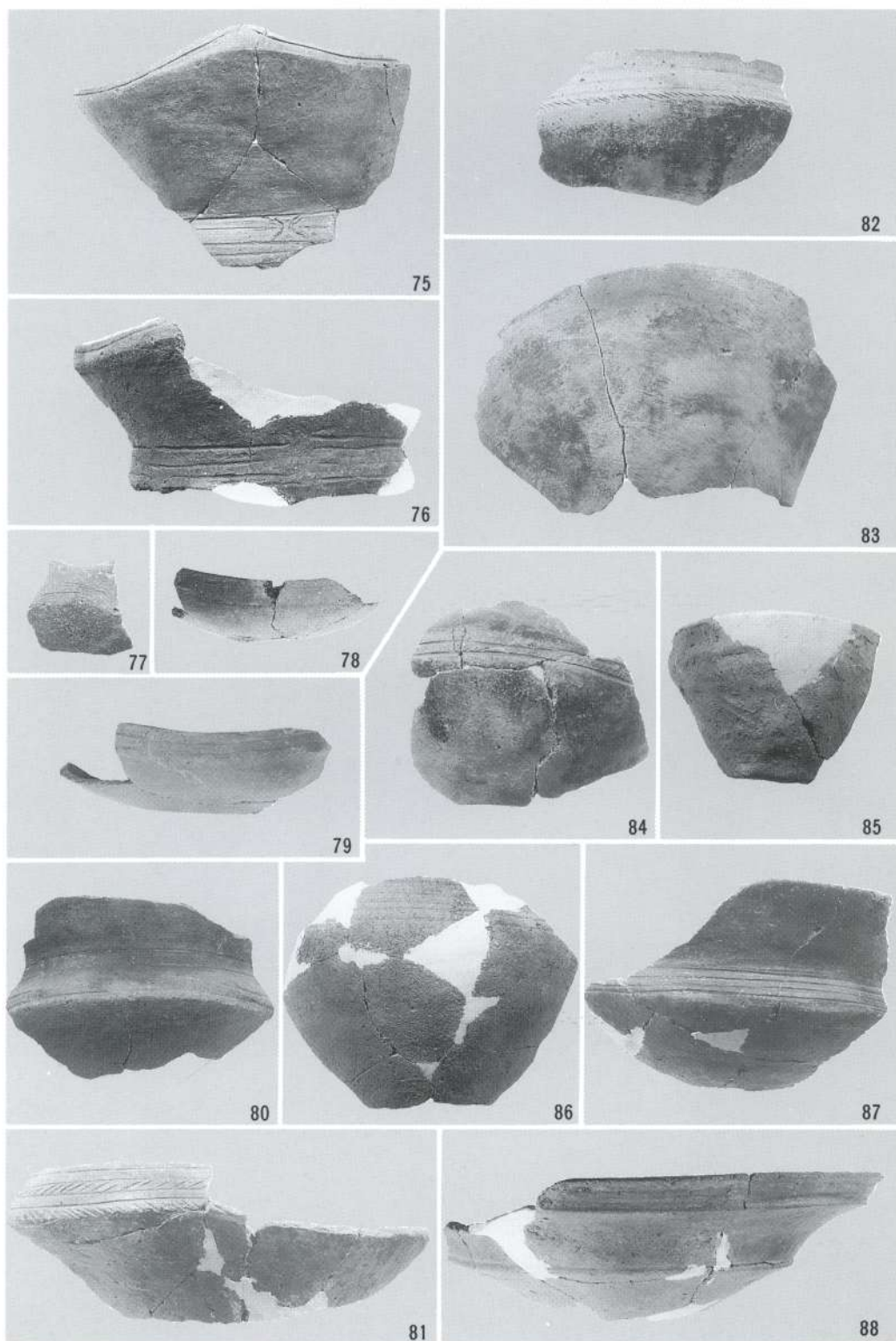
61 A-20号土壌内出土土器

62 A-15号土壌内出土土器



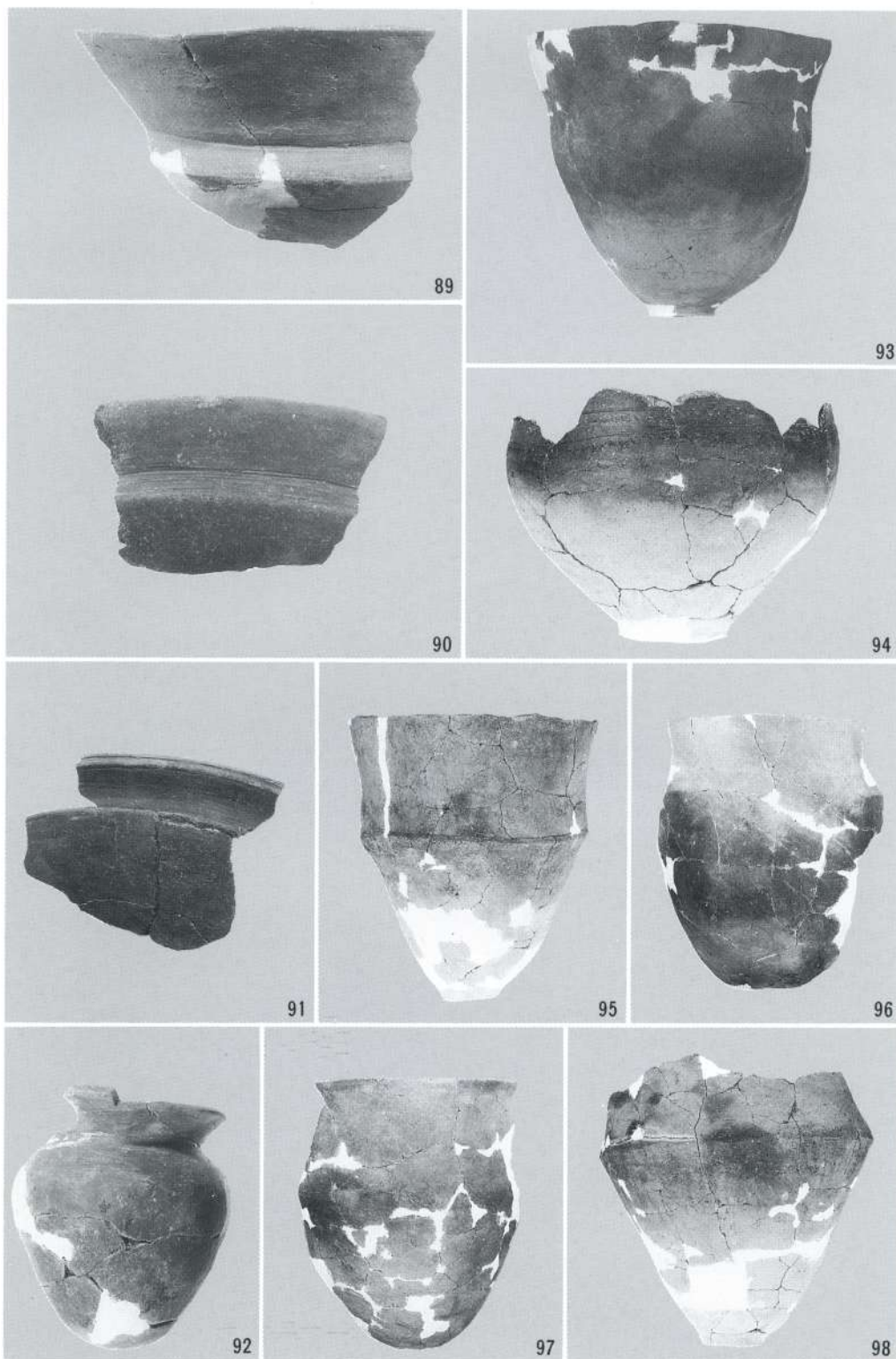
63 溝状遺構内出土土器
64 B-8号土境内出土土器
65 B-3, 9, 10号土境内出土土器
66 B-13号土境内出土土器

67 B-13, 14号土境内出土土器
68~71 A-14号住居内出土土器 (以下実測資料)
72~74 A-8号住居内出土土器



75~79 A-3号住居内出土土器
80, 81 A-4号住居内出土土器
82, 83 A-5号住居内出土土器

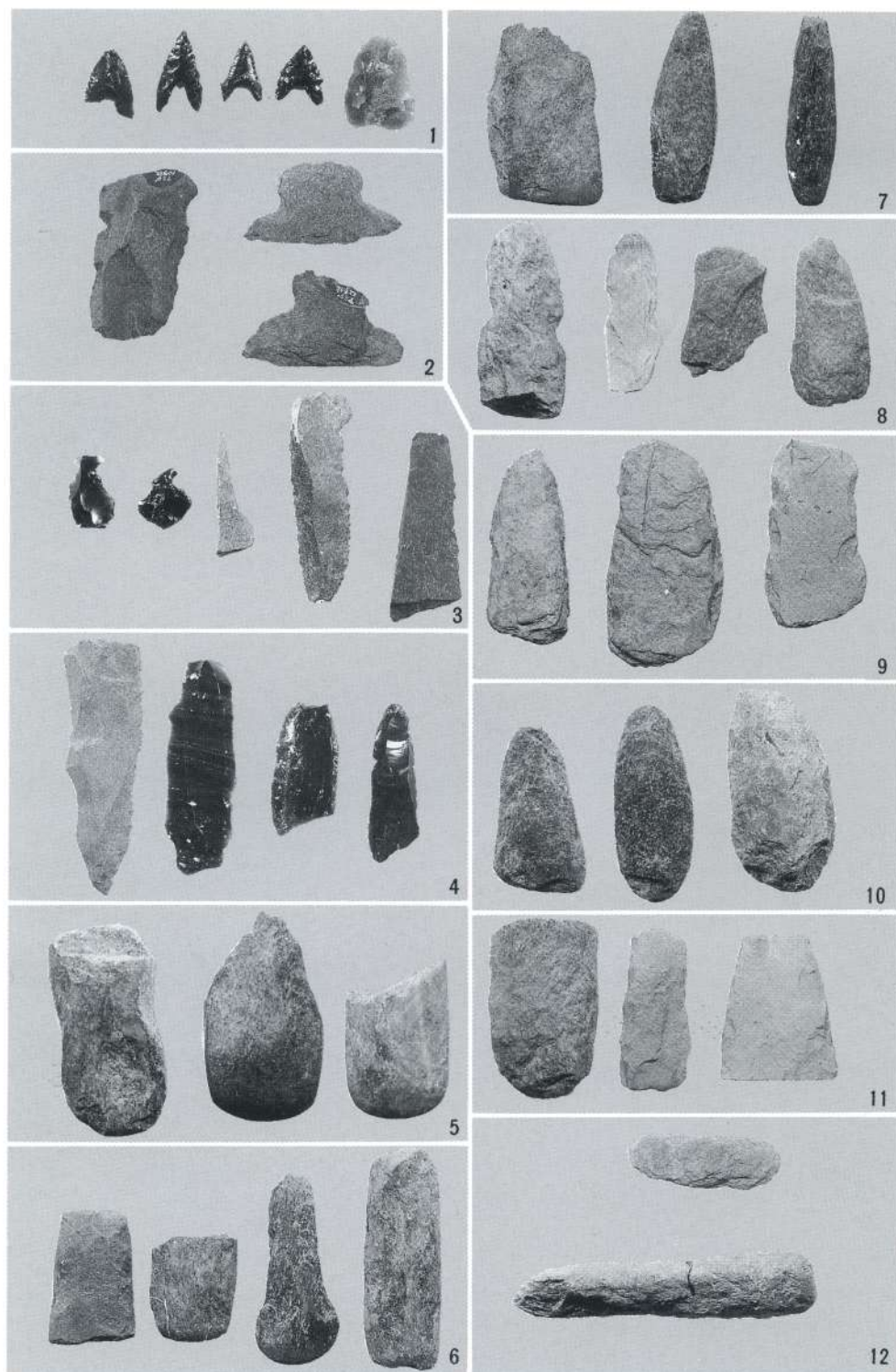
84, 85 A-10号住居内出土土器
86 A-12号住居内出土土器
87 A-1号住居内出土土器
88 A-11号住居内出土土器



89 B-4号住居内出土土器
90 B-1号住居内出土土器
91 B-6号住居内出土土器

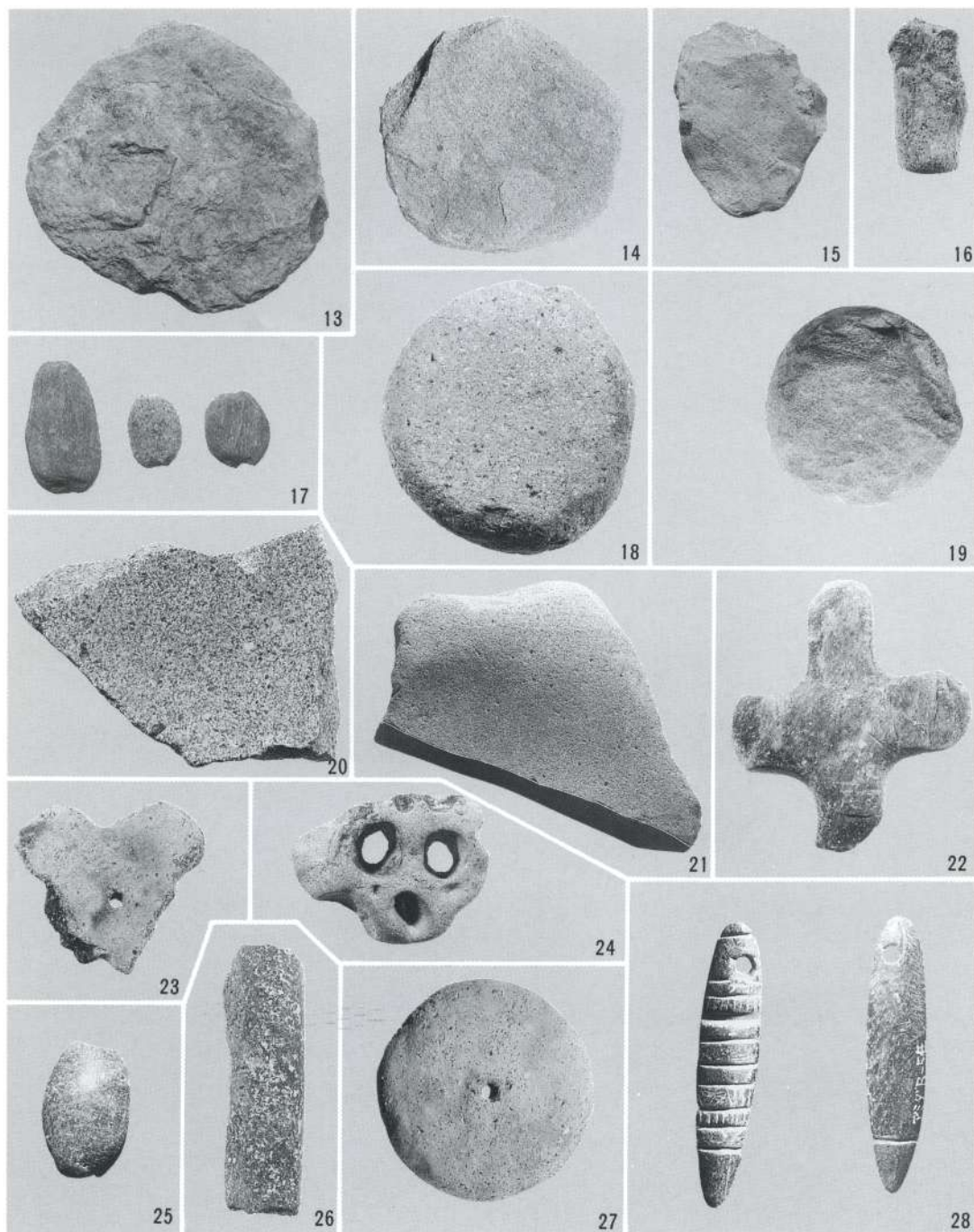
92 B-5号住居内出土土器
93 A-6埋甕
94 A-10埋甕

95 B-6埋甕
96 A-3埋甕
97 A-4埋甕
98 A-7埋甕



1～3 遺構内出土石器(1)
 4 遺構内出土石器(2)
 5～7 遺構内出土石器(3)

8～10 遺構内出土石器(4)
 10～12 遺構内出土石器(5)



13～15, 17～20 遺構内出土石器(6)

21 遺構内出土石器(7)

16, 22, 23, 26 遺構内外出土石器, 石製品, 土製品(8)

24, 27 遺構内外出土石器, 石製品, 土製品(9)

25, 28 遺構内外出土石製品〔石製垂飾品〕(10)